罪と罰「3」（ドストエフスキー）

第三篇

一

ラスコーリニコフは身を起こして、長椅子の上にすわった。

彼はラズーミヒンに手を一振りして、母と妹に対するとりとめのない熱心な慰めのことばを中止させた後、二人の手をとって、二分ばかり無言のまま、かたみに二人の顔に見入った。母は彼のまなざしにぎょっとした。このまなざしには苦しいほど強烈な感情があったが、同時にまた何かしら凝り固まったような、むしろもの狂おしくさえ感じられるような、あるものが透いて見えた。プリヘーリヤ・アレクサンドロヴナはさめざめと泣き出した。

アヴドーチャ・ロマーノヴナは青ざめた顔をしていた。彼女の手は兄の手の中でわなわな震えた。

「もう帰ってください……この男と一緒に」と彼はラズーミヒンを指しながら、きれぎれな声でいった。「あすまた。あす何もかも……もうだいぶ前に着いたんですか？」

「夕方だったよ、ロージャ」とプリヘーリヤは答えた。「汽車が大変遅れてね。だけどロージャ、わたしは今どんなことがあっても、お前の傍を離れやしないよ！　わたしはここに泊まります。お前の傍に……」

「僕を苦しめないでください！」と彼はうるさそうに片手を振り、いら立たしげに言った。

「僕がそばに残りますよ！」とラズーミヒンは叫んだ。

「一刻も離れやしません。うちの客なんかどうとも勝手にしやがれだ！　あっちの方は伯父が采配を振ってくれるから」

「まあ、なんとお礼を申していいやら！」またラズーミヒンの手を握りながら、プリヘーリヤは言いかけたが、ラスコーリニコフがまたもやそれをさえぎった。

「たまらない、たまらない！」と彼はいら立たしげにくり返した。「僕を苦しめないでください！　もうたくさんです、帰ってください……たまらない……」

「行きましょうよ、お母さん、ちょっと部屋の外へだけでも」ドゥーニャはおびえたようにささやいた。「わたしたちは兄さんを苦しめてるのよ、それは様子でわかるわ」

「じゃ、しみじみ顔も見られないのかね、三年も別れていたのに！」とプリヘーリヤは泣き出した。

「待ってください！」と彼はまた二人を呼び止めた。「みんな邪魔ばかりするものだから、頭がごっちゃになってしまう……ルージンに会いましたか？」

「いいえ、ロージャ、まだよ。でも、あの人はわたしたちの着いたことを、もう知っているんだよ。聞けば、ロージャ、ピョートル・ペトローヴィッチがご親切に、今

日お前を訪ねてくだすったそうだね」いくらかおずおずした調子で、プリヘーリヤはこういい足した。
「そう……ご親切に……ねえ、ドゥーニャ、僕はさっきルージンに、階段から突き落とすぞと言ってやったよ。そして、おとといい来いと追い出しちゃった……」
「ロージャ、なにを言うのお前は？　きっと……お前はその……言いたくないんだろう」と驚きのあまりプリヘーリヤは言いかけたが、ドゥーニャの顔を見ると口をつぐんだ。
　アヴドーチャは兄の顔をじっと見入りながら、その先を待っていた。二人は早くもナスターシャの口から、彼女の判断で伝えうる限り、この衝突のことを聞かされていたので、疑惑と期待の念にさんざん心を痛めたところであった。
「ドゥーニャ」とラスコーリニコフは苦しげにことばを続けた。「僕はこの結婚に不賛成だ。だから、お前もあす第一番にルージンを断わってしまえ、あいつのにおいも家の中にしないように」
「まあ、どうしよう！」とプリヘーリヤは叫んだ。
「兄さん、あなた何を言ってらっしゃるか、まあ考えてごらんなさい……」とアヴドーチャはかっとなって言いかけたが、すぐに自分を抑えた。「兄さんは今そんなこと考えられないんだわね。疲れてらっしゃるのよ」と彼女はつつましやかに結んだ。
「熱に浮かされてるって？　ちがう……お前は僕のためにルージンと結婚しようとしてるんだ。だが、僕はそんな犠牲を受け入れるわけにいかない。だから明日までに手紙を書け……拒絶の手紙を……そして朝ぼくに読ませてくれ、それで片付くんだ！」
「そんなことできませんわ、わたし！」と妹はむっとして言った。「いったいどんな権利があって……」
「ドゥーネチカ、お前も気が短いね、およしよ、明日のことだよ……お前いったいあれが見えないの……」と母はドゥーニャの方へ駆け寄りながら、びっくりしてこう言った。「ああ、いっそ早く帰ろうよ！」
「うわ言を言ってるんですよ！」と酔の回ったラズーミヒンがどなった。「でなきゃ、どうしてあんなむちゃがいえるもんですか！　明日になりゃ、あんな馬鹿げた気まぐれはふっ飛んじまいますよ……もっとも、今日あの人を追い出したのは本当なんです。それはその通りです。ところが、先方でも怒りましたね……それから一場の演説をして、自分の知識を見せびらかしたが、結局、しっぽを巻いて帰っちまいましたよ……」
「じゃ、あれは本当なんですね？」とプリヘーリヤは叫んだ。
「では、兄さん、明日またね」とドゥーニャは同情をおもてに現わしながら言った。「行きましょう、お母さん……さよなら、ロージャ！」
「いいかい、ドゥーニャ」と彼は最後の力をふるいながらくり返した。「僕は熱に浮かされてるんじゃないよ、この結婚は卑劣だ。たとい僕は卑劣漢にもせよ、お前はそうなっちゃいけない……二人のうちどちらか一人だ…

…僕は卑劣漢だが、そんな妹は妹と思わないぞ。僕を取るか、ルージンを取るかだ！　さあ、もう行くがいい……」

「いったいきさま、気でも狂ったのか、暴君め！」とラズーミヒンはどなりつけた。

けれど、ラスコーリニコフはもう返事しなかった。事によったら、答える力がなかったのかもしれない。彼は長椅子の上へ倒れると、ぐったり壁の方へ向いてしまった。アヴドーチャは好奇のまなざしでラズーミヒンを見つめた。彼女の黒い瞳（ひとみ）は輝いた。ラズーミヒンはこのまなざしに射られて、思わず身震いした。プリヘーリヤは雷にうたれたように突っ立っている。

「わたしどうしても帰るわけにいきません！」と彼女はほとんど絶望の調子でラズーミヒンにささやいた。「わたしはここに残ります、どこかそこいらに……あなたドゥーニャだけ送ってくださいましな」

「それじゃ何もかもぶちこわしですよ！」とわれを忘れてラズーミヒンは同じくささやくように言った。「せめて階段までも出ましょう。ナスターシャ、あかりをお見せ！　僕ちかっていいますが」もう階段の上へ出てから、彼は半ばささやくような声で続けた。「実は先生さっきもわたしたちを、僕とドクトルとを、なぐりつけないばかりだったんですよ！　え、おわかりですか！　医者でさえそうなんですよ！　で、医者は興奮させちゃいけないといって、帰ってしまいました。僕は下で番していたところ、先生その間に着がえをして、すべり抜けてしまったんです。だから今でも、あまりいらいらおさせになると、またすべり抜けて行って、よる夜なか何をしでかすかしれませんよ……」

「まあ、何をおっしゃるんですの！」

「それに、アヴドーチャ・ロマーノヴナにしても、あなたがいらっしゃらなくては、一人で下宿にいられやしませんよ！　が、考えてもごらんなさい、あなた方は、なんて所に泊まっていらっしゃるんでしょう！　あの恥しらずのルージンて男も、あなた方のためにもう少しどうかした宿が捜せなかったものかなあ……いや、もっともごらんの通り、僕少し酔ってますから……つい悪口をつきましたが、どうかお気になさらないで……」

「でも、わたしはここのおかみさんのところへ行って来ます」とプリヘーリヤは言い張った。「わたしとドゥーニャを今晩だけ、どんな隅っこへでも泊めてくれるように、一生懸命たのんでみます。わたしはあれをこのままおいて行かれません、どうあっても！」

こんな話をしながら、彼らは階段の上の踊り場に立っていた。それはおかみの住まいの入り口のすぐ前だった。ナスターシャは一段下から彼らに灯（あかり）を見せていた。ラズーミヒンは一方（ひとかた）ならず興奮していた。

半時間前、ラスコーリニコフを送って来た時は、自分でも白状した通り、余計なことにおしゃべりだったが、この晩のんだ酒がおびただしい量であったにもかかわらず、恐ろしく元気で、ほとんどしらふ同然だった。しかるに今の彼の心理状態は、何かまるで歓喜とでもいうべ

きものに似通っていた。と同時に、これまで飲んだ酒がすっかり、新たに倍加された力をもって、一時に頭へ上ったような具合だった。彼は二人の婦人と並んで立ちながら、二人の手をつかまえて、どうかして説き伏せようと、驚くばかり打ち明けた調子で、いろいろ理由を並べて見せた。しかも、一そうそれを確かめるためだろう、ほとんど一語ごとに、二人の手をぐいぐいと、締め木にでもかけるように、痛いほど握りしめた。そして一こう遠慮する風もなく、アヴドーチャ・ロマーノヴナをむさぼるように見つめるのであった。二人は痛さのあまり、ときおり彼の大きな骨ばった手の中から、その手を振りほどこうとしたが、彼はなんの事か気がつかなかったのみならず、かえって一そう強く引寄せるのであった。もし今二人が彼に向かって、自分たちのために階段からまっさかさまに飛べといったら、彼はいささかも疑おうとせず、文句なしに、早速それを実行したに相違ない。ロージャのことが心配で気が気でないプリヘーリヤは、ひどく常規を逸したこの青年が、むやみにぎゅうぎゅう手を締めつけるのに気づいてはいたが、彼女にはこの男が神さまのように感じられたので、そうした突飛な動作を気に止めたくなかった。けれど、同じ不安に苦しめられていながら、アヴドーチャの方は、さして気の小さい方でもなかったけれど、この荒々しい火に燃える兄の友のまなざしを、驚きというよりむしろ恐怖の感じをもって迎えた。ナスターシャの話で吹き込まれたこの不思議な男に対する無限の信頼がなかったら、母の手を引っ張って傍を逃げ出したに相違ない。とはいえ彼女は、自分たちがこの男から逃げ出すわけにいかないことも、やはり悟っていた。やがて十分もたつと、彼女は目に見えて落ち着いてきた。ラズーミヒンは、どんな気分でいる時でも、自分のすべてを一瞬の間に表明する特性を持っていた。で、誰でもがすぐ相手の人となりを見抜くのだった。

「おかみさんのところなんか駄目ですよ、それこそ愚の骨頂です！」プリヘーリヤを説き伏せようとして、彼は叫ぶのであった。「よしあなたがお母さんであるにもせよ、ここに残っていらっしゃると、ロージャを気ちがい同様にしてしまいますよ。そうなったら、どんなことになるかしれたもんじゃない！　どうです、僕こうしましょう。今さしずめ、あすこにナスターシャをつけといて、僕があなた方をお送りしましょう。二人きりで町をお歩きになるわけにゃいきません。このペテルブルグってところは、そういう点では……いや、そんな事はどうでもいい！　それから、あなた方のところからすぐここへ引っ返して、十五分もたったら、誓ってまたあなた方のところへ報告を持って行きます。ロージャがどんな風か？　ねむっているかどうか？　そういったようなことをね。それから、いいですか、それから一っ走り僕の家へ行って――なにしろ家には客がいて、みな酔っ払ってるんですから――そして、ゾシーモフを引っ張って行きます。これはロージャを診ている医者ですよ。今僕んとこにいるんですが、酔っちゃいませんから。この男は酔いません。この男はけっして酔いませんよ！　で、この男

をロージャのところへ引っ張って行って、それからすぐもう一度あなた方のとこへ飛んで来ます。つまり、あなた方は一時間のうちに、ロージャについて二つの報告を受け取られるわけです――医者の報告もね。いいですか、主治医の報告ですよ。これはもう僕なんかの報告とはわけが違いますからな！　もし病人が悪ければ、僕誓ってあなた方をここへご案内します。がいいようだったら、そのままゆっくりおやすみなさい。僕は一晩ここに、入り口の間に泊まりますよ。ロージャは気がつきゃしません。そして、ゾシーモフは、おかみさんのところへ泊まらせます。手近にいてもらうためにね。さあ、どうです、この際あなた方と医者と、どちらがいいでしょう？　ね、医者の方が役に立つでしょう、役に立つでしょう。だから、これでお帰んなさい！　おかみさんのとこへは駄目です。僕はいいけれど、あなた方は駄目です。入れてくれやしません。というのは……というのは、あの女が馬鹿だからです……あの女はアヴドーチャ・ロマーノヴナのことで、僕を妬くに決まってます。それから、あなたに対してもそうですが……アヴドーチャ・ロマーノヴナに対して間違いなしです。あれは全く、全く意想外な性格の女ですよ！　もっとも、僕だってやはり馬鹿だなあ……なに、どうだっていいや！　さあ、行きましょう！

あなた方は僕を信じてくださいますか？　え、僕を信じてくださいませんか、くださいませんか？」

「帰りましょうよ、お母さん」とアヴドーチャは言った。

「この方はきっと約束通りにしてくださるわ。だって、現に兄さんを生き返らせてくだすったんですもの。それに、もしお医者さまが本当に泊まるのを承知してくださるなら、それに越したことはないじゃありませんか？」

「そうだ、あなたは――天使だから！」とラズーミヒンは有頂天になって叫んだ。「行きましょう！　ナスターシャ！　大急ぎで上って行って、病人の傍についててくれ、灯を持ってだよ。僕は十五分たったら帰ってくる……」

プリヘーリヤはまだ十分納得しなかったが、それ以上反対もしなかった。ラズーミヒンは二人に腕をかして階段をつれておりた。とはいえ、彼は母親に不安を感じさせた。『そりゃ気さくないい人だけれど、約束した事がみんな実行できるかしら？　だってこんなに酔っ払ってるんだもの……』

「ああ、わかった、あなたは僕がこんなていたらくなのを、気にしていらっしゃるんですね！」ラズーミヒンはそれと察して、彼女の懸念をさえぎった。彼は持ちまえの並みはずれた大股で、歩道をかっぽして行ったので、二人の女はやっとのことで彼のあとについて行ったが、彼はそれに気もつかなかった。「ばかばかしい！　というのは……僕が間のぬけた酔っ払い面をしてることです。しかし、問題はそんなことじゃありません。僕はなるほど酔っていますが、それは酒のせいじゃありません。これはあなた方を見たとたんに僕の頭へがんと来たんです……だが、僕のことなんか唾でも引っかけてください！　気にとめないでください。僕は口から出まかせを

言っているんです。僕はあなた方に価いしない……僕はとうていあなた方に価いしない人間です！　あなた方をお送りしたら、さっそくここの濠(ほり)ばたで、水を二桶(ふたおけ)も頭から浴びます。そうしたらもう平気です……ああ、僕がどんなにあなた方を愛しているか、それをあなた方が知ってくだすったらなあ！……笑わないでください、そして怒らないでください！　ほかの者なら誰をお怒りになってもいいが、僕は怒らないでください！　僕はロージャの友人ですから、したがってあなた方の友人です。僕はそうしたいんです……僕はそれを予期していました……去年、なんだかこう、そうした瞬間があったんです……もっとも、けっして予感なんかしたわけじゃありません。だってあなたは、まるで天から降ってきたようなんですものね。僕は今晩おそらく夜っぴて寝られないでしょう……そのゾシーモフという男も、さっきロージャが気が狂ったんじゃないかと、心配していましたっけ……ね、だからロージャをいらいらさせちゃいけないんですよ……」

「え、なんとおっしゃるんです！」と母は叫んだ。

「ほんとうにお医者が自分でそうおっしゃったんですの？」とアヴドーチャもぎょっとして尋ねた。

「いいました。しかし、それは見当ちがいです、まるで見当ちがいです。先生その、ちょっとした薬を飲ましたんですよ、散薬をね。ぼく見て知っています。そこへあなた方がいらしたんですよ……ああ……あなた方は明日いらっしゃるとよかったんだがなあ！　しかし、われわれが引き上げたのは、いい事をしましたよ。一時間すると、ゾシーモフがあなた方にいっさいを報告します。こいつはそれこそ酔ってませんからね！　僕もその時分にゃさめていますよ……だが、どうして僕はあんなにがぶがぶやったんだろう？　ほかでもない、あのいまいましい連中が、議論に引っ張り込んだからだ！　議論なんかしないと誓いを立てたのになあ！　実に途方もないことを言いやがるもんだから！　危うくなぐり合いをしかねないところでしたよ！　僕はあそこへ伯父を残してきました、議長としてね……まあ、どうでしょう、やつらはぜんぜん没人格を要求して、そこに最大の意義を発見して喜んでるんですからね！　どうかして自分が自分でなくなるように、どうかして自分が自分に似なくなるように苦心する、それがやつらの間では最高の進歩とされてるんですよ。せめて自己流にでたらめでもいうならまだしも、それどころか……」

「あの、ちょっと」とおずおずした口調でプリヘーリヤはさえぎった。

けれど、それはただ相手の熱を高めるばかりだった。

「ああ、あなたはこんなことを考えていらっしゃるんでしょう？」ひときわ声を高めながら、ラズーミヒンは叫んだ。「僕が罵倒(ばとう)するのは、彼らがでたらめを言うからだと、そう思ってらっしゃるんですね？　ばかばかしい！　僕は人がでたらめを言うのが好きなんですよ！　でたらめってやつは、すべてのオルガニズムに対する人間の唯一の特権です。でたらめを言ってる中(うち)に、真理に

到達するんですよ！　でたらめをいうからこそ、僕も人間なんです。前に十四へん、あるいは百十四へんくらいでたらめを言わなけりゃ、一つの真理にも到達したものはない。これは一種の名誉なんですからね。ところで、僕らはでたらめを言うことだって、自分の知恵じゃできないんです！　まあ、一つでたらめを言ってみるがいい、自分一流のでたらめを言ってみるがいい。そしたら、僕はそいつを接吻してやる。自分一流のでたらめを言うのは、人まねで一つ覚えの真理を語るより、ほとんどましなくらいです。第一の場合には人間だが、第二の場合にはたかだか小鳥にすぎない！　真理は逃げやしないが、生命はたたき殺すこともできる。そんな例はいろいろあります。しかるに、われわれは今どうです！　われわれはすべて一人の例外もなく、科学、文化、思索、発明、願望、理想、自由主義、理性、経験、その他いっさい何もかも、何もかも、何もかも、何もかも、何もかもが、まだ中学予科の一年級なんです！　他人の知識でお茶を濁すのが楽でいいもんだから……すっかりそれが慣れっこになってしまった！　そうじゃありませんか？　僕の言う通りじゃありませんか！」二人の婦人の手を振って締めつけながら、ラズーミヒンは叫んだ。「そうじゃありませんか？」

「ああ、どうしたらいいのだろう、わたしよくわかりません」可哀想にプリヘーリヤはこうつぶやいた。

「そうですわ、そうですわ……もっとも、あなたのおっしゃることに、皆がみな賛成じゃありませんけど」とアヴドーチャは口を添えた。と、たちまちあっと悲鳴をあげた。彼が今度という今度、思い切り強く彼女の手を握りしめたので。

「そうですって？　あなたはそうだとおっしゃるんですね？　さあ、こうなるとあなたは……あなたは……」と彼は歓喜のあまり叫びを発した。「あなたは、善と、純潔と、叡智と、そして……完成の源泉です！　お手をください、お手を……あなたもどうぞお手をください。僕はここで今すぐ、ひざまずいてあなた方の手に接吻したいのです！」

彼はいきなり歩道の真中に膝をついた。いいあんばいに、その時あたりには誰もいなかった。

「まあ、よしてください、後生ですから。ほんとうにあなたは何をなさるんです？」とプリヘーリヤはことごとく度胆を抜かれて、こう叫んだ。

「お立ちなさいよ、お立ちなさいってば！」とドゥーニャも笑いながら、同時に気をもむのであった。

「いや、どうしてどうして、お手をくださらないうちは！　そうです、そうです。これでたくさん。ほら、立ちました。行きましょう！　僕は不幸にも馬鹿なまぬけ男です。僕はあなた方に価いしません。この通り酔っ払って、それを恥じ入っています……僕はあなた方を愛する資格はありませんが、あなた方の前に跪拝すること――これは全くの畜生でない限り、各人の義務です！　だからぼく跪拝しました……や、もうあなた方の下宿です。このこと一つだけでも、さっきロージャがあのルージンを追

い出したのは、当然な処置なんです！　よくもあの男は恥かしくもなく、あなた方をこんな宿へいれられたもんだ！　こりゃもう恥さらしですよ！　ここはどんな者が出入りするところか、ご存じですか？　だって、あなたは花嫁じゃありませんか？　あなたは花嫁でしょう、そうでしょう？　だから、僕はあえていいますが、あなたの未来の夫は、これで見ると陋劣漢ですよ！」

「もし、ラズーミヒンさん、あなたはお忘れになりましたね……」とプリヘーリヤは言いかけた。

「そうです、そうです、おっしゃる通りです、僕は前後を忘れていました。面目ありません！」とラズーミヒンはわれに返った。「しかし……しかし……こんなことを言ったからって、あなた方は僕をお怒りになっちゃいけませんよ！　僕は誠心誠意言ってるんで、けっしてその、なんです……ふむ！　それだったら陋劣な話です。手っとり早く言えばですね、何も僕があなたに……その……ふむ！……いや、もうよしましょう、必要がない、なぜだかそのわけは言いますまい、勇気がないです！……とにかく、われわれ一同はさっきあの男がはいって来た時に、これはわれわれの仲間じゃないな、と悟ったんです。それは何もあの男が床屋へ行って、髪をちぢらせてきたからじゃありません。またあの男が急いで自分の知識をひけらかそうとした、そのせいでもありません。要はあの男が回し者で山師だからです。ユダヤ人でまやかし者だからです、それはちゃんと見え透いています。あなた方はあれを賢いと思っておられますか？　どうして、あれは馬鹿ですよ、馬鹿ですとも！　ねえ、あんな男があなたの配偶たる価値がありますか？　ああ、なんということだ！　ねえ、わかってください」もう部屋へ通ずる階段を上りながら、彼はだしぬけに立ち止まった。「いま僕のところにいる連中は、残らず酔っ払いですが、その代わりみな正直です。われわれはでたらめを言います。だって僕もやはりでたらめを言うんですからね。しかし、そのうちいつか真実に達することもありますよ。われわれは潔白な道に立ってるんですからね。ところが、ルージンは潔白な道に立っていません。僕は今、家にいる連中をくそみそに罵倒したけれど、でもあの連中を一人残らず尊敬していますよ。ザミョートフでさえ、ぼく尊敬はしないが、愛していますよ。犬っころですからね！　それから、ゾシーモフの畜生でさえそうです。正直で、自分の仕事をわきまえてるから……いや、しかし、もうたくさん、すっかり言うだけの事は言ったし、許してもいただいた。ね、許していただいたんでしょう？　そうでしょう？　さあ、参りましょう。僕はこの廊下を知っていますよ、来たことがあるから。そら、あの三号室で、スキャンダルがあったんですよ……ところで、あなた方はどこです？　なん号です？　八号？　じゃ、夜お休みになる時はちゃんと鍵をかけて、誰もお入れにならないがいいですよ。十五分たったら、報告をもって帰って来ます。それからまた半時間たつと、ゾシーモフを連れて来ますからね。みていらっしゃい！　さよなら、一走り行って来ます！」

「ああ、ドゥーネチカ、これはどうなることだろうね！」とプリヘーリヤは、不安げなおどおどした調子で、娘に話しかけた。
「安心していらっしゃいよ、お母さん」帽子とマントを脱ぎながら、ドゥーニャはそう答えた。
「あの人は全くめちゃ飲みの席からいきなりみえたらしいけど、あれは神様がわたしたちを助けによこしてくだすったんだわ。あの方は頼りになる人よ、わたし受け合うわ。それに、あの方が今まで兄さんのためにしてくだすった事は、みんな……」
「でも、ドゥーネチカ、あの人が来てくれるかどうか、わかったものじゃないよ！　どうしてわたしは、ロージャをおいて来る気になれたろう！　ほんとに、ほんとに、あんな風で会おうとは、思いもそめなかった！　あの子のぶっきらぼうなことといったら、まるでわたしたちの来たのがうれしくないようなんだもの……」
　彼女の目には涙がにじんだ。
「いえ、それは違っててよ、お母さん。お母さんは泣いてばかりいらしって、よくごらんにならなかったんだわ。兄さんは大病で、ひどく頭が乱れてらっしゃるのよ――何もかもそのせいよ」
「ああ、その病気がねえ！　いったいどうなることだろう、いったいどうなることだろう！　それに、お前にだってなんという口のききようだったろう、え、ドゥーニャ！」と母は言いながら、おずおずと娘の目をのぞき込み、その気持を読もうとした。けれど、ドゥーニャがロージャをかばうのを見て、これならもう兄を許しているに違いないと、もう半分くらい安心していたのである。
「でも明日になれば、あの子もきっと考え直すだろう、わたし確かにそう思うよ」あくまで相手の心をさぐろうとしてこうことばを添えた。
「ところが、わたしそう確信しているわ――兄さんは明日になっても、やっぱり同じことをおっしゃるに相違なくってよ……あのことについてはね」とアヴドーチャは断ち切るようにいった。それはもうむろん、一本さし込んだ釘なのであった。なぜなら、今プリヘーリヤが口に出すのを非常に恐れていた一つの点が、この中に含まれていたからである。ドゥーニャは傍へ寄って、母を接吻した。こちらは無言のまま彼女を強く抱き締めた。それからラズーミヒンの帰りを不安な思いで待ちながら、そこへ腰をおろし、同じく期待のうちに一人もの思いを続けながら、腕を組み合わせて、部屋をあちこち歩いている娘のあとを、おずおずと目で追っていた。もの思いに沈みながら、こうして隅から隅へと歩き回るのが、アヴドーチャのいつものくせだった。で、母はいつもこういう時に、娘の物思いを妨げるのを、なんとなく恐れていた。
　もちろん、ラズーミヒンが酔ったまぎれに思いもかけず、アヴドーチャに激しい愛情を燃え立たしたのは滑稽だったに相違ない。が、実際アヴドーチャを見た多くの人は、ことにいま彼女が腕を組み合わせて部屋を歩き回っている、打ち沈んだもの思わしげな姿を見た多くの人

は、ラズーミヒンのふだんと違った状態を酌量するまでもなく、深く彼をとがめはしなかったであろう。アヴドーチャは全く目立って美しい娘だった――背が高くて、ほれぼれするほど姿がよく、しかもその中に強さがあり、自ら恃むところありげな気持がうかがわれた――それは一つ一つの動作に現われていたが、しかしけっして彼女の物腰から柔かさと優美さを奪うような事はなかった。顔だちは兄に似ていたが、彼女の方は美人といってもいいくらいだった。髪は兄よりいくらか明るみの勝った、黒みがちの亜麻色をしていた。目はほとんど真っ黒で、プライドにみちた輝きを放っていたが、またそれと同時に、どうかすると瞬間的に、並みはずれて善良な表情になるのであった。色は青白かったが、病的な蒼白さではない。彼女の顔は新鮮さと健康に輝いていた。口はやや小さ過ぎる方で、あざやかな赤い色をした下唇は、顎と一緒に心持前へ出ていた――それがこの美しい顔に指摘される唯一の欠点であったが、でもこの顔に一種の特徴、とりわけ傲慢らしい陰を添えている。顔の表情はいつも快活というより、むしろまじめな方で、もの思わしげであった。その代わり、この顔には微笑がまことによく似合った。愉しげな、若々しい、苦のなさそうな笑いが、なんともいえないほど似合った！　熱烈で、あけっ放しで、単純で、律義で、力士のようにたくましい、しかもかつてこういうものを見たことのない酔っ払いのラズーミヒンが、一目で夢中になったのも無理ではない。しかも機会が、まるでわざと膳立てしたように、初めて彼にドゥーニャを見せるために、兄に会った愛と喜びの美しい瞬間を与えたのである。彼はまた引続き、兄の理不尽で無情な忘恩の命令を聞いて、彼女の下唇が憤りに震えたのを見た――そこで、彼は自制力を失ったのである。

もっとも、彼がさきほど階段の上で酔ったまぎれに、ラスコーリニコフに部屋を貸している変わり者のプラスコーヴィヤが、アヴドーチャばかりでなく母のプリヘーリヤに対してまで、彼の事で嫉妬を起こすだろうと与太を飛ばしたのは、ほんとうのことなのである。プリヘーリヤ・アレクサンドロヴナは、もう四十三になっていたが、その顔はまだ以前の美貌の名残りをとどめていた。その上、気持の朗かさと、感覚の清新と、正直で純真な心熱を老年までも失わない婦人の常として、年よりもずっと若く見えた。ついでに括弧という形で言っておくが、こうしたものを完全に保って行くのが、老後までも美貌を失わない唯一の方法である。彼女の髪はすでに白くなり、薄くなりかけて、放射状をした小じわが、もうだいぶん前から目のふちに現われ、頬は心配と悲しみのためにこけて、干乾びてはいたけれど、それでもこの顔はやはり美しかった。これはドゥーネチカの顔の肖像だった。ただし、それは二十年後のもので、その上、下唇の表情を除外しての話である。彼女の下唇は娘のように前へ出ていなかった。プリヘーリヤは甘ったるい感じがするほどではないまでも、感じやすい、臆病な、おとなしい質だったが、それもある程度までである。彼女はたいていのことは人に譲ることもでき、同意することもできた。

時としては自分の信念に逆らうような事すら譲歩した。けれど、いつも正義と戒律と信念の定まった境界があり、いかなる事情も彼女にそれを踏み越えさせることはできなかった。

ラズーミヒンが帰ってからちょうど二十分たったとき、低いけれどあわただしいノックの音が二つ響いた。ラズーミヒンが引っ返したのである。

「入りませんよ、そうしていられないから！」ドアが開かれたとき、彼はせかせかと言った。「寝てますよ、それこそ正体なしに。ぐっすり、静かに寝ています。どうか十時間ばかり寝かせたいものですね。傍にはナスターシャがついています。僕が行くまで離れないように、いいつけときました。今度ゾシーモフを引っ張って来ます。あの男が報告しましょう。それから、あなた方もゆっくりお休みになれますよ。へとへとにおなりになったようですね、お見うけしたところ、精も根もないほど……」

こういったと思うと、彼は二人の傍を離れて廊下づたいに駆け出した。

「また、なんという気さくな、そして……頼もしい人だろう！」プリヘーリヤは無上にうれしくなってこう叫んだ。

「どうやらいい人らしいわね！」やや熱のこもった調子でアヴドーチャは答えた――またしても部屋の中をあちこちと歩きながら。

かれこれ一時間ばかりすると、廊下に足音がひびいて、さらにノックの音が聞えた。二人の女は今度こそ十分に、ラズーミヒンの約束を信じて待っていた。案の定、彼はもうゾシーモフを連れて来たのである。ゾシーモフは即座に酒宴を見捨てて、ラスコーリニコフを見に行くことに同意した。しかし、二人の婦人の所へは、酔っ払ったラズーミヒンが信用できないので、だいぶ疑念をいだきながら、いやいややって来たのである。ところが、彼の自尊心はすぐ落ち着かされたのみならず、うれしくさえなって来たほどである。実際、自分が予言者（オラクル）のように待たれていたことを、事実に合点したからである。彼はかっきり十分しかすわっていなかったが、その間にプリヘーリヤをすっかり説き伏せて、安心させてしまった。彼は深い同情をこめて話をしたが、全体に控え目で、わざとらしいほどまじめだった。それは重大な対診席上における二十七歳のドクトルといった形である。そして、本職以外のことには、一言も余分の口をきかなかったし、二人の婦人と個人的な親しい関係を結びたそうな様子も、これから先も見せなかった。部屋へはいりぎわに、アヴドーチャの光りまばゆいばかりの美貌に気がつくと、そこにいる間じゅう彼女の方をいっさい見ないように努め、ただプリヘーリヤにばかり話しかけていた。すべてこうしたことが、彼の心に無上の満足を与えたのである。病人のことについては、今のところきわめて順調にいっていると言った。彼の観察によると、この患者の病気は、最近数か月間の物質的窮乏のほかに、なお二、三の精神的原因も伴なっている。『つまりなんというか、いろいろ多くの複雑な精神上、物質上の影響や、不安や、

危惧(きぐ)や、気苦労や、ある二、三の観念や……その他そういったものの産物』である。アヴドーチャがかくべつ熱心に耳をすまし始めたのをちらと見ると、ゾシーモフはいっそうこのテーマを敷衍(ふえん)した。『何か多少発狂の徴候があるとか聞きましたが』というプリヘーリヤの心配らしい、おずおずとした質問に、彼は落ち着いた隔てない微笑を浮かべながら、自分のことばはやや大げさ過ぎたと答えた。もっとも、病人には一種の固定観念(イデー・フィクス)というか、偏執狂の潜在を示すような、あるものが認められはするが――実は、自分ゾシーモフは目下のところ、医学上とくに興味の深いこの方面に格別の注意を払っているので――しかし、病人が今までずっと熱に浮かされたような状態だったことや、それから……それからもちろん、近親者の到着が彼を力づけ、気を紛らして、よき影響を与えるだろうということも、考えに入れなければならない――『ただ新しい特殊な精神的衝動を避けることさえできたらですね』と彼は意味ありげに言い足した。それから立ち上がって、重みと愛想を兼ねた会釈をして、二人の婦人の祝福と、燃えるような感謝と、哀願と、そのうえ求めないのに差し出されたアヴドーチャの手に送られながら、彼は自分の訪問と、それにもまして自分自身にこの上なく満足して、部屋を出て行った。

「話は明日のことにしましょう。今夜はお休みなさい、これからすぐ、ぜひとも！」ゾシーモフと一緒に出かけながら、ラズーミヒンは念を押した。「明日はできるだけ早く、報告を持ってあがります」

「だが、あのアヴドーチャ・ロマーノヴナは、なんてすばらしい娘さんだろう！」二人が外へ出た時、ゾシーモフは、ほとんど舌なめずりしないばかりに言った。

「すばらしい？　きさますばらしいと言ったな！」とラズーミヒンはほえるように叫んだかと思うと、ふいにゾシーモフに飛びかかって、喉(のど)に手をかけた。「もしきさまがいつかちょっとでもずうずうしいまねをしやがったら……いいか？　わかったか？」相手の襟をつかんでこづき回し、壁へ押しつけながらわめいた。「わかったか？」

「おい、放せよ、この飲んだくれめ！」とゾシーモフは身をもがいた。そして、相手が手を放してから、しばらくじっとその顔を見ていたが、急に腹をかかえて笑い出した。ラズーミヒンは両手をだらりと下げて、陰鬱(いんうつ)な真剣に思い沈んだような顔をしながら、彼の前に立っていたのである。

「むろん、おれはまぬけだよ」雨雲のように陰鬱な顔をして、彼はこうくり返した。「しかし……君だって……やっぱり……」

「いや、違うよ、君、けっしてやっぱりじゃない。僕はそんな妄想は起こさないからね」

彼らは黙って歩いた。やっとラスコーリニコフの下宿近くまで来たとき、ラズーミヒンが恐ろしく気づかわしそうな様子で、急に沈黙を破った。

「ときに」と彼はゾシーモフに言った。「君は愛すべき若者だが、しかし君には、いろんなけがらわしい性質以

外に、まだ女ずきというやつがある。しかも、とりわけ醜悪な方だ。僕は知ってるよ。君は神経質で、ひ弱な意気地なしだ。気まぐれやだ。脂ぶとりにふとってきて、節制なんかみじんもできやしない――これはもう醜悪と呼ばれるべきだ。だって必ず醜悪におちいるに決まってるんだからね。君はすっかり体を甘やかしてしまってるんだ。忌憚なくいうが、そんな事をしていて、どうして立派な献身的な医者になれるか、僕にはすこぶる疑問だよ。羽根蒲団なんかに寝て（医者がだぜ！）それで夜中に患者のために起きて行く……ところが、三年もたつと、君は患者のために起きるようなことはなくなるよ……ちょっ、いまいましい、問題はこんなことじゃない。問題はこうだ。君は今夜かみさんの部屋へ泊まるんだぜ（僕むりやりにあの女を説きつけたんだ！）そして僕は台所で寝る。それこそ君にとって、あの女と親しく接近する絶好の機会だ！　なかなか君が考えているような女じゃない！　そんなところは、これっぱかりもありゃしないよ……」

「僕は何も考えてやしないよ」

「あれは、君、はにかみやで、無口で、引っ込み思案で、その上驚くばかり童貞心を持ってるんだ。しかも、それらいっさいにかてて加えて――悩ましいため息をつきつき、蝋のように溶けちゃう方だからね！　君、この世にありとあらゆる悪魔にかけて頼むが、あの女から僕を救ってくれんか！　実に一風かわった面白い女だぜ！　礼はする、誓ってするよ！」

ゾシーモフはいっそうおかしそうに、からからと笑い出した。

「ちょっ、すっかり酔いが回りやがって！　いったいなんだって僕があの女を？」

「大丈夫、大して面倒はないよ。何かいい加減なことをでれでれ言ってりゃいいんだ。ただ傍にいてしゃべってさえいりゃいいんだ。それに君は医者だから、何かの療治を始めてやるんだな。大丈夫、後悔するようなことはないよ。あいつのところにゃピアノがある。君も知ってる通り、僕は少しばかりぱらぱらやれるんだ。僕は『熱き涙に泣きぬれて』という純ロシア風の小唄を知ってる……あの女は純粋なのが好きでね――つまり、そもそも小唄から始まったのさ。ところが、君はピアノにかけたら、ルビンシュタインそこのけの名手じゃないか……大丈夫、後悔するようなことはないよ……」

「じゃ何かい、君はあの女に何か約束でもしたんだね？　正式の契約書でも書いて？　婚約くらいしたのかも知れないな？……」

「どうして、どうして、そんなことは全然ない！　それに、あれはけっしてそんな女じゃないよ。あの女にはチェバーロフが……」

「そんなら、ただ捨てちまったらいいじゃないか！」

「ただ捨てるわけにはいかないよ！」

「いったいなぜ捨てられない？」

「いや、その、なんだかそうはできないんだ、それっきりさ！　そこには、君、なんだかこう、引きずり込まれ

るような所があるんだ」
「じゃ、なぜ君はあの女を迷わせたんだい？」
「いや僕はちっとも迷わせなんかしないよ。事によると、僕こそもちまえの馬鹿な性分で、迷わされたかもしれないくらいだ。だが、あの女から見ると、君だって僕だって絶対に同じ事だよ。ただ誰かがそばにいて、ため息をついてさえいりゃいいのさ。そこには、君……さあ、なんといったらいいかなあ、そこには――うん、そうだ、君は数学が得意だろう。そして、今でもまだやってるだろう、ちゃんと知ってるよ……そこで、君があいつに積分計算を教えてやるんだ。ほんとうだ、けっして冗談じゃない。まじめな話なんだよ。あの女にはなんだって同じだもの。あの女は君を見て、ため息をついてりゃいいのさ。そうして一年くらい続けるんだ。僕なんかもいつだったか、だらだら長く二日もぶっ通しで、プロシアの上院の話をしたもんだ。（だって、あの女と何を話したらいいんだい？）――それでも、あの女はただため息をつきながら、ぼうっとなってるんだ！　ただ恋の話だけはしかけないがいいよ。震え上がるほどはにかみやだからね。――傍が離れられんというような顔だけしていたまえ――それで沢山なんだ。とにかく、めっぽう居心地がいいよ。まるで家にいるも同然だ――読んだり、すわったり、寝たり、書いたりしていたまえ……接吻（せっぷん）だってしてもいい、慎重にやりさえすれば……」
「いったいなんのためにあの女が僕にいるんだ？」
「ええっ、どうしてもうまく説明ができない！　ねえ、こうなんだよ。君たち二人はおたがいにぴったりはまってるよ！　僕は前にも君のことを考えたくらいだ……どうせ君は結局そういう事で終わる人だよ！　してみると、おそかろうが早かろうが、同じことじゃないか？　あそこには、君、なんていうか、羽根蒲団的要素が充満してるんだよ――いや！　単に羽根蒲団的要素ばかりじゃない！　あすこには人を引きずり込むような所がある。あすこは世界の果てだ、錨（いかり）だ、静かな避難所だ、地球のへそだ、三匹のくじらにささえられているこの世の基礎だ、薄餅（プリン）のエッセンスだ、脂っこい魚製菓子（クレビヤーカ）パンだ、晩のサモワールや静かなため息や、暖かい女物の不断着（ふだんぎ）や、うんと焚（た）いた暖炉や、そういうもののエッセンスだ――まあ、いってみれば、君は死んでいると同時に、また生きてもいる、一挙両得というもんだ！　いや、君、すっかり与太を飛ばしてしまったなあ。もう寝る時刻だ！　だがねえ、僕は夜中に時々起きて、病人を見に行くから。しかし、なんでもない、くだらん事だ。だから、君も心配しなくていいよ。まあ、もしなんなら、一度ぐらい行ってみてくれ。しかしね、もし少しでもうなされてるとか、熱があるとか、そんな風のことに気がついたら、さっそく僕を起こしてくれ。もっとも、そんなことあるはずがないけれど……」

二

心づかいでいっぱいになった真剣な気分で、ラズーミヒンは翌朝七時過ぎに目をさました。新しい予期しなかったやっかいな問題がいろいろと、この朝おもいがけなく彼の身辺に起こった。いつかこんなあんばいで眠りからさめることがあろうとは、以前考えてもみなかったのである。彼は昨日のことを、一つ一つ細かい点まで思い起こして、自分の身に何か容易ならぬことが持ち上がったのを悟った。今までかつて知らなかった、これまでのものとは似ても似つかぬ、ある一つの印象を感受したのを自覚したのである。と同時に、彼は自分の脳裏に燃え始めた空想の、絶対に実現し難いことをも意識した――それはあまりにも実現し難いことなので、恥かしくさえなってきた。で、彼は急いであの『呪うべき昨日の日』以来残っている目前の問題と疑惑に移っていった。

彼にとって何よりも恐ろしい思い出は、自分が昨日たまらなく『卑屈な忌まわしい』行為をした、ということである。それは単に酔っていただけではなく、処女の前でその頼りない境遇を利用して、愚かにも気早な嫉妬(しっと)から、彼ら同士の関係や内情はおろか、当人の人物さえよくも知らずに、婚約の夫を罵倒(ばとう)したことである。ああも早計に軽はずみに、彼の人物批評をするいかなる権利を自分は持っていたのか？　誰が自分を審判者に頼んだか？　またアヴドーチャのような純潔な処女が、金のためにつまらぬ男に身をまかせるはずがない！　してみれば、あの男にも美点があるわけだ。が、あの下宿は？　いや、あれがあんな家だということを、どうしてあの男が知っていなければならないのだ？　しかも、彼氏は本当の住まいを準備しているというではないか……ちょっ、実になんという卑劣なことだ！　酔っていたからって、それがなんの弁解になろう？　それはかえって一そう人格を下げる愚劣な遁辞(とんじ)だ！　酒中に真ありというが、その真実があの通りすっかりさらけ出てしまったのだ。『つまり、自分の嫉妬深いがさつな心のきたなさを、すっかりさらけ出してしまったのだ！』いったいこんな空想がたといいくらかでも、彼ラズーミヒンに許さるべきことだろうか？　いったい自分は――酔っぱらいの暴れ者は、あの昨日のだぼら吹きは、ああした処女と比べていったい何するものぞ？　『こんな無恥滑稽(こっけい)な対照がありうるだろうか！』ラズーミヒンはこう考えると、火が出そうなほどまっかになった。と、ふいにちょうどこの瞬間、まるでわざと当てつけるように、きのう自分が階段の上に立って、おかみがアヴドーチャのことで嫉妬を起こすだろうと、二人に話した時のことが、まざまざと思い出された……これはもう堪え得られぬことだった。彼は拳(こぶし)をふり上げて、力まかせに台所の暖炉をなぐりつけ、自分の手にも傷をつけるし、煉瓦(れんが)まで一つ打ち落とした。

『もちろん』しばらくしてから、一種自卑の感情にかられながら、彼はつぶやいた。『もちろん、今となっては、

このさんざんな不始末は清めようも、償いようもない……とすれば、この事はもう考えるまでもない。だから、なんにも言わずに二人の前へ出て……自分の義務だけを尽くすんだ……やっぱりなんにも言わずに……謝罪もせず、何一つ言わないことだ……もう、もちろん、今は希望もすべて滅びたのだ！』

にもかかわらず、彼は服をつけるときいつもより念入りに自分の衣装をあらためた。着がえなどは一枚もなかったし、またあったにもせよ、彼はそれは着なかったろう――『意地にだって着やしない』しかし、いずれにしても、わざと礼儀を無視したようなかっこうや、薄ぎたない引きったれですましているわけにはゆかない。彼とても、他人の感情を侮辱する権利は持っていないはずだ。ましてその他人が、自分の方から彼を必要とし、自分の方から彼を招いているのであってみれば、なおさらのことである。彼はていねいに服を刷毛（はけ）で清めた。ワイシャツはふだんから、いつも小ざっぱりとしたものを着ていた。この点では、彼は特にきれい好きだったので。

この朝、彼は念入りに手水（ちょうず）を使った――ナスターシャのところに石けんがあったので――髪から首、とりわけ両手をていねいに洗った。それから、ごわごわしたひげを剃（そ）ろうか剃るまいかの問題になった時（プラスコーヴィヤのところには、亡夫ザルニーツィンのかたみに保存されている、上等の剃刀（かみそり）があった）、その問題をえらいけんまくで否定してしまった。『なに、このままにしておけ！　それこそ全く、おれが顔を剃ったのは……なにのためだと思われちゃたまらん……いや、きっとそう思うに違いない！　天地がひっくり返ったって剃るものか！』

『それに、……それにかんじんな問題は、おれがが、さつで、じじむさくて、物腰が居酒屋じみてることだ。よしんば……よしんば仮りに、おれが自分をほんの少しばかりでも、人間らしい人間だと承知しているにもせよ……人間らしい人間だってことが、いったいなんの自慢になるんだ？　人間は誰しも人間らしい人間でなけりゃならない。それどころか、もそっと気のきいたのでなくちゃならん。それに……なんといっても（おれはそれを覚えてる）、おれにはちょいちょいした変な事がある……何も破廉恥というほどじゃないが、しかしそれでも！……ところで、腹で考えた事に至っては大変だ！　ふむ……これを全部アヴドーチャ・ロマーノヴナに並べて見せたらどうだろう！　ええっ、くそ！　かまうものか！　なに、わざときたならしい、脂じみた、居酒屋式なかっこうをしてやれ。平気だい！　これ以上の風だってしてやるぞ！』

彼がこうした独白を並べているところへ、プラスコーヴィヤの客間に泊まったゾシーモフがはいって来た。彼は家へ帰りがけに、ちょっと病人をのぞいてみようと、急いでいるところだった。ラズーミヒンは、病人が野鼠のように寝ていると告げた。ゾシーモフは、ひとりでに目のさめるまで起こさないように指図をした。そして、十時過ぎにまた来ると約束した。

「ただ家にさえいてくれればいいんだが」と彼は言い足した。「ちょっ、いまいましい！　自分の患者さえままにならないんだからな、これでどう治癒のしようがあるってんだ！　ときに、君知らないかい――こっちから二人のところへ出向くのか、それとも二人がここへ来るのか？」

「二人の方がだろう、と思うな」と質問の意味を察して、ラズーミヒンは答えた。「そして、もちろん、内輪の話が始まるだろう。僕ははずすよ。しかし、君は医者だから、僕よりよけい権利があるわけだ」

「僕だって坊主じゃないからね。来たら帰るよ。あの人たちのほかにも、用事はたくさんあるんだ」

「僕一つ気になることがあるんだよ」と眉をしかめながらラズーミヒンはさえぎった。「きのう僕は酔ったまぎれに、みちみち歩きながら、やつにいろんな馬鹿なことをしゃべってしまったんだ……いろんなことを……その中でね、やつに……発狂の傾向がありはしないかと、君が心配しているということまで……」

「君はきのう婦人連にまで、その事をしゃべってしまったね」

「いや、馬鹿げていた。自分でもつくづくそう思うよ！　なぐられても文句はない！　だが、どうなんだね、君は実際それについて、確たる考えがあったのかね？」

「くだらない話だと言ってるじゃないか。確たる考えも何もあるもんか！　君の方こそ、僕を初めてやつの所へ引っ張って行ったとき、偏執狂のようにいって聞かせたじゃないか……それに、つい昨日も僕らは焚火に油をかけたようなもんだ。というより、むしろ君があんな話をしたからさ……ペンキ屋のことなんか。当人がそのために気が変になったかと、思われるくらいのところへ、あんな話はちと乱暴だったぜ！　もしあの時僕が知ってたら――警察署であった騒ぎや、そこでつまらない馬鹿野郎があんな嫌疑をかけて……侮辱したことを、正確に知っていたら！　全く……昨日あんな話をさせやしなかったよ。実際この偏執狂ってやつは、一滴の水を大海ほどに考えたり、ありもしない妄想をまざまざと事実に見たりするものだからな……僕の覚えてる限りでは、昨日のザミョートフの話を聞いてから、はじめて事実の真相が半分くらい明瞭になった。いや、何もぐずぐず言うことはないさ！　僕は現にある一つの場合を知っている。四十男のヒポコンデリイ患者がね、八つになる男の子が食事のたんびに浴びせる嘲弄に堪え兼ねて、その子供を斬り殺したという話さ。ところが、今度の場合は、みすぼらしい姿に落ちぶれて、病気が起こりかけていた時に、高慢な警察官があんな嫌疑をかけたんだからね！　しかも、相手は恐ろしく気の立ってるヒポコンデリイ患者でさ！　そのうえ気ちがいじみるほど自尊心の激しい男だからたまらない！　もしかすると病気の出発点は、全部そこにあるのかもしれないよ！　まあ、どうでもいい！　ときにあのザミョートフって男は、実に愛すべき小僧っ子だね。ただその……昨日あれをすっかりぺらぺらしゃべってしまったのには困るよ。どうも恐ろしい

おしゃべりだ！」
「いったい誰に話したんだい？　君と僕くらいなものじゃないか？」
「それからポルフィーリイにも」
「ポルフィーリイにしゃべったっていいじゃないか！」
「ときに、君はあの人たち――おふくろと妹を左右する力を、いくらか持ってるだろうね？　今日は先生との応対に気をつけさしてくれたまえ……」
「一騒ぎやるだろうよ！」とラズーミヒンは気乗りのしない調子で答えた。
「だが、なんだって先生あのルージンにああ食ってかかるんだろう？　金はあるらしいし、あの娘もまんざら嫌いではなさそうだし……だって、先生たちまるっきり無一物なんだろう？　え？」
「君はなんだってそう根ほり葉ほりきくんだい？」とラズーミヒンはいら立たしげに叫んだ。「無一物か無一物でないか、僕の知ったことじゃないよ！　勝手に自分できくがいい、そしたらわかるだろうよ……」
「ちょっ、君はどうかすると手のつけられない馬鹿になるぜ！　昨日の酔いがまだ残ってるんだろう。じゃ、失敬。プラスコーヴィヤ・パーヴロヴナに、よく一夜の宿の礼を述べといてくれたまえ。戸に鍵をかけてしまって、僕が戸の隙間から『お早う』と挨拶しても、返事もしないんだ。自分じゃ七時にちゃんと起きてたくせに。女中がサモワールを持って、台所から廊下を通って行くのを、僕ちゃんと見たんだから……とにかく、僕は拝顔の栄を得なかったよ……」
　かっきり九時に、ラズーミヒンはバカレーエフの下宿を訪ねた。二人の婦人はもうよほど前から、ヒステリイじみるほどじりじりしながら、彼の訪問を待っていた。二人とも七時か、それよりもっと前から起きていたのである。彼は夜を欺く暗い顔をしてはいって行くと、無器用そうに会釈をして、そのためにすぐ腹を立ててしまった――もちろん、自分自身にである。しかし、それは相手なしの一人相撲だった。プリヘーリヤはいきなり彼に飛びかかって、その両手を握りしめ、ほとんどそれに接吻しないばかりだった。彼はおずおずとアヴドーチャの方を見た。ところが、その権高い顔にも、この瞬間、感謝と友誼の表情と、彼の思いも設けなかった偽りならぬ尊敬が（嘲るような視線と包み切れぬ軽蔑の代りに）現われていたので彼は全く頭ごなしに罵倒されでもした方が気安いほど、かえってきまりの悪い思いをした。けれど幸い、話題がちゃんと用意してあったので、彼は急いでそれにすがりついた。
『病人はまだ目をさまさない』けれど、『経過はきわめていい』と聞いて、プリヘーリヤはその方がかえって好都合だといった。『なぜって、前もってぜひともご相談しておかねばならぬことがありますから』それから、お茶はどうかという質問に続いて、一緒に飲もうという招待があった。二人ともラズーミヒンを待っていたので、まだ飲まずにいたのである。アヴドーチャはベルを鳴らした。するとそれに応じて、きたならしいごろつきみた

いな男が現われた。で、それに茶を命じると、そのうちにやっと茶道具が並べられたが、それは二人の婦人が赤面するほどきたならしい、不体裁なものだった。ラズーミヒンはこっぴどく下宿を罵倒しかけたが、ふとルージンのことを思い出したので、口をつぐんでまごまごしてしまった。で、プリヘーリヤがやみ間なく質問の雨を浴びせ出したので、すっかりうれしくなってしまった。

彼はひっきりなく腰を折られたり、問い返されたりしながら、それらの質問に答えて、ものの四十五分間もしゃべり通した。そして、最近一年間のラスコーリニコフの生活について、知っている限りのおもだった必要な事実を逐一話した上、今度の病気の詳細な報告で話を結んだ。それでも、彼はまだいろいろ省略を要する点を省略した。ことに警察での一条や、それから生じたいっさいの結果は黙っていた。二人はその話をむさぼるように聞いた。そして、彼が話を終わって、聞き手を満足さしたことと思った時も、二人はまだ始まったばかりのように思っているのであった。

「ねえ、ねえ、一つ聞かせてくださいまし、あなたはなんとお考えになります……ああ、ごめんなさい、わたしはまだあなたのお名前を伺いませんでしたね」とプリヘーリヤはせき込んで言った。

「ドミートリイ・プロコーフィッチです」

「それでですね、ドミートリイ・プロコーフィッチ、わたしはたいへん、たいへん……知りたくてたまらないんですの。全体に……あの子は今どんな考え方でいるんでしょう？　つまり、その、おわかりになりますかしら、なんと申し上げたらいいんでしょう。つまり平ったくいいますと、あの子は何が好きで、何が嫌いなんでしょう？

いつもあんなにいらいらしているのでしょうか？　あの子はいったいどんな望みを持ってるんでしょう、つまり、言ってみれば、何を空想しているんでしょう？　何が今あれの気持を動かすような、特別な力を持っているのでしょう？　一口に言えば、わたしが知りたいのは……」

「まあ、お母さんたら、そんな一時におっしゃったら、返事なんかできやしないじゃありませんか」とドゥーニャが注意した。

「ああ、情ない、だってわたしは全く、あの子があんな風になっていようとは、夢にも思いがけなかったですもの、ドミートリイ・プロコーフィッチ」

「そりゃ実際ごもっとも千万ですよ」とドミートリイ・プロコーフィッチは答えた。「僕には母がありませんでしてね、その代わり、伯父が毎年出て来ますが、来るたびに僕を見ちがえるんですよ。顔さえ見それるくらいです。しかも、相当に賢い人間なんですがね。まして、あなた方は三年も別れていらしったんですから、ずいぶん変わってしまうわけです。いや、あなた方にこんな事を言ったって仕様がありません！　僕はロジオンと一年半ぐらい知り合っていますが、気むずかしくて、陰気で、ごうまんで、気位の高い男です。ことに近ごろでは（あるいは、よほど前からかもしれませんが）、疑い深くな

って、おまけにヒポコンデリイですよ。が同時に、おうようで善良です。ただ感情を外へ出すことがきらいで、真情を表面に見せるよりも、むしろ残忍な事をするといった風です。でも、どうかすると、ヒポコンデリイらしいところがまるでなくなって、ただもう冷淡で、人情味がないかと思われるほど、無感覚になることもあります。実際あの男の内部には、まるで違った二つの性格がちゃんぽんに入り交ってるようですよ。どうかすると、ひどく無口になることもあります！　いつも忙しくて暇がない、いつもみんなが邪魔をする、というような様子をしながら、しかも自分はごろごろねていて、なんにもしないんですからね。皮肉屋の方じゃありませんが、何も機知が足りないからじゃなく、そんなくだらないことをしている暇がない、といった風なんです。人の話をしまいまで聞くということがない。現在みんなが面白がっていることに、けっして興味を持ったことがありません。自分を恐しく高く評価していますが、そうする権利も多少ない事はなさそうですよ。さあ、まだ何かあるかな……とにかく僕の見るところでは、あなたのご出京はあの男にとって、この上もない、いい影響を及ぼすに違いありません」

「ああ、ほんとにそうありたいものです！」ラズーミヒンの試みた最愛のロージャの月旦（げったん）に、堪え難い悩ましさを抱き続けたプリヘーリヤは、思わずこう叫んだ。

ラズーミヒンはとうとう思い切って、アヴドーチャにやや大胆な視線を向けた。彼は話の間にも何度となく、彼女の顔をちらちらと見やったが、それはほんのちょっとの間で、すぐ目をそらしてしまうのであった。アヴドーチャはテーブルに向かって、じっと注意深く聞いているかと思うと、ふいに立ち上がっていつものくせで手を組み合せ、唇をきっと結んで、部屋の中を隅から隅へと歩き回る。そして、時おり歩みをやめずに質問を発して、考え込んでしまうのであった。彼女も人の話をしまいまで聞かぬくせがあった。彼女は軽い生地で作った黒っぽい服を着て、首には透き通るような白いショールをかけていた。ラズーミヒンはいろんな点から、二人の女の身のまわりがいかにも貧しいのを見てとった。もしアヴドーチャが女王にまごう装いをしていたら、かえって彼は彼女を恐れなかったろう。ところがいま彼女はこんなに見すぼらしいなりをしていて、しかも彼がその貧しい様子に気づいたためでもあろうか、彼の心には恐怖の念が食い込んで、一言一句をも慎しむようになった。これはもちろん彼のような、それでなくても自分に信用のおけない人間にとっては、かなり窮屈なことだった。

「あなたは兄の性質について、いろいろ面白いことをお話しくださいました……しかも公平無私にね。それはけっこうな事ですわ。わたしね、あなたは兄を崇拝しきっていらっしゃるのかと、そう思ってましたの」アヴドーチャは微笑を含んで言った。「でも、なんですか、兄には女の人がついているのに相違ないということも、本当じゃないかと思われますのよ」彼女はもの思わしげに言い足した。

「そんなことは僕は言いませんでしたが、しかし、あるいはおっしゃる通りかもしれません、ただ……」
「なんですの？」
「だって、ロージャは誰も愛しちゃいないんですよ。また今後もけっして愛するなんてことはないでしょう」とラズーミヒンはきっぱり言い切った。
「つまり、兄には愛する素質がないんですの？」
「ねえ、アヴドーチャ・ロマーノヴナ、あなたも実に兄さんそっくりですね。何から何まで！」彼はふいに、自分自身でも思いがけなく、ついずばりと言ってしまった。けれどもすぐに、たったいま彼女に話した兄の批評を思い出すと彼はえびのようにまっかになり、恐ろしく照れてしまった。
　アヴドーチャはそれを見ると、からからと笑い出さずにはいられなかった。
「ロージャのことについては、二人とも考え違いしておいでかもしれないよ」とプリヘーリヤはややむっとしたらしく口をはさんだ。「わたしは今のことをいうのじゃないよ。ドゥーネチカ。ピョートル・ペトローヴィッチがこの手紙に書いておよこしになったこと……わたし達が二人で推量したようなことは、もしかすると本当じゃないかもしれないけれど、ねえ、ドミートリイ・プロコーフィッチ、あなたはあの子がどんな突飛な、さあ、なんといったらいいでしょう、つまり気まぐれな人間だか、とても想像がおつきになりますまい。まだやっと十五くらいの時でさえ、わたしあの子の気性には、ちっとも安心ができませんでしたよ。あの子は今でも、ほかの人では考えることもできないようなことをふいにしでかすかもしれないと、わたし思い込んでおります……そう、古いことは言わなくても、一年半ばかり前、ほら、あなたご承知かどうかしりませんけれど、ザルニーツィナ――下宿のおかみさんの娘と結婚するなんか言い出しましてね、どんなにわたしを困らせて、心配させたことでしょう。あれにはほとほとてこずってしまいましたよ」
「あなた、あの事で、何かくわしく知っていらっしゃいます？」とアヴドーチャは尋ねた。
「あなたなどはそうお思いになるでしょう」プリヘーリヤは熱くなってことばを続けた。「あの時わたしの涙が、わたしの嘆願が、わたしの病気が、わたしのもだえ死にが、家の貧乏が、あの子を思い止まらせたろうと、そうお思いでしょう？　ところがどうして、あの子はどんな障害でも、平気で踏み越えて行ったに相違ありません。それであなた、それであの子がわたしたちを愛していないと、お思いになりまして？」
「ロージャは一度もその話を僕にしませんでしたが」とラズーミヒンは用心深く答えた。「けれど、僕は当のザルニーツィナから、少々ばかり聞いております。もっとも、この女だってあまり口数の多い方じゃないんですがね。しかし聞いたことは、なんだか少し変な話でしたよ」
「何を、何をお聞きになりました？」と二人の女は一時に尋ねた。
「もっとも、かくべつ変わったことは何もありませんが

ね。ただ僕の聞いたところでは、この結婚はもうすっかり話がととのっていたのに、花嫁が死んだばかりに成立しなかったのですが、母親のザルニーツィナさえあまり気に染まなかったということです。……そのほか、人の話では、花嫁もいい器量ではなかった、つまり、むしろ不器量なくらいで……それに病身で……変な娘だったそうですよ……もっとも、どこかにいいとこがあったらしいです。いや、きっと何かいいとこがあったに相違ないです。でなけりゃ、わけがわかりませんものね……持参金もまるでなかった。それにロージャは、持参金など当てにするような人間じゃありませんし……概してこうした事は、簡単にとやかく言えないものですよ」

「きっとその方は、立派な娘さんだったに相違ありませんわ」とアヴドーチャはことば短かに言った。

「でもねえ、まことに済まないことだけど、あの時わたしは娘さんが死んだのを、ほんとに心から喜びましたよ。もっとも、あの子が娘を台なしにするか、娘さんがあの子を台なしにするか、どっちがどっちかわからないけれどね」とプリヘーリヤはことばを結んだ。それから、用心深く控え目な調子で、絶えずドゥーニャの顔をぬすみ見ながら（見うけたところ、こちらはそれが厭でたまらなかったらしい）、ロージャとルージンとの間に起こった昨日の一幕について、またいろいろと質問を始めた。

この一件は察するところ、彼女にとって身震いの出るほど、何よりも恐ろしい心配の種らしかった。ラズーミヒンは改めて一部始終を物語ったが、今度は自分の結論をつけ加えた。つまり前から企んで故意にルージンを侮辱したと言って、ラスコーリニコフをまっこうから非難したのである。そして、今度はあまり病気を弁解の口実にしなかった。

「これは病気の前から考えていたんですよ」彼は言い足した。

「わたしもそう思いますよ」とプリヘーリヤは、打ちのめされたような風であいづち打った。

けれど彼女を驚かしたのは、今度ラズーミヒンがルージンのことを言うのに、慎重な態度をとったばかりか、敬意さえ示しているらしい事だった。それはアヴドーチャをも驚かしたほどである。

「ではあなた、ピョートル・ペトローヴィッチには、そういうご意見を持っていらっしゃるのですか？」とプリヘーリヤはきかずにいられなかった。

「ご令嬢の将来の夫たるべき人ですもの、ほかの意見などあろうはずがありません」とラズーミヒンはきっぱりと、熱のこもった調子で答えた。「しかし、単に世間並みのお義理で言うのじゃありません。その……その……つまり、アヴドーチャ・ロマーノヴナが、ご自分の意志でお選びになったからです。もし昨日、僕があの人の棚おろしでもしたようでしたら、それは僕が見苦しく酔っ払って……しかもその上、まるで夢中だったからです。そうです、夢中だったんです、のぼせあがっていたんです、すっかり気がちがってたんです、今日になってみると、いまさら慚愧にたえません！」

彼は赤くなって口をつぐんだ。アヴドーチャもぱっと顔を赤らめたが、沈黙は破らなかった。彼女はルージンの話が出た瞬間から、一言も口をきかなかったのである。

その間にプリヘーリヤは娘の助言を失って、見るからに思い惑っている様子だった。とうとう彼女は、ひっきりなしに娘の顔を見ながら、口ごもりがちに、今ある一つのことが気にかかってたまらないと言い出した。

「こうなんですよ、ドミートリイ・プロコーフィッチ」と彼女は口を切った。「この方には何もかも打明けてしまうからね、ドゥーネチカ？」

「そりゃ、当たり前ですとも、お母さん」とアヴドーチャは力のこもった声で答えた。

「こういうわけなんですよ」苦労を打明けてもいいという許可を得て、重荷をおろしたような風で、彼女は急いで言い出した。「実は今朝早く、ピョートル・ペトローヴィッチから手紙が参りました。きのう着いたことを知らせてやった、その返事なんでございます。実のところ、あの人は停車場まで出迎えに来てくれる約束だったのに、それをしないで、何かボーイ風の男に下宿の宛名を持たせて、道案内によこしたんですの。そして、自分はきょう朝のうちに伺うからと、そういうことづてでございました。ところが今日になっても、本人が来る代わりに、この手紙が参りました……お話するよりも、いっそこれを読んでいただきましょう。その中に一つたいへん心配になることがありまして……それが何かって事は、すぐおわかりになります。そして……腹蔵なくご意見を聞かせてくださいませんか、ドミートリイ・プロコーフィッチ！　あなたは誰よりも一番、ロージャの性質はよくご承知なんですから、一等いい分別を貸していただけようと思いますの。お断わりしておきますが、ドゥーネチカはもう初めっから、すっかり決心しているんですけれど、わたしは……わたしはまだどうしたものか、途方に暮れておりますので……それで……それであなたのお出でを、待ち兼ねておりましたようなわけで」

ラズーミヒンは昨日の日付になっている手紙を開いて、次のように読み下した。

『プリヘーリヤ・アレクサンドロヴナ、拝啓陳れば、昨日は拠んどころなき差支えのためプラットホームまで御出迎え致すべき筈の処、その意を得ず、そのため極めて用なれたる男一名、差し向けたる次第に御座候。然る処また明朝も同様、大審院の方に止むを得ざる用件出来いたし候上、あなた様はじめ、アヴドーチャ・ロマーノヴナの親子兄弟、水入らずの御対面をお妨げ致すも心ぐるしく存じ候につき、拝顔の栄を断念いたす次第にこれ有り候。ついては、貴女に対する訪問及び御挨拶の儀は、明日に延期致すより外これ無く、時間は午後正八時に御座候。但しこの際、ぜひぜひ枉げて御承知願いたき一事これ有り、余の儀にはこれ無く候えども、明日拝顔の際にはロジオン・ロマーヌイチの御同席なきよう、御取計い下されたく候。実は昨日、同君を病床に御見舞い申上げ候ところ、小生に対し言語道断の無礼を働かれ

たるが故に御座候。なおその外、例の件に就きても、ぜひ親しく巨細に御相談致し、併せて貴女の御説明をも承りたく存じ候。念のため予め御注意申上げ置き候えども、万一小生の希望に反し、明日御宿もとにてロジオン・ロマーヌイチに遭遇致すようの事これ有り候わば、小生は止むを得ず即刻退去仕るべく、その節は自業自得と御承知下さるべく候。かかる事を申上ぐるは、昨日御見舞致し候節、全く御病気と御見受け致し候ロジオン・ロマーヌイチが、二時間後急に御全快相成りたる次第につき、随って御外出の節、御宿もとへも御立寄りの事もこれ有るべくと、懸念いたすために御座候。右は小生自身したしく目睹して確かめたる事実にて、昨夜馬蹄にかかりて非業の死を遂げたる一酔漢の寓居に於て、御子息はいかがわしき生業を営みおるその娘に、葬儀費用と称して二十五ルーブリを御手渡し相成候。小生はこの金子御調達に就いて、貴女の一方ならぬ御苦心を存じ居り候こととて驚き入りたる次第に御座候。末筆ながら、アヴドーチャ・ロマーノヴナへ、小生の並々ならぬ尊敬の情を御伝え下されたく、また貴女に対する恭順なる信服の念を御汲み取りのほど願上げ候。

匆々敬白

P・ルージン』

「こうなってみると、いったいどうしたものでしょうね、ドミートリイ・プロコーフィッチ？」とプリヘーリヤは泣かないばかりに言った。「どうしてわたしの口から、ロージャに来るななんてことが言い出せましょう？　あれは昨日もあんなにやかましく、ピョートル・ペトローヴィッチを断わってしまえと言ってたのに、こちらはまた部屋へ通すな、なんて言ってよこすんですもの！　いえ、あれはこんな事を聞いたら、それこそ意地でも来るに違いありません……そしたらまあ、どうなるでしょう？」

「なに、アヴドーチャ・ロマーノヴナのご決心どおりになすったらいいでしょう」とラズーミヒンは落ち着き払って、即座に答えた。

「まあ、とんでもない！　娘が言うのは……娘はまた途方もないことを言い出すんですの、しかもわけも話さないで！　この子が申しますには、ロージャにも今日の八時にわざと来てもらって、二人を同席させた方がいいんですって。いえ、その方がいいというわけじゃありませんけれど、なぜか是非ともそうしなくちゃいけないんですって……ですけれど、わたしロージャにはこの手紙を見せたくないんですの。そして、あなたにもお力を拝借した上、なんとかうまくごまかして、あれを来させないようにしたいと思うんですよ……だってね、あの子はあんなかんしゃくもちなんでしょう……それに、わたし何が何やら、ちっともわけがわかりませんの……いったいどんな酔っ払いが死んだのやら、娘が何ものやら、どういうわけであの子がその娘になけなしの金を皆やってしまったやら……だってあの金は……」

「並みたいていの苦労でできたものじゃないんですからね、お母さん」とアヴドーチャが言い添えた。

「あの男はきのう正気じゃなかったんですよ」考え込んだような調子で、ラズーミヒンは言い出した。「あなた方はご存じないですが、きのう料理屋でロージャのしたことなんていったら！　もっとも、頭のいいには驚きますがね……全くのところ、どこかの死人のことや娘のことは、きのう一緒に家へ帰る途中でも、何か言ってましたっけ。ですが、僕さっぱりわからなかったんです……もっとも、昨日は僕自身も……」

「それよかお母さん、こちらから兄さんの方へ出かけて行った方がいいじゃありませんか。そうすれば、どうしたらいいかってことも、すぐわかってしまいます。わたし受け合うわ。それにもう時間ですもの。あらまあ！　もう十時過ぎよ！」首にかけていた自分の時計をちらと見て、彼女はこう叫んだ。それは細いヴェニス式の鎖をつけた、七宝入りの立派な金時計で、ほかの衣裳持物と比べると、恐ろしく不調和なものだった。

『花聟の贈物だな』とラズーミヒンは考えた。

「あっ、ほんとに時間だ……時間だよ、ドゥーネチカ、時間だよ！」とプリヘーリヤは急にあわてて騒ぎ出した。「おまけに、こういつまでもぐずぐずしてると、昨日のことで怒ってる、と思うかもしれない。ああ、たいへんだ！」

こう言いながら、彼女は気忙しそうに婦人外套をまとい、帽子をかぶった。ドゥーネチカも身じたくをした。彼女のはめている手袋は、くたびれているというくらいのことでなく、方々に穴さえあいていた。ラズーミヒンはそれに気がついたけれど、かえってこのあまり明白な服装の貧しさが、粗末なものを上手に着こなす人によく見られる、ある特殊な奥床しさをこの親子に添えていた。ラズーミヒンは敬虔の念をもって、ドゥーネチカをながめた。そして、これから彼女と連れ立って行くのだと思うと、誇らしい思いさえするのであった。

『女王』と彼は腹の中で考えた。『あの牢屋の中で靴下をつくろったという女王は、この上なくきらびやかな儀式や出御の時よりも、かえってその瞬間の方が、真の女王らしく見えたに相違ない』

「ああ、なさけない！」とプリヘーリヤは声を上げた。「ほんとにわたしは現在のわが子に、かわいいかわいいロージャに会うのを、こんなにまでこわがるだろうなんて、そんなこと夢にも考えたことがないのに、わたしなんだかこわいんですよ、ドミートリイ・プロコーフィッチ！」彼女はおずおずと相手を見上げながら、こう言い足した。

「こわがることないわ、お母さん」とドゥーニャは母に接吻しながら言った。「それよか、兄さんを信じてらっしゃい。わたし信じるわ」

「ああ、どうしよう！　わたしも信じているんだよ。だけど、昨夜は一晩じゅう眠れなかったんだもの！」と哀れな婦人は叫んだ。

彼らは外へ出た。

「ねえ、ドゥーネチカ、わたし明け方になって、少しとろとろすると、思いがけなく亡くなったマルファ・ペト

ローヴナが夢枕に立ったんだよ……何もかもまっ白な着物を着てね……わたしの傍へ来て手をとりながら、かぶりを振って見せるんだよ。それはこわい顔をしてね、まるでわたしを責めでもするように……これはいいしらせだろうかねえ！　ああ、そうそう、ドミートリイ・プロコーフィッチ、あなたはまだご存じないでしょう。マルファ・ペトローヴナが亡くなったんですよ？」
「ええ、知りません、いったいマルファ・ペトローヴナって誰です？」
「急なことでねえ！　まあ、どうでしょう……」
「あとになさいよ、お母さん」とドゥーニャが口を入れた。「だってまだこのかたは、マルファ・ペトローヴナがどういう人か、ご存じないじゃありませんか」
「おや、ご存じないんですって？　わたしはまたね、何もかもご存じだと思っていましたの。どうぞごめんくださいましね、ドミートリイ・プロコーフィッチ。わたし、この二、三日、気が顛倒(てんとう)してしまってるものですから。わたしは全くあなたという人を、わたし達の救い神みたいな気がしてるものですから、あなたはなんでもご存じのことばかり、思い込んでしまいましてねえ。わたしあなたを親身かなんぞのように思ってるんですの……わたしとしたことが、こんなことを申し上げて、どうぞ気を悪くなさらないでね。おや、まあ、あなたの右のお手はどうかなさいまして！　ぶっつけでもなすったんですの！」
「ええ、ぶっつけたんです」とラズーミヒンはすっかり幸福になってつぶやいた。
「わたしはどうかすると、あまり本気になってお話するもんですから、いつもドゥーニャに直されるんですの……ああ、それはそうと、倅(せがれ)はまあなんというひどい所に住まっているんでしょう！　でも、もう起きているでしょうかしら？　いったいあのおかみさんは、あれでも部屋だと思ってるんでしょうか？　ときに、あなたそうおっしゃいましたねえ――あの子は腹にあることを外へ出して見せるのが嫌いだって。ですからわたしもしかすると……もちまえの……弱い性分で、あの子をうるさがらせはしないかと思いまして！……ねえ、ドミートリイ・プロコーフィッチ、いったいあれにはどうし向けたらいいのか、教えてくださいませんか？　わたしはもうごらんの通り、途方に暮れているんですから」
「もし顔でもしかめるようでしたら、あまりうるさくいろんな事を尋ねないようにするんですね。ことに体のことを聞いちゃいけませんよ、いやがりますから」
「ああ、ドミートリイ・プロコーフィッチ、母親というものはなんてつらい役目でしょう！　ですが、もう階段です……なんという恐ろしい階段だろう！」
「お母さん、顔色まで青くなってることよ。落ち着いてちょうだいよ」とドゥーニャは母にすりよって言った。
「兄さんたら、お母さんに会うのを喜ばなくちゃならないはずだのに、かえってお母さんの方がそんなに気苦労なさるなんて」両眼をぎらぎら光らせながら、彼女はそう言いたした。

「ちょっと待ってください、起きたかどうか、僕さきに見て来ますから」

二人の婦人は、先に立って行くラズーミヒンについて、そろそろのぼって行った。もう四階まで上って、おかみの部屋の戸口へさしかかったとき、ドアがごく細目にあいていて、すばしっこい二つの黒い目が、闇の中から二人をうかがっているのに気がついた。けれど、双方の目がぱったり出会うと、ドアはいきなりぱたんと閉まった。それはプリヘーリヤが驚きのあまり、危うく叫び声を立てそうになるほど、猛烈な勢いだった。

三

「元気です、元気です！」はいってくる二人の婦人を出迎えて、ゾシーモフは浮き浮きした調子で叫んだ。

彼は十分ばかり前に来て、昨日と同じ長椅子の片隅に腰かけていたのである。ラスコーリニコフは近ごろ珍らしく、ちゃんと服を着て、おまけに念入りに顔まで洗い、髪をとかして、反対の端に腰かけていた。部屋は一度にいっぱいになったが、それでもナスターシャは、客のあとからはいって来て、一座の話に耳をすまし始めた。

なるほどラスコーリニコフは、もうほとんど健康といってよかったが（ことに昨日と比べたらなおさらだった）、ただ非常に顔色がわるく、ぼんやりした様子で、気むずかしそうだった。外から見たところ彼は怪我人（けがにん）か、それとも何か激しい体の痛みでもこらえている人のような感じだった。眉（まゆ）は八の字に寄せられ、唇はきっと結ばれ、目は燃えるように輝いていた。彼は何か義務でも果たすように、気のりのしない様子で、しぶしぶ口をきいたが、その挙動にはどうかすると、妙に落ち着かない気持がうかがわれた。

もしこのうえ手にほうたいでもしているか、指に厚絹（タフタ）のサックでもはめていたら、たとえば指がうんで激しく痛むとか、手に打身をこしらえたとか、とにかくそんな風な状態にある人に、そっくりそのままだったに相違ない。

もっとも、この青ざめた気むずかしい顔も、母と妹がはいってきた時には、せつな何かの光りに照らされたようになったが、これもただ前の悩ましげな放心の表情に、一そう凝結したような苦悶(くもん)の影を加えたにすぎない。光りはすぐに消えうせたが、苦悶はそのまま残った。治療を始めたばかりの医者に特有の若人らしい熱心さで、自分の患者を観察し、研究していたゾシーモフは、肉親の来訪に接した喜びの代わりに、このさき一、二時間、のがれられない拷問を忍ぼうとする、人しれぬ重苦しい覚悟の色が彼の顔に浮かんだのを見て、驚きの念に打たれたのである。それからしばらくして、続いて起った会話のほとんど一語一語が、患者の隠している何かの傷口に触れて、それをかき回すような風に見えるのも認めたけれど、同時に、昨日はちょっとした言葉の端にも、ほとんど気ちがいじみるほど興奮したあの偏執狂が、今日はよく自己を制御して自分の感情を隠す手ぎわにも、かなり一驚をきっしたのである。

「ええ、僕はもう自分でも、ほとんど健康体になったのがわかりますよ」愛想よく母親と妹を接吻しながら、ラスコーリニコフは言った。この一言で、プリヘーリヤの顔は見る間に輝き渡った。

「しかも、これは昨日の流儀で言ってるんじゃないよ」彼はラズーミヒンの方へ向いて、親しげにその手を握りながら、こう言い足した。

「いや、僕も今日はこの人を見て、面くらったくらいですよ」もう十分ばかりの間に、患者との話に継ぎ穂を失っていたゾシーモフは、三人がはいって来たのに大喜びで言い出した。「この調子で行けば、三、四日後には、それこそすっかりもともと通りになりますよ。つまり一月前、いや二月……あるいは三月前と言った方がいいかな？　だって、この病気はだいぶ前からきざして、潜伏期が長かったんですからね……え、どうです？　今となったら白状なさい、もしかしたら、君自身にも責任があるんじゃないですか？」まだ何かで患者をいら立たせてはと心配するように、彼は用心深い微笑を浮かべて、言い足した。

「大きにそうかもしれません」とラスコーリニコフは冷やかに答えた。

「僕もその意味で言ってるんですよ」とゾシーモフは自分の成功に味をしめて、ことばを続けた。「これから君が完全に回復されるのは、ただ心の持ちようしだいなんですよ。今こうして、君とお話ができるようになってみると、ぜひこれだけの事をよく合点していただかなきゃなりません――つまり、君の病的状態の発生にもっとも多く影響した最初の、いわば、根本的原因を除かなければならないのです。そうすれば本当に回復されます。が、さもないと、かえって悪くなってしまいますからね。この根本的原因は僕にこそわからないけれど、君にはよくわかっているはずです。君は聡明(そうめい)な方だから、もちろん、自分自身に対して観察を試みておられるでしょう。僕の見るところでは、君の健康障害の始まりは、大学を退学された時と一致しているようですね。君は仕事をしずに

いちゃいけません。だから、ちゃんと規則的な仕事をして、前途に確固たる目標を定めるということが、君にはもっとも有効と思われるんですが」
「そうです。そうです。おっしゃる通りです……そのうちに、僕もなるべく早く大学へ復校しましょう。そうすれば万事……とんとん拍子にいくでしょう……」
一つは婦人たちの前で当たりを取ろうというつもりで、こういった賢明な忠告を始めたゾシーモフも、ことばを終わってから、聞き手の顔をちらと見やり、その顔にまざまざと嘲笑（ちょうしょう）の色を認めた時には、多少毒気（どくけ）を抜かれた形だった。とはいえ、それはほんのちょっとの間である。プリヘーリヤはすぐさまゾシーモフに礼を述べ、ことにきのう夜中下宿を訪問してもらったことに対して、謝辞をつらね始めた。
「えっ、この人が夜中に訪ねたんですって？」とラスコーリニコフは、はっとしたらしい様子で尋ねた。「してみると、お母さん達は旅づかれのあとを、ろくろく寝なかったんですね？」
「いえ、なに、ロージャ、それはほんの二時ごろまでの話なんだよ。家にいる時だって、わたしもドゥーニャも、二時より早く寝たことなんかついぞ無いんだから」
「僕もやはりこの人に、どうしてお礼したらいいかわからないんです」とラスコーリニコフは急に眉をしかめて、うなだれながらことばを継いだ。「金の問題は別として――こんな事なんか口に出して失礼ですが（と彼はゾシーモフの方へふり向いた）、僕はどうしてあなたから、こうした特別なご親切を受けるんだか、ほとほと合点がいきません。ただもうわからないんですよ……で……で、僕にはそのご親切が苦しいくらいです。だって、不可解なんですものね。僕は遠慮なしに言わせてもらいます」
「まあ、君そういらいらしないでください」とゾシーモフは無理に苦しそうな笑いを立てた。「まあ、君が僕にとって初めての患者だ、とでも想像していただくんですな。全く、開業早々のわれわれ医師仲間は、最初の患者をわが子同様に可愛いがるもんですからね。中には、ほとんどほれこんでしまうのがいるくらいですよ。何しろ、僕もまだ患者があり余る方じゃないので」
「あの男のことは、今さら言っても仕様がない」ラスコーリニコフはラズーミヒンをさしながらつけ加えた。「あの男は、僕から侮辱と面倒よりほかには、何一つ受け取ったことがないくせに」
「何を馬鹿言ってるんだい！　君は今日はセンチな気分になってるとでもいうのかい？」とラズーミヒンはどなった。
けれど、もし彼にも少し鋭い観察力があったら、それはけっしてセンチメンタルな気分どころでなく、何かしらぜんぜん正反対のものだと気づいたはずである。しかし、アヴドーチャはそれに気がついた。彼女は不安げにじっと兄を注視していた。
「お母さん、あなたの事になると、僕はもう申しわけなどする勇気もないくらいです」まるで朝から暗記した宿題のような調子で、彼はことばを続けた。「僕は今日に

なって、お母さんたちが昨日ここでどんなにか気をもみながら、僕の帰りを待っておられただろうと、やっといくらかお察しできたような始末なんです」こう言いながら、彼は急に無言のまま、微笑を含んで妹に手を差し伸べた。この微笑の中には、今度こそ作りものでない真実な感情がひらめいた。ドゥーニャはすぐさま差し伸べられた手を握って、さもうれしそうに、感謝の熱意をこめて握りしめた。これが昨日の争論以後、初めて妹に示した態度なのである。兄と妹のこうした無言の固い和解を見て、母親の顔は歓喜と幸福に輝いた。

「これだから僕はこの男が好きなんだ！」なんでも誇張する癖のあるラズーミヒンは、椅子のまま勢いよく体をふり向けながらささやいた。「あの男はよくああした含蓄のある動作を見せますよ！……」

『まあ、あの子のすることは、なんでも感じよくうまくいくこと！』と母は心の中で考えた。『ほんとになんという奥床しい心意気だろう！　あのきのう以来の妹とのわだかまりを、なんとまああも無造作に、しかも優しくといてしまったことだろう――ただひょいと手を伸ばして、優しい目つきを見せただけだもの……それに、あの子の目の美しいこと、そして顔全体の美しいこと！　ドゥーネチカよりも器量がいいくらいだ……でも、まあ、あの服はなんということだろう、なんてひどい身なりをしているんだろう！　アファナーシイ・イヴァーヌイチの店にいる小僧のヴァーシャだって、まだましなかっこうをしている！……ああ、一思いにあれに飛びついて抱きしめてやりたい……そして、泣いてみたいんだけれど――でも何かこわい、こわくって仕様がない……あの子がなんだかこう……ああ、情けない！　ちょっと見れば、あんなに優しく話しているのに、それでもわたしはこわい！　まあ、いったい何がこわいんだろう？……』

「ああ、ロージャ、お前はとても本当にできまいがね」彼女はわが子のことばに答えを急いで、いきなりこう引きとった。「ドゥーネチカもわたしも昨日はどんなに……不仕合せだったか！　でも、今はもう何もかもすんで、おしまいになったから、わたしたちはまた仕合せになったんだよ――だからもう話してもかまわないね。まあ、考えてもおくれ、早くお前を抱きしめたいと思って、汽車をおりるとすぐ、ここへ駆けつけて来てみると、あの女中さんが――ああ、そこにいますね！　こんにちは、ナスターシャ！　あの人がいきなりだしぬけに、お前は脳病系の熱で寝ていたのに、つい今しがたお医者にかくれて、熱に浮かされながら外へ飛び出してしまったので、みんな捜しに駆け出したっていうじゃないか。その時のわたしたちの心持は、お前にゃとてもわかりゃしないよ！　わたしはすぐ家で懇意にしていたポタンチコフ中尉――ほら、お前のお父さんのお友達さ――あの人の非業の最期が思い出されたんだよ。お前はもう覚えていないだろうが、やっぱり脳病系の熱でね、同じような風に外へ飛び出して、裏庭の井戸へ落っこちてしまったんだよ。やっとあくる日になって引き上げたような始末なのさ。だからお前、わたしたちはいうまでもない、なおの

ことおおぎょうに考えるだろうじゃないか。せめてピョートル・ペトローヴィッチにでも力を借りようと思って、すんでのことにあの人を捜しに飛び出すところだったよ……だってお前、わたしたち二人っきりなんだものね、まるで二人(ふたり)っきりなんだものねーえ」と彼女は哀れっぽい声でことば尻(じり)を引いたが、ふと、『もうみんなまたすっかり仕合せになっている』にもかかわらず、ルージンのことを言い出すのは、まだかなり危険だと心づいたので、急に話の腰を折ってしまった。

「そう、そう……それはもちろん……不本意千万なことでした……」とラスコーリニコフは返事がわりにつぶやいたが、それがいかにも放心したような、ほとんど注意もしていないような様子だったので、ドゥーネチカは驚きのあまり、じっと彼の顔を見つめた。

「ええと、まだ何か言いたいことがあったっけ」一生懸命に思い出そうと努めながら、彼はことばを続けた。「そうだ――どうぞね、お母さん、それからドゥーネチカ、お前も――きょう僕の方が先にあなた方の所へ出かけるのがいやで、こちらへまず来てくださるのを待っていたなんて、そんなことを思わないでください」

「まあ、何をいうの、ロージャ！」プリヘーリヤも同じように驚いて叫んだ。

『まあ、いったいこの人はお義理に返事をしているのかしら？』とドゥーネチカは考えた。『仲直りするのも、わびるのもまるでお勤めでもするか、学課の暗唱でもしてるようだわ』

「僕は目がさめると、さっそく出かけようと思ったんですが、着物の事で引っかかったのです。昨日あれに……ナスターシャに言うのを忘れたもんですから……血を洗い落としてくれというのを……で、今やっと着がえしたばかりなんですよ」

「血！　なんの血なの？」とプリヘーリヤはぎょっとした。

「なに、なんでもないんです……ご心配なく、お母さん。その血というのはこういうわけです。きのう少し熱に浮かされ気味で、町をうろつき歩いていたとき、馬車にひかれた男にぶっつかったんです……ある官吏です……」

「熱に浮かれてた？　だって、君は何もかもすっかり覚えてるじゃないか」とラズーミヒンがさえぎった。

「それはほんとうだ」何か特別気づかわしげな調子で、ラスコーリニコフはそれに答えた。「何もかも覚えてるよ。ごくごく微細な点まで。ところがね――なぜ、あんなことをしたか、なぜあんなところへ行ったか、なぜあんなことを言ったか？　という段になると、もうよく説明ができなくなるんだ」

「そりゃわかり過ぎるくらいわかりきった徴候ですよ」とゾシーモフが口を入れた。「仕事の実行はどうかすると巧妙を極めて、老獪(ろうかい)とさえいえるくらいだけれど、行為の支配力、すなわち行為の根本は混乱していて、いろいろ病的な印象に左右される。まあ、夢みたいなもんですね」

『いや、この男がおれをほとんど狂人扱いにするのは、

あるいは好都合かもしれないぞ』とラスコーリニコフは考えた。
「でもそれは、健康な人にだってあることかもしれませんわ」不安げにゾシーモフらを見ながら、ドゥーネチカは注意した。
「かなり正鵠を穿ったお説です」とこちらは答えた。「その意味では、全くわれわれは皆たいていの場合、ほとんど狂人みたいなものです。ただほんのちょっとした差があるだけでね。つまり『病人』はわれわれよりいくらか発狂の度がひどいんです。そこはどうしても境界をつける必要があります。完全な調和を保った人間なんか、ほとんど絶無といっていいくらいですよ。数万人の中に、いや、数十万人の中に一人もありましょうかね。しかもそれだって、おぼつかない一標本にすぎないでしょうな……」
得意な話題で調子に乗ったゾシーモフが、うっかりすべらした『狂人』ということばに、みんな思わず眉をしかめた。ラスコーリニコフは一向注意もしない様子で、青白い唇に妙な微笑を浮かべながら、もの思わしげにじっとすわっていた。彼は何やら考え続けているのであった。
「さあ、それでどうしたい、その馬車にひかれた男は？　ぼく話の腰を折ってしまったが！」とラズーミヒンは急いでこう叫んだ。
「何？」こちらは目がさめたように問い返した。「そう……それでつまり、その男を家までかついで行く手伝いをしたとき、血まみれになったんだ……ときにお母さん。僕はきのう一つ申しわけないことをしちゃったんで。実際、正気じゃなかったんですね。お母さんが送ってくださった金を、昨日すっかりやっちゃったんです……その男の細君に……葬式の費用として。今はやもめになった、肺病やみの、みじめな女なんです……小さいみなしごが三人ひもじい腹をかかえていて……家の中はがらんどう……まだ外に娘が一人いるんですが……全くそれをごらんになったら、お母さんだっておやりになったかもしれませんよ……もっとも、僕にそんな権利はなかったんです。ことに、お母さんがどうして調達してくだすったか、それを知ってるんですからね。人を助けるには、初めにまずその権利を得なくちゃなりません。でないと、〔Crevez chiens, si vous n'e^tes pas contents〕（ひもじけりゃ犬でも殺せ）ですからね！」彼はからからと笑い出した。「そうじゃないか、ね、ドゥーニャ？」
「いいえ、そうじゃないわ」ドゥーニャはきっぱりと言った。
「へえ！　じゃお前も……何か思わくあってだな！……」彼はほとんど憎悪のまなざしで彼女を見やり、あざけるような微笑を浮かべながらつぶやいた。「僕もそれを思い合わさなくちゃならなかったんだ！……ま、いいさ、けっこうなことだ。つまりお前のためになるよ……そして、ある一線まで行きつくさ。それはね、踏み越さなければ不幸になるが、踏み越しても、一そう不幸になるかもしれない、そういった一線なのだ……もっとも、こん

なことは皆くだらない話だ！」つい心にもなく夢中になったのを、いまいましく思いながら、彼はいら立たしげに言い添えた。「僕はただお母さんに許していただきたいと、そう言いたかっただけなんです」彼は角のあるきれぎれな調子でこう結んだ。

「もういいよ、ロージャ、わたしはね、お前のすることなら、なんでも立派だと信じてるんだから！」母はさもうれしそうに言った。

「信じない方がいいんですよ」微笑に口をゆがめて、彼はさえぎった。

沈黙がそれに続いた。すべてこうした会話にも、沈黙にも、和解にも、許容にも、なんとなく緊張したものがあった。そして、誰も彼もがそれを感じていた。

『どうも、まるでみんなおれを恐れてるようだ』上目づかいに母と妹を見ながら、ラスコーリニコフは腹の中で考えた。事実プリヘーリヤは、黙っていればいるほど、いよいよおじ気づくのであった。『別れてる間は、おれも二人に深い愛情をいだいていたようだったのに』こういう考えが彼の頭にひらめいた。

「あのね、ロージャ、マルファ・ペトローヴナが亡くなられたよ！」とふいにプリヘーリヤが口を出した。

「マルファ・ペトローヴナって誰です？」

「あら、まあ、スヴィドリガイロフの奥さんのマルファ・ペトローヴナさ！　ついこの間の手紙で、あんなにいろいろ知らせてあげたじゃないか」

「あーあ、覚えています……じゃ、死んだんですか？」

「それがねえ、急だったんだよ！」とプリヘーリヤは、彼が興味を持ってきたのに元気づいて、せきこみながら言った。「ちょうどわたしがお前に手紙を出した、あの時だったんだよ、ちょうどあの日に！　世間の噂だと、あの恐ろしい男が、どうやらそのもとになったらしいんだよ。あの男がたいへんひどく奥さんを打擲（ちょうちゃく）したとかいう話でね！」

「じゃ、その夫婦はいつもそんな風だったのかい？」と彼は妹の方を向いて尋ねた。

「いいえ、まるで反対なくらいよ。あの人は奥さんにはいつも我慢づよくて、ていねいなくらいだったわ。たいていの場合、奥さんの気性を大目に見過ぎるくらいだったのよ、まる七年の間……それはどうしたのか急に堪忍袋の緒を切らしたの」

「してみると、七年も辛抱したのなら、それほど恐ろしい男でもないじゃないか！　ドゥーネチカ、お前はあの男を弁護してるようだね？」

「嘘よ、嘘よ、あれはほんとに恐ろしい人なの！　あれ以上恐ろしいものは、わたし想像もできないくらいだわ」とドゥーニャは震え上がらんばかりの様子で言い、眉をしかめたまま考え込んだ。

「それは朝のうちの出来事だったんだよ」とプリヘーリヤはせかせかとことばを続けた。「そのあとで奥さんは、昼の食事をすますとすぐ、町へ行く馬車のしたくをいい

つけたの。だって、あの人はそんな時、きまって町へ行くことにしていたもんだからね。食事の時なんか、たいへんおいしくいただいたという話だった……」
「なぐられたばかりで？」
「もっとも、あの人にはいつもそうした……癖があったんだね。で、昼の食事をすますとすぐ、町へ行くのが遅くならないように、さっそく水浴び場へ行ったそうだよ……実は、あの人は何かそんな水浴療法をしていたそうだから。あすこには冷たい泉があってね。あの人はそれへ毎日きまってはいってたんだそうだよ。ところが、水へはいるとたんに、いきなり発作が起こったんだね！」
「そりゃそうでしょうとも！」とゾシーモフが言った。
「で、あの男はひどく細君をなぐったんですか？」
「そんなこと、どうでもいいじゃありませんか」とドゥーニャが口を入れた。
「ふむ！　しかし、お母さんはいい物好きですね、こんなくだらない話をするなんて」とふいにラスコーリニコフはいら立たしげに、つい口がすべったという調子で言った。
「まあ、お前、わたしもう何を言ったらいいか、わからなかったもんだからね」とプリヘーリヤは思わず口をすべらした。
「いったいどうしたんです、あなた方はみんな僕をこわがってでもいるんですか？」と、ひん曲がったような微笑を浮かべて、彼は言った。
「そりゃ全くほんとよ」ドゥーニャはいかつい目つきでまともに兄を見ながら、こう言った。「お母さんは階段を上る時から、びくびくして十字を切ってらしたくらいですもの」
　彼の顔はけいれんでもしたようにゆがんだ。
「ああ、ドゥーニャ、お前何を言うんだね？　ロージャ、後生だから、怒らないでね。ドゥーニャ、なんだってお前はあんなことを！」とプリヘーリヤはまごまごして言った。「そりゃ全く、わたしはこっちへ来る途中も、汽車の中でずっと考えてばかりいたんだよ――お前に会った時の事だの、お互いにいろんな話をし合う模様だのをね……そう思うと、わたしはうれしくてうれしくて、道中の長いことも忘れるくらいだったよ！　まあ、わたしは何を言ってるんだろう！　わたしは今でも仕合せなのに、ドゥーニャほんとにお前は余計なことを……わたしはもうお前の顔を見ているだけでも、もうもうれしくてたまらないんだよ、ロージャ……」
「もういいですよ、お母さん」母の方を見ないで、その手を握りしめながら、彼は当惑したようにつぶやいた。「まだ話はいくらでもできますよ！」
　こう言ったかと思うと、彼は急にどぎまぎして、さっと顔色を変えた。またしてもこの間のあの恐ろしい感覚が、死のように冷たく彼の胸を走り過ぎたのである。またしても自分がいま恐ろしい嘘を言ったことが、突然はっきり合点がいったのである。今はもうけっしてゆっくり話ができるどころか、どんな問題についても、誰とも話をすることができないのだ。この苦しい想念の印象が

あまりに強かったので、彼は一瞬間ほとんど我を忘れて席を立つと、誰の方も見ずいきなり部屋を出て行きかけた。
「どうしたんだ、君は？」とラズーミヒンは彼の手をつかんで、声高に叫んだ。
彼は再び席に戻って、無言のままあたりを見回し始めた。一同はけげんの表情を浮かべて彼をながめていた。
「いったいあなた方はみんななんだって、そうつまらなさそうに黙りこんでるんです！」彼は突然、全く思いがけなくこう叫んだ。「何か話したらいいじゃありませんか！　実際こんなにぼんやりすわってたって仕様がない！　さあ、何かお話しなさいよ！　話そうじゃありませんか……せっかく集まったのに、黙りこくって……さあ、何か！」
「ああ、ありがたい！　また昨日のようなことが、始まるのかと思って！」とプリヘーリヤは十字を切りながらつぶやいた。
「いったいどうなさったの、兄さん？」とドゥーニャは疑わしげに尋ねた。
「いや、なんでもない、ちょっとした事を思い出したんだ」と彼は答えて、急にからからと笑い出した。
「いや、ちょっとしたことならけっこうです！　実は僕ももしやと思ったくらいでした……」と長椅子から立ち上がりながら、ゾシーモフは言った。「ときに、わたしはもうおいとましなくちゃなりません。また後ほどお寄りするかもしれません……もしお目にかかれたら……」
彼は会釈をして、立ち去った。
「なんて立派な方だろう！」とプリヘーリヤは言った。
「ああ、立派な、よくできた、教育のある、りこうな男ですよ……」急にラスコーリニコフは、それまでにない生き生きした調子で、何かしら思いがけないほど早口に言った。「病気になる前にどこで会ったろう、どうも一向に覚えがないが……どこかで会ったような気がする……それから、これもやはりいい男ですよ！」と彼はラズーミヒンを顎でしゃくった。「お前、この人が気に入ったかい、ドゥーニャ？」と彼は妹に問いかけて、急になんと思ったか大声で笑い出した。
「ええ、たいへん」とドゥーニャは答えた。
「ちょっ、きさまは……くだらんことを言う男だな！」恐ろしくてれてまっかになったラズーミヒンは、そう言いながら椅子から立ち上がった。
プリヘーリヤは軽くほほえんだ。ラスコーリニコフはからからと爆笑した。
「おい、君はどこへ行くんだ？」
「僕もやっぱり……用が」
「君に用があってたまるかい、じっとしていたまえ！ゾシーモフが行ったから、それで君も用ができたのかい。行っちゃいけない……ときに、何時だろう？　十二時かね？　おや、ドゥーニャ、すてきな時計を持ってるじゃないか！　だが、なぜまたみんな黙ってしまったんです？　僕ばかりに、僕一人にばかりしゃべらしてさ！……」

「これはマルファ・ペトローヴナにいただいたのよ」とドゥーニャは答えた。
「それもたいそう高い品なんだよ」とプリヘーリヤが口を添えた。
「ははあ！　だが、なんという大きな時計だ。まるで女持ちのようじゃない」
「わたしはこんなのが好きなのよ」とドゥーニャは言った。
『してみると、花聟（はなむこ）の贈物じゃないんだ』とラズーミヒンは考えて、なぜかしらうれしくなった。
「僕はまたルージンの贈物かと思った」とラスコーリニコフは言った。
「いいえ、あの人はまだドゥーネチカに何一つ贈物をしないんだよ」
「ははあ！　ときに、お母さん覚えてるでしょう、僕が一度恋をして、結婚しようとしたことを」と母親の顔を見ながら、彼はだしぬけに言い出した。こちらは思いがけない話題の転換と、それを言い出した息子の調子に打たれて、どぎもを抜かれた。
「ああ、お前、そうだったね！」
　プリヘーリヤは、ドゥーネチカとラズーミヒンに眼交（めま）ぜをした。
「ふむ……そう！　だが、何を話したものかなあ！　もうあまり覚えていないくらいだ。それは病身な娘でしたよ」彼はまた急に考え込んで、目を伏せながら、ことばを続けた。「全くの病身でした。乞食（こじき）に物をやる事が好きでね、しょっちゅう尼寺のことばかり空想していましたよ。そうそう、一度などは、僕にその話を始めて、涙を流して泣いたことがありましたっけ。そうだ、そうだ……覚えている……よく覚えている。器量の悪い女でしてね……全く、どうしてあの時あんな女に心をひかれたんだかわけがわからないくらいです。おそらく、いつも病気がちだったせいだろうと思います……もしそのうえびっこかせむしだったら、もっと好きになったかもしれない……（彼はもの思わしげににたりと笑った）こういうわけで……何かまるで春の夢みたいなものだったんですよ……」
「いいえ、それは春の夢ばかりじゃないわ」とドゥーネチカは感情のこもった調子で言った。
　彼は注意深く、緊張した表情で妹を見つめていたが、その言葉はよく聞き分けられなかったか、それとも了解できなかったらしい。それから、深いもの思いのていで立ち上がり、母の傍へ寄って接吻（せっぷん）すると、また席へ戻って腰をかけた。
「お前はまだ今でもその娘を愛しているの？」とプリヘーリヤは感動したさまで言った。
「その女を？　今でも？　ああ、そう……お母さんはあの娘のことを言ってるんですね！　いや、今じゃそんなことはもう、なんだかあの世のことみたいで……そしてずっと前のような気がします。それにまわりのことが何もかも、この世の出来事ではないようです……」
　彼は注意深く一同の顔を見た。

「現にお母さんたちだって……まるで千里も手前から見ているような気がする……ちょっ、だが、いったいなんだってこんな話をしてるんだろう！　なんのためにくどくどきくんだ！」と彼はいまいましげな調子で言い足して、口をつむぐと、爪をかじりかじり、また考え込んでしまった。

「まあ、お前の部屋ったらなんてひどい所だろうね、ロージャ、まるで棺のようじゃないか」重苦しい沈黙を破りながら、ふいにプリヘーリヤが言った。「お前がそんな気鬱病になったのも、半分はこの部屋のせいだと思うよ」

「部屋？……」と彼は放心したように答えた。「そう、部屋もだいぶん手伝っていますよ……僕もやはりそう思いましたよ……だが、お母さん、今あなたがどんな妙なことを考え出されたか、自分でもご存じないでしょう」と彼は急にこう言いだして、奇怪な薄笑いを漏らした。

もうちょっとしたら、この邂逅も、この三年ぶりに会った肉親も、それから何事にまれ語り合うことの絶対に不可能な目下の状態で用いられているこの親しげな調子も――すべてが彼にとって、ついに堪え難いものとなったに相違ない。けれども、まだ一つ、のっぴきならぬ問題が残っていた。それはどうでもこうでも、ぜひ今日きまりをつけてしまわなければならない――これは先ほど目をさました時から、決心していることだった。今彼はその問題を思い出して、いい逃路のように喜んだ。

「ねえ、ドゥーニャ」と彼はまじめなそっけない調子で口を切った。「昨日のことはむろん僕があやまるけれど、根本はけっして譲歩しないから、それだけは自分の義務として、もう一度お前に断わっておく。僕か、ルージンか、二人に一人だ。僕は卑劣漢でもかまわないが、お前はいけない。どっちか一人だ。もしお前がルージンのところへ行けば、僕はその場かぎりお前を妹と思わないぞ」

「ロージャ、ロージャ、それでは！　お前、昨日とまるで同じことじゃないか！」とプリヘーリヤは情なさそうに叫んだ。「どうしてお前はしじゅう自分のことを卑劣漢だなんていうの、わたしは聞いていられない！　昨日だってそうです……」

「兄さん」とドゥーニャは同じくそっけない調子で、きっぱりと答えた。「この事では、兄さんの方に間違いがあるんですわ。わたしは昨夜一晩じゅう考えてみて、その間違いを見つけましたの。つまり問題はこうなの。どうやら兄さんは、わたしが誰かに、誰かのために、自分を犠牲にささげていると、こう想像してらっしゃるけれど、そんなことはけっしてありません。わたしはただ自分のために結婚するんですの。だって、わたし自身が苦しいんですもの。もっともそのほかに、もし自分が身内のためになるようなら、うれしいと思いますわ、けれど、わたし、それが根本の動機で決心したんじゃありません……」

『嘘をついてる！』と彼は、むしゃくしゃ腹で爪をかみながら、心の中で思った。『気位の高い女だ！　恩を着せたがっていながら、本音をはくのが厭なんだ！　つま

り高慢なのだ！　ああ、なんてみな卑劣な根性なのだろう！　やつらの愛は憎み合っているような愛だ……ああ、おれは実に……やつらが憎くってたまらない！』

「一口に言えば、わたしはピョートル・ペトローヴィッチと結婚します」とドゥーネチカはことばを続けた。「そのわけは、つらいことが二つあれば、少しでも軽い方を選びたいからですの。わたしはあの人が期待していることを、何もかも忠実に履行するつもりですから、つまりあの人をだますことにはなりません……兄さん、なぜ今にやりとお笑いになったの？」

　彼女も同じようにかっとなった。その目には憤怒（ふんぬ）の色がひらめいた。

「何もかも履行する？」毒々しい薄笑いを漏らしながら、彼は問い返した。

「ある程度まではね。ピョートル・ペトローヴィッチの求婚の仕方と形式で、あの人が何を要求しているのか、すぐわかりましたもの。あの人は自分というものを、あまり高く評価しているかもしれません。でもその代わり、わたしも相当に認めてくれるだろうと、それを期待しているんですの……何をまた笑ってらっしゃるの？」

「お前はまた何を赤くなるんだい？　お前は嘘をついている。お前はわざと嘘をついてるんだ。ただ女らしい強情で、おれに我を張り通したいもんだからさ……お前はルージンを尊敬することなんかできやしない。僕はあの男と会いもし、話もしたんだよ。してみると、お前は金のために自分を売ってるのだ、してみると、いずれにしても卑劣な行為だ。僕はね、お前が少なくともまだ赤くなれる、それだけでも喜んでいるよ！」

「そんなことないわ、嘘なんか言やしません！……」ドゥーネチカはしだいに冷静を失いながら、こう叫んだ。「わたしだって、あの人がわたしを認めてもくれ、大切にもしてくれると確信しなかったら、結婚なんかしやしませんわ。またわたし自身も、あの人を尊敬できるという確信がなかったら、けっして結婚なんかするものですか。幸いわたしは、今日さっそくその確信を得ることができるんですの。こうした結婚は兄さんのおっしゃるように卑劣なことじゃありませんわ！　また、たとい兄さんのおっしゃることが本当で、わたしが全く卑劣な決心をしたのだとしても――そうまでにおっしゃるのは、兄さんとしてもあまり残酷じゃなくって？　なんだって兄さんは自分にもない……かもしれないような勇気を、わたしに要求なさるんですの？　それはあまり横暴だわ、圧制だわ！　もしわたしが誰か他人の一生を破滅させるとでもいうのならともかく、ただわたし自身の事じゃないの。わたしはまだ人を殺したことなんかなくってよ！……なんだってそんな目をしてわたしをごらんになるの？　どうしてそんなに真っ青になるの？　ロージャ、どうしたの？　ロージャ、兄さんてば……」

「ああ、どうしよう！　また気絶してしまった！」とプリヘーリヤは叫んだ。

「いや、いや……くだらない、なんでもありゃしない！……少しめまいがしただけで、気絶でもなんでもありゃ

しません……気絶気絶って一つ覚えみたいに！……ふむ！　そこでと……何を言うつもりだったっけ？　そうだ。お前は今日にもさっそく、お前があの男を尊敬することができ、あの男が……お前を認めてくれてるという確信を得ると言ったが、いったいそりゃどういうわけだい？　ねえ、そう言ったろう？　お前は確かに今日と言ったようだが？　それとも僕の聞き違えだったか？」

「お母さん、兄さんにピョートル・ペトローヴィッチの手紙を見せてあげてくださいな」とドゥーネチカは言った。

　プリヘーリヤは震える手で手紙を渡した。彼は非常な好奇心をもってそれを受け取ったが、広げて見る前に、彼は突然何かに驚いたような顔つきで、ドゥーネチカを見つめた。

「おかしい」突然何か新しい想念に打たれでもしたように、彼はゆっくりした語調で言った。「おれはなんだってこんなに気をもんでるんだろう？　何をこんなにわめいたり騒いだりしてるんだろう？　勝手に誰とでも好きな男と結婚するがいい！」

　彼はひとり言のように言ったが、声はかなり高かった。そしてしばらくの間、どぎもを抜かれたような顔をして、妹を見つめていた。

　彼は依然として驚きの表情を残したまま、やっと手紙をひらいた。それから、ゆるゆると注意深く読み始め、二度まで読み返した。プリヘーリヤはかくべつ不安に悩まされていた。それにほかの者も、みんなある特殊なものを期待していた。

「これは驚いた」ややしばらく考えた後で、手紙を母親に返しながら、彼は誰に向いてともなく口を切った。「あの男は弁護士で、しじゅう訴訟事件を扱ってるから、話だってやはり特別な……癖があるけれど――書く方となると、まるで無学ものじゃないか」

　一座は少しざわざわとした。彼らはまるで違ったことを期待していたので。

「だってああいう連中は、皆こんな風に書くんだよ」とラズーミヒンがきれぎれな声で注意した。

「じゃ君は読んだのか！」

「うん」

「わたしたちがお目にかけたんだよ、ロージャ。わたしたちは……先ほどご相談したんだよ」とプリヘーリヤはまごまごしながら言い出した。

「それはつまり裁判所式の文体なんだよ」とラズーミヒンはさえぎった。「裁判所の文書は今でもそういう風に書いてるんだよ」

「裁判所式？　そうだ、裁判所式なんだ、事務家風なんだ……まるっきりの無学というのでもないが、非常に文学的というのでもない。つまり事務家風なんだ！」

「ピョートル・ペトローヴィッチは、ご自分が貧しい教育を受けてきたことを、隠してなんかいらっしゃいません。かえって、独力で自分の道をひらいたのを、誇りとしていらっしゃるくらいですわ」兄の新しい調子にむっとして、アヴドーチャは注意した。

「けっこうだ、誇りにしてるとすりゃ、それだけの理由があるんだろうよ――僕は反対なんかしないよ。ねえ、ドゥーニャ、僕がこの手紙に対して、こんな瑣末な批評しかしなかったので、お前はどうやら憤慨したらしいね。そして、何かいまいましさ半分にお前をいじめるつもりで、わざとこんなつまらない事を言い出した、とでも考えてるかもしれないが、それどころじゃない、この手紙の文体に関連して、この場合断じて余計なことと言えないような事が、頭に浮かんだのだ。手紙の中に一つ『自業自得』という非常に意味深長な、ことさら目立つように書かれたことばがあるじゃないか。それればかりか、僕が行けばすぐ帰ってしまうという威嚇がある。この帰るという威嚇は――もし言うことを聞かなければ、お前たち二人をも捨ててしまうぞ、というのと同じことだ。ペテルブルグまで呼び出した今さらとなって、捨ててしまおうというんだよ。そこでお前はどう考える――ルージンにこんな書き方をされても、たとえばこの男か（と彼はラズーミヒンを指さした）、またはゾシーモフか、でなければ我々の中の誰かに書かれた場合と比べて、同じように腹を立てることができるかい？」

「い、いいえ」とドゥーネチカは活気づきながら答えた。

「わたしもよくわかったわ――この手紙の書き方はあまり知恵がなさすぎるけれど、ただ文章がへたなだけかもしれないって……全く兄さんの批評はうまかったわ。思いがけないくらい……」

「これは裁判所式の書き方だ。ところが、裁判所式にやると、こうよりほかには書けないんだから、ことによると、あの男が自分で思ったより以上、無作法になったのかもしれない。しかし、僕はも少しお前の迷いを解いてやらなくちゃならない。この手紙の中にはまだ一つ問題がある。それは僕に対する誹謗だ。しかもかなり陋劣なものなんだ。僕はきのう途方に暮れているやもめに金をやった。しかし『葬儀費と称して』じゃない、じっさい葬式の費用にやったんだ。それから娘――やつのいわゆる『いかがわしき生業を営みおる女』には、僕きのう生まれて初めて会ったんだが、金はその娘の手に渡したんじゃなくて、正にやもめの手に渡したんだ。それやこれやで見ると、あの男が僕を中傷して、お前たちと仲たがいをさせようという、あまりせっかちすぎるもくろみが見え透いてる。しかも、やっぱり裁判所式な書き方なんだ。つまりあまり腹の見え透いた、せっかちな、知恵のない書き方なのさ。やつはなかなかりこうな男だが、しかしりこうに立ち回るには、りこうだけじゃ足りないよ。これだけでおよそ人物はわかってしまうから……あの男がお前を本当に認めてるとは、どうも思えないよ。こんなことを言うのも、要するに参考のためだ。つまり、心からお前のためを思えばこそだよ……」

ドゥーネチカは返事をしなかった。決心はもうさっきからついていたので、彼女はただ夜が来るのを待つばかりであった。

「で、ロージャ、お前はいったいどう決めるつもりなの？」思いがけない彼の新しい事務的な口調に、いよい

よ不安を増したプリヘーリヤはこう問いかけた。
「そりゃなんです、『どう決める』って？」
「だってほら、ピョートル・ペトローヴィッチがこの通り、今晩お前が来ないように……もし来れば、すぐ帰ってしまうと書いているじゃないの。だからお前どうします……来るつもり？……」
「それはもうむろん、僕の決めるべきことじゃなく、第一に、あなたの決めるべきことですよ。もしルージンのそうした要求を、侮辱とお思いにならなければね。それから第二には、ドゥーニャの心しだいです。もしやはり侮辱を感じなければ。僕はあなた方のお好きなようにしますから」と彼はそっけない調子で言い足した。
「ドゥーネチカはもうちゃんと決心してね、わたしもそれに同意なんだよ」とプリヘーリヤは急いで口をはさんだ。
「わたしはね。ロージャ、ぜひともその席へ兄さんに来ていただくように、折り入ってお願いしようと決心したのよ」とドゥーニャは言った。「来てくれて？」
「行こう」
「わたしあなたにもお願いしますわ。今夜八時にわたしどもへいらしてくださいませんか」と彼女はラズーミヒンに向かって言った。「お母さん、わたしこの方にも来ていただきますわ」
「けっこうだとも、ドゥーネチカ。さあ、これでお前たちの相談が決まったから」とプリヘーリヤは言い添えた。
「思い切ってそういうことにしてしまおうよ。わたしもその方が楽だから。わたしは面(めん)をかぶったり、嘘をいうのが嫌いでねえ。いっそ何もかも本当のことを言ってしまおうよ……もうこうなりゃ、ピョートル・ペトローヴィッチが怒ろうと怒るまいと、どうだっていいさ！」

四

そのときドアが静かに開いて、一人の娘がおずおずとあたりを見回しながら、部屋の中へはいって来た。一同は驚きと好奇の念を抱きながら、その方へふり向いた。ラスコーリニコフは一目見たとき、彼女が誰かわからなかった。それはソフィヤ・セミョーノヴナ・マルメラードヴァであった。彼は昨日この娘を初めて見たのだけれど、ああいう時ではあり、ああいう環境でもあり、また当人もああいう身なりをしていたために、彼の記憶にはまるで違った顔かたちが印象されていた。いま見ると、彼女はむしろみすぼらしいくらいじみな服装(なり)をした、まだずぶ若い子供子供した娘で、つつましやかな礼儀ただしい物腰をして、晴れやかな、しかしどことなくおびえたようなところのある顔立ちをしていた。彼女は思い切って粗末な不断着を身につけて、頭には流行おくれの古びた帽子をかぶっていたが、手には昨日の通りパラソルを持っていた。部屋の中が思いがけなく人でいっぱいなのを見て、彼女はまごついたというよりも、すっかり度を失い、まるで小さい子供みたいにおどおどしながら、すぐ引っ返そうとするような素振りさえ見せた。

「ああ……あなたですか！……」ラスコーリニコフはなみなみならぬ驚きのさまでこう言ったが、急に自分でもまごまごしてしまった。

彼はすぐその時、母や妹がルージンの手紙によって、『いかがわしき生業を営む娘』の存在を、多少なりとも知っているはずだということを、ふと思い浮かべた。彼はたった今ルージンの誹謗を反駁(はんばく)して、その娘は初めて見たばかりだと言ったのに、突然その当人がはいって来たのである。それから彼はまた、『いかがわしき生業を営む女』ということばに対しては、少しも抗弁しなかったことを思い出した。こうしたすべてのことが、はっきりとではなかったが、瞬間的に彼の頭にひらめいた。けれど、なおよく注意して見ると、娘が卑しめはずかしめられた哀れな存在であることに、急に気がついた。それはまったく可哀想なほど小さくなっていじけていた。彼女が恐怖のあまり逃げ出しそうな素振りを見せた時、彼は自分の内部で何か引っくり返ったような気がした。

「あなたがいらっしゃろうとは、思いもかけなかった」と、目で彼女を引き止めながら、ラスコーリニコフはせきこんで言った。「どうぞおかけください。きっとカチェリーナ・イヴァーノヴナのお使いでしょう。どうぞ、そこじゃない、こちらへお掛けください……」

ラスコーリニコフの三つしかない椅子の一つに腰をかけ、戸口のすぐ傍に座を占めていたラズーミヒンは、ソーニャがはいって来ると一緒に、彼女に道を与えるために席を立った。初めラスコーリニコフは、ゾシーモフの掛けていた長椅子の一隅をすすめようとしたが、ふとそれではあまり慣れ慣れし過ぎる、それは自分の寝台にもなるものだと気づき、急いでラズーミヒンの椅子をさしたのである。

「君はこっちへかけてくれ」と彼は言ってゾシーモフの掛けていた片隅へラズーミヒンをすわらせた。

ソーニャは恐怖のあまり、わなわな身を震わさないばかりの有様で、ようやく席に着くと、臆病げにちらと二人の婦人を見やった。彼女を見うけたところ、どうしてこんな人たちと並んですわることができたか、自分ながら合点がいかないらしい様子だった。ふとその事を考えると、彼女はすっかりおびえ上がって、またすぐ席を立ち上がり、途方にくれる程どぎまぎしながら、ラスコーリニコフに話しかけた。

「わたし……わたし……ほんのちょっとあがりましたので。おじゃまいたしまして申しわけありません」と彼女は口ごもりながら言い出した。「わたしはカチェリーナ・イヴァーノヴナの使いであがりました。ほかに誰も人がないものでございますから……カチェリーナ・イヴァーノヴナが、明日のお葬式にぜひいらしていただくように、折り入ってお願いしてこいと申しました。……朝、祈祷式がございます……ミトロファニエフスキイで……それからわたしどもで……母のところで……一口めしあがっていただけますと……光栄に存じますと……母の申しつけでございます」

ソーニャはいいよどみ口をつぐんだ。

「なるべく必ず……必ず伺います……」ラスコーリニコフも同様に立ちあがって、同様にいいよどみことばを濁しながら、こう答えた。「どうぞお掛けください」と彼はだしぬけに言った。「僕ちょっとお話したいことがあるんです。どうぞ、お急ぎかもしれませんが――お願いですから、僕のために二分ばかりさいてください……」

そういって、彼女に椅子をすすめた。ソーニャは再び腰をおろして、またしてもおずおずと途方にくれたように、急いでちらと二人の婦人を見たが、急に目を伏せてしまった。

ラスコーリニコフの青白い顔はかっと赤くなった。彼はまるで全身をけいれんに縛られたようになり、目はぎらぎらと燃え出した。

「お母さん」と彼はしっかりした押しつけるような調子で言った。「この方がソフィヤ・セミョーノヴナ・マルメラードヴァです。もうさっきお話したマルメラードフ氏、きのう僕の目の前で馬のひづめにかけられた、あの不幸な人の娘さんです……」

プリヘーリヤはソーニャをちらと見て、心持目を細めた。ロージャの執拗ないどむようなまなざしに、かなりどぎまぎしていたにもかかわらず、彼女はどうしてもこういう態度をとって、一種の快感を味わずにいられなかった。ドゥーネチカはまじめな表情で、まともに哀れな娘の顔に目を凝らし、合点がいかぬというように、彼女を点検にかかった。ソーニャはこの紹介が耳にはいると、また目を上げようとしたが、今度は前より余計どぎまぎしてしまった。

「あなたに伺おうと思ってたんですが」とラスコーリニコフは急いで彼女に話しかけた。「今日お宅ではどんな風に片がつきました？　うるさい事はありませんでした

か？……たとえば警察の方なんか」
「いいえ、すっかり片づきました……だって亡くなった原因が、わかり過ぎるぐらいわかっているものですから、別段うるさい事はございませんでした。ただ同じ家の借家人たちが腹を立てまして」
「なぜです？」
「死骸をいつまでも置いとくって……何分この暑さで、臭いがいたすものですから……で、今日は晩の祈祷式のころに、墓地へ運んで参りまして、明日まで礼拝堂に置いていただくつもりでございます。カチェリーナ・イヴァーノヴナは、最初それをいやがりましたが、今では自分でも、ほかに仕様のない事がわかったようでございます……」
「じゃ今日ですね？」
「母はあす教会のお葬式に、あなたもお出向きくださいますようと申しております。それからあとで宅の方へも、法事にお寄りを願いたいって」
「お母さんは法事をなさるんですか？」
「ええ、ほんのお口よごしですけど。母はくれぐれも、昨日お助けくださいましたお礼を申すようにとのことで……全くあなたがお見えにならなかったら、お葬いをすることもできなかったのでございますから」
とふいに、彼女の唇とおとがいがぴくぴくとおどり始めた。けれど、彼女は急いで目を落とし、じっと我慢して押しこらえた。
話の間に、ラスコーリニコフはしさいに彼女を観察した。それはやせた、全くやせこけた、青白い、割合に輪郭の整わない、どことなくとがった感じのする顔で、小さな鼻とおとがいもとがっていた、彼女は美人とは言いにくいくらいであったが、その代わり、青い目が透き通るように澄み切って、それが生き生きしてくると、誰しもついひきつけられてしまうくらい、顔の表情がなんともいえず善良な無邪気な感じになってくるのであった。その上彼女の顔にもその姿全体にも、一つきわ立った特色があった。それは彼女がもう十八というにもかかわらず、その年よりもずっと若く、まるでほんの小娘――というよりむしろ子供のように見えることであった。そして、それがどうかするとおかしいほど彼女の動作に現われるのであった。
「ですが、いったいカチェリーナ・イヴァーノヴナは、あれっぽっちの金で万事を始末して、おまけにご馳走までしようとなさるんですか？……」とラスコーリニコフはしつこく話を続けながら、こう尋ねた。
「だって、棺も粗末なのでございますし……それに何もかも手軽にいたしますから、いくらもかかりませんの……さっきカチェリーナ・イヴァーノヴナと二人で、すっかり勘定をしてみましたら、法事をするくらい余りました……カチェリーナ・イヴァーノヴナはぜひそうしたいと申しますの。だって、やはりそういたしませんでは……母にはそれがせめてもの慰めなんでございます……ご存じの通りの人でございますから……」
「わかりますとも、わかりますとも……そりゃもちろん

です……なんだってあなたはそんなに僕の部屋を、じろじろごらんなさるんです？　さっきもこの母が、棺に似てるなんて言ったところですよ」
「あなたは昨日わたしどもに、お持合せをすっかりくだすったんですわね！」ソーネチカはふいにしっかりした早口で、ささやくように言いながら、急にまた深くうなだれてしまった。
　彼女の唇とおとがいは、またしてもおどり出した。彼女はもう先ほどから、ラスコーリニコフの貧しい住まいのさまに胸を打たれていたので、ふとわれしらずこんなことばが口を出たのである。一座を沈黙が襲った。ドゥーネチカの目は妙に輝いてきた。プリヘーリヤは愛想よくソーニャをながめた。
「ロージャ」と彼女は席を立ちながら言った。「わたしたちはむろんあとで一緒に、ご飯をいただくことになってるんだよ。ドゥーネチカ、帰りましょうよ……ねえ、ロージャ、お前少し散歩してね、それからしばらく横になって休むがいい。その上でなるべく早く来ておくれ……でないと、わたしたちはお前を疲れさせたようで、気がかりだからね……」
「ええ、ええ、行きますとも」と彼は立ち上がりながら、気ぜわしげに答えた。「しかし、僕は用事があるから……」
「え、いったい君たちはみな別々に食事をするつもりなのかい？」びっくりしてラスコーリニコフを見ながら、ラズーミヒンは叫んだ。「君それは何を言うんだ？」
「ああ、ああ、行くとも、むろん……だが、君はちょっと残ってくれないか。お母さん、この男はいま入り用じゃないでしょう？　それとも、僕が横取りするようになりますかしら？」
「いいえ、そんなことありゃしないよ！　じゃ、ドミートリイ・プロコーフィッチ、どうぞあなたも食事にいらしてくださいまし、ね？」
「どうぞぜひいらしてくださいましな」とドゥーニャも一緒に頼んだ。
　ラズーミヒンはおじぎをして、満面えみ輝いた。ちょっとの間、急に誰もがなんとなく妙にきまりの悪い思いをした。
「ではさようなら、ロージャ。いえ、そうじゃない、また後ほどね。わたし『さようなら』と言うのが嫌いでね。さようなら、ナスターシャ……あら、また『さようなら』なんて言ってしまった！……」
　プリヘーリヤはソーネチカにも挨拶（あいさつ）しようとしたが、なぜかそれができなかった。で、彼女はそそくさと部屋を出てしまった。
　けれど、アヴドーチャは順番を待ってでもいたように、母に続いてソーニャの傍を通りながら、心のこもったいんぎんな低い会釈で挨拶した。ソーネチカはどぎまぎし、おびえたようにあわてて会釈を返した。アヴドーチャが自分のことも忘れずに、いんぎんな態度を示してくれたのが、彼女にはつらく切なく感ぜられるかのように、その顔には病的な感じが反射したほどである。

「ドゥーニャ、じゃさようなら！」とラスコーリニコフはもう控室へ出てから、そう叫んだ。「さあ、手をおくれ！」
「あら、いま上げたじゃありませんか、忘れたの？」優しくきまり悪げに、兄の方へふり向きながら、ドゥーニャは答えた。
「なに、いいじゃないか、もう一度おくれよ！」
こう言って、彼は堅く妹の指を握りしめた。ドゥーネチカはにっと微笑して見せて、ぼうっと顔を赤らめた。そして、すばやく自分の手を引くと、母のあとを追って行ってしまった。やはりなぜか幸福に満ちた様子で。
「さあ、これでよし！」と自分の部屋へ帰ると、はればれしい目でソーニャを見ながら、彼は口を切った。「神よ、死者に平安を与え、生けるものになお生くることを許したまえ！　そうじゃありませんか？　そうじゃありませんか？　ね、そうじゃありませんか？」
ソーニャはあっけにとられながら、にわかに明るくなった彼の顔をながめた。彼はしばらく無言のまま、じっと彼女を見つめていた。亡くなった父のマルメラードフの彼女に関する物語が、この瞬間そっくり彼の記憶によみがえった……
「やれやれ、ドゥーネチカ！」表へ出るやいなや、プリヘーリヤはすぐに言い出した。「今こうして出て来たのが、わたしゃなんだかうれしいみたいな気がする、妙に気が楽になったようでね。でもねえ、きのう汽車の中では、まさかこんなことをうれしがろうとは、思いも寄らなかったのに！」
「また同じことを言うようですけどね、お母さん、兄さんはまだよっぽど悪いのよ。あれがお母さんにはわからなくって？　もしかしたら、わたしたちのことを苦にして、体をこわしたのかもしれなくってよ。わたしたちはもっと斟酌（しんしゃく）してあげて、たいていのことは辛抱しなくちゃならないんですわ」
「だってお前は斟酌してあげなかったじゃないか！」とプリヘーリヤはすぐさま熱くなって、一生懸命にさえぎった。「ねえ、ドゥーニャ、わたしはお前たち二人をつくづく見ていたが、お前は兄さんとそっくりそのままだよ、顔立ちというよりか、気性の方がね！　お前たちは二人とも陰気な気むずかしやで、怒りっぽくて、気位が高くて、しかも二人ながら心が広いんだよ……だって、あの子が利己主義だなんて、そんなことはあるはずがないじゃないの、え、ドゥーネチカ？……ああ、今晩みなが集まってからのことを考えると、わたしゃもう胸が縮み上がりそうだ！」
「そんなに心配なさらない方がいいわ、お母さん。どうせ、なるようにしかならないんですから」
「ドゥーネチカ！　今わたしたちがどんな羽目になっているか、お前もちっと考えてごらんよ！　ピョートル・ペトローヴィッチに断わられたら、まあどうなると思って？」と哀れなプリヘーリヤは、ついうっかり口をすべらした。
「もしそうだったら、あんな人になんの値うちがあっ

て！」とドゥーネチカは鋭く、吐き出すように答えた。「でも、わたしたちはいま出て来て、いいことをしたね」とプリヘーリヤはせっかちに相手のことばをさえぎった。「ロージャは、どこかへ急な用があると言ってたが、ちょっとは外を歩いて、新しい空気でも吸うといいんだよ……ほんとにあの部屋の息苦しいことったら、恐ろしいよう……だけどここじゃ、どこへ行けばいい空気が吸えるんだろう？　ここじゃ通りでも、通風口のない部屋の中にいるのと同じだもの！　ああ、ほんとになんて町だろう……ちょっと少しわきへお寄り、つぶされてしまうよ。なんだかかついで来たから！　あら、ピアノを運んで来たんだよ、ほんとに……なんてやたらにぶっつかるんだろう……わたしはね、あの娘もやはり恐ろしくって仕様がないよ……」

「娘って誰、お母さん？」

「ほら、あれさ、ソフィヤ・セミョーノヴナ、今来ていた……」

「どうして？」

「わたしなんだか虫が知らせるようでね、ドゥーニャ。まあ、お前は本当にするともしないとも勝手だけれど、あの娘がはいって来たとたんに、わたしはそう思ったよ――つまりここにこそ本当の曰くがあるって……」

「なんにも曰くなんかありゃしないわ！」とドゥーニャはいまいましげに叫んだ。「お母さんの虫の知らせも困ったものね！　兄さんは昨日はじめてあの娘さんに会ったばかりで、はいって来た時も、誰だか気がつかなかったくらいじゃありませんか」

「じゃ、まあ見ておいで！　わたしはあの娘のことが気になって仕様がないんだよ。まあ、今に見ておいで、見ておいで！　わたしはほんとにびっくりしてしまったよ。わたしの方を一生懸命に見るその目つきったら、わたしは椅子の上にじっと居たたまらないほどだったよ。覚えておいでかい、あれが紹介を始めた時さ？　わたし変な気がしたよ――ピョートル・ペトローヴィッチがあんなことを書いてるのに、ロージャはあの娘をわたしたちに、しかもお前にまで引合せるんだもの！　だからつまり、大切な人なんだよ！」

「あの人がいろんな事を書くのは、何も珍しかありませんわ！　わたしたちのことだって、世間ではやはり噂したり、書いたりしたじゃありませんか。いったいお忘れになったの？　わたしあの娘さんは……立派な人で、そんな陰口は皆でたらめに違いないと思うわ！」

「そうであってくれればね！」

「ピョートル・ペトローヴィッチはやくざな金棒引きよ」とふいにドゥーネチカはずばりと言った。

プリヘーリヤは鳴りをひそめた。会話はぷつりと切れた。

「ねえ君、君にちょっと話があるんだ……」とラスコーリニコフは、ラズーミヒンを小窓の方へ引っ張って行きながら、こう言った……

「では、カチェリーナ・イヴァーノヴナに、いらしてくださいますと申し伝えますから……」ソーニャはそわそ

わと帰りじたくをして、会釈しながら言った。
「ただ今すぐ、ソフィヤ・セミョーノヴナ、僕たちの話は何も秘密じゃないんですから、けっしてかまいませんよ……僕はまだあなたに一言言いたいことがあるんです……」と言い終わらないうち、彼は急にぷっつり断ち切ったように、ラズーミヒンの方へふり向いた。「あのね、君、君は知ってるんだろう、あのほらなんといったっけな！……ポルフィーリイ・ペトローヴィッチさ？」
「知らなくってさ！　親類だもの、それがどうしたんだい？」こちらはこみ上げて来る好奇心にかられて、こう言い足した。
「だって、あの男が今あの事件を……ほら、例の殺人事件さ……ねえ、きのう君らが話していた……あれを扱ってるって？」
「うん……それで？」とラズーミヒンは急に目をみはった。
「あの男が入質人を調べたそうだが、実は僕も置いたものがあるんだ。なに、つまらないものだがね、でも僕がこっちへ出て来る時に、妹が記念にくれた指輪と、親父の銀時計なんだ。皆で五、六ルーブリの代物だが、僕にしては大切なものなんだよ、記念だからね。そこで、どうしたもんだろう？　僕はそいつをなくしたくないんだ、ことに時計の方をね。さっきドゥーネチカの時計の話が出たとき、母があれを見せろと言やしないかと思って、僕はびくびくしていたんだ。何しろ親父のあとに残った唯一の記念品なんだから。もしあれがなくなったら、母は病気になってしまう！　何しろ女だからね！　まあ、こういったわけで、どうしたもんだろう、一つ教えてくれないか！　警察へ届けることは知ってるが、それよりいっそ、ポルフィーリイに直接の方がよくはないかと思うんだ、え？　君どう思う？　なんとか早く処置をつけなくちゃ。見ていたまえ、また食事の前に、母がきっと言い出すから！」
「警察なんか絶対に駄目だ、どうしてもポルフィーリイのところだな！」ラズーミヒンはなぜか非常に興奮して叫んだ。「いや、そいつは愉快だ！　何もぐずぐずしてることはない。すぐ出かけよう。ほんの一足だ。きっと家にいるよ！」
「そうだな……行ってもいい……」
「あの男も君と近づきになるのは、非常に、非常に、非常に喜ぶよ！　僕も君のことはあの男に、もうたびたび話したよ、いろんな時にね……現に昨日も話したんだぜ。行こう！……じゃ、君はあの婆さんを知ってたんだね？　そいつはけっこうだ！……これは、実にうまい都合になって来たぞ！……あっ、そうだ……ソフィヤ・イヴァーノヴナ……」
「ソフィヤ・セミョーノヴナだよ」とラスコーリニコフは訂正した。「ソフィヤ・セミョーノヴナ、これは僕の友人で、ラズーミヒンといいます。いい男ですから……」
「これからお出かけになるんでしたら……」まるでラズーミヒンの方を見ないで、ソーニャはこう言ったが、そのためよけいにまごまごしてしまった。

「じゃ、一緒に出かけましょう！」とラスコーリニコフは話を決めた。「今日にもさっそく僕あなたのところへお寄りします、ただね、ソフィヤ・セミョーノヴナ、どこへお住まいですか、それを聞かしてくれませんか？」
　彼はまごついたというほどではないが、なんとなくせきこんだ様子で、彼女の視線を避けるようにした。ソーニャは自分の居所を教えたが、その時また赤くなった。三人は一緒に出かけた。
「鍵はかけないのかい？」二人のあとから階段をおりながら、ラズーミヒンがきいた。
「一度もかけたことはないよ！……もっとも、もう二年ばかりというもの、しょっちゅう錠を買いたいとは思ってるんだがね」と彼は無造作にいい足した。「鍵をかける必要のない人間は、幸福なもんですね？」と彼は笑いながら、ソーニャに話しかけた。
　やがて三人は表へ出て、門口で立ち止まった。
「あなたは右へですね、ソフィヤ・セミョーノヴナ？　ときに、あなたはどうして僕を捜し当てました？」何かまるで別なことを言いたそうなようすで、彼は彼女に尋ねた。彼は絶えず彼女の落ち着いた、澄んだ目を見たかったけれど、なぜかそれができなかった……
「だって昨日ポーレチカに、お住まいをおっしゃったじゃありませんか」
「ポーリャ？　ああ、そう……ポーレチカ！　あの……小さい女の子……あれはあなたの妹さんでしたね？　僕あの子に住所を教えたかしら？」
「まあ、お忘れになったんですの？」
「いや……覚えています……」
「それに、あなたの事はなくなった父からも、あの当時お噂を伺ったことがありますの……もっとも、その時はまだお名前を存じませんでしたし、父もやはりそうでした……ただいま参りましたとき……昨晩ご名字を伺いましたので、ラスコーリニコフ様のお住まいはどちらかと、尋ねましたのですけれど……あなたがやはり間借りしていらっしゃるとは、思いも寄りませんでした……では、失礼いたします……わたしはカチェリーナ・イヴァーノヴナのところへ……」
　彼女は、やっと二人に別れたのがうれしくてたまらなかった。彼女は目を伏せて、急ぎ足に歩いた。一刻も早く二人の目から隠れて、次の通りへ曲る右角までの二十歩を、一刻も早く通り過ぎ、一人きりになってゆっくり歩きながら、誰の顔も見ず、何一つ気にもとめないで、いま話した一つ一つのことば、一つ一つの状況を考えたり、思い出したり、考え合せたりしたかったのである。彼女はこれまでかつて一度もこんな感じを経験したことがなかった。大きな新しい世界がいつともなく、ぼうっと彼女の心にはいりこんだのである。彼女はふと、ラスコーリニコフが今日訪ねたいと言ったことを思い出した。もしかしたら朝のうちに、ことによると今すぐにも！
「ただ今日だけはいらっしゃらないように、どうぞ今日でないように！」まるで小さい子供がおびえたとき哀願するように、彼女は胸のしびれるような思いでつぶやい

た。「ああ、どうしよう！　わたしのところへ……あの部屋へ……あの方がごらんになる……ああ、どうしよう！」

で、彼女はその時、一人の見知らぬ男がすぐあとから、根気よくつけてくるのに、もちろん気のつくはずがなかった。男は彼女が門を出るとすぐ、つけていたのである。ラズーミヒンと、ラスコーリニコフと、彼女が三人そろって、歩道の上で立ち話をしていたちょうどその折、この通行人は傍を通りすがりに、思いがけなく小耳にはさんだ『ラスコーリニコフ様のお住まいはどちらかと尋ねました』というソーニャのことばに、思わずぴくりとしたのである。彼はすばやくしかも注意して三人を、ことにソーニャが話しかけていたラスコーリニコフを見回し、それから家をじろりとながめて、記憶にとめた。これはすべて一瞬時のことで、歩きながらのことだった。それから男は、何くわぬ顔をして通り過ぎ、少し先へ行ってから、何か待ち受けるように足をゆるめた。彼はソーニャを待っていたのである。別れを告げているのも、ソーニャがすぐどこか自分の家へ帰って行くらしいのも、彼はすっかり見てとったのである。

『だが、いったいどこへ帰って行くんだろう？　あの顔はどこかで見たような気がする』と彼はソーニャの顔を思い出しながら考えた。『一つ突き止めなきゃ』

曲がり角まで行き着くと、彼は通りの反対側へ移って、振り返って見た。すると、ソーニャは後ろから同じ道を、なんにも気がつかないで歩いて来る。曲がり角まで来ると、ちょうど彼女も同じ方へ曲がった。彼は反対側の歩道から、目を離さないようにしてつけて行った。五十歩ばかり行くと、彼はまたソーニャの歩いている側へ移って、そばまで追いつき、五歩ばかり間隔をおいてあとをつけた。

それは年のころ五十ばかり、丈は中背よりもやや高く、幅の広い怒り肩のために、いくらか猫背のように見える、体格のいい男であった。彼はハイカラな着ごこちよげな服装をし、いかにも堂々たる紳士らしい風采（ふうさい）をしていた。彼は洒落（しゃれ）たステッキで一歩ごとに歩道をこつこつ鳴らし、手には新しい手袋をはめていた。頬骨の高い大きな顔はかなり感じがよく、いきいきした色つやを帯びていて、ペテルブルグ人らしくなかった。髪はまだ非常に厚く、ほんのわずか白いものが見えるだけで、完全な亜麻色をしていた。シャベル形に延ばされた幅広の濃いひげは、頭の髪よりもっと薄色をしていた。空色の目は冷たく、じっと物思わしげな表情をし、唇はまっかだった。全体に彼は少しも老い込まない質（たち）の、年よりずっと若く見える男であった。

ソーニャが濠端（ほりばた）へ出たとき、歩道には彼ら二人きりであった。彼はしさいに観察しているうち、彼女が物思いに沈んで、ぼんやりしているのに気がついた。自分の家まで来ると、ソーニャは門内へはいった。彼はそのあとからついてはいったが、いささか驚いたような風だった。中庭へはいると、彼女は自分の住まいへ通ずる階段をさして、右の隅へ向かった。『おや！』と見知らぬ紳士は

つぶやき、彼女の後ろから階段を上り始めた。その時ソーニャは初めて彼に心づいた。彼女は三階へ上って廊下（ギャラリー）を曲がり、戸に白墨で『裁縫職カペルナウモフ』と書いてある九号室のベルを鳴らした。『おや！』と見知らぬ紳士は不思議な符合に驚いて、またくり返した。そして、並びの八号室のベルを鳴らした。二つの戸口は、六歩ばかりしか隔てていなかった。

「あなたはカペルナウモフのところにお住まいですかい！」と彼はソーニャを見て笑顔で言った。「昨日わたしはあの男に、チョッキを直してもらいましたよ。わたしはついお隣のマダム・レスリッヒ――ゲルトルーダ・カールロヴナのところに下宿してるんですよ。妙な事があればあるものですなあ！」

ソーニャはじっと注意深く彼を見つめた。

「お隣同士ですな」と彼は何かかくべつ愉快らしく話し続けた。「わたしはペテルブルグへ来てからやっと三日めなんです。では、またお目にかかりましょう」

ソーニャは答えなかった。ドアが開くと、彼女は自分の部屋へすべり込んだ。なぜか恥かしくなり、なんとなくおじ気づいたような風情だった……

ラズーミヒンは、ポルフィーリイのところへ案内する道みち、かくべつ興奮したような気分になっていた。

「いや、君、じつによかったよ」と彼は幾度もくりかえした。「僕もうれしい！　僕もうれしいよ！」

『いったい何がそんなにうれしいんだ？』とラスコーリニコフは腹の中で考えた。

「だって僕は、君もあの婆さんのところに質を置いてたなんて、まるで知らなかったよ。で……で……それはよほど前かね？　つまり、もうだいぶ前にあすこへ行ったのかね？」

『ちょっ、なんて頭の単純な馬鹿だ！』

「いつって？……」とラスコーリニコフは考えながら立ち止まった。「そう、殺された三日ばかり前に行ったかなあ。しかし、僕はいま代物を受け出しに行ってるんじゃないよ」と彼は妙にせき込みながら、かくべつ品物のことが気になるという風で、あわてて言い直した。「だって、僕は一ルーブリしか持ってないんだからね……あの昨日のいまいましい夢遊病のおかげでさ！」

彼は夢遊病ということばを、特に力を入れて発音した。

「うん、そうだ、そうだ、そうだ！」ラズーミヒンはせき込みながら、何やらしきりにあいづちを打った。「ああ、つまりそれでだな、あの時どうして君が……あんなに衝動（ショック）を感じたのか……実はね、君はあの時、熱に浮かされながら、しきりになんだか指輪のことだの、鎖のことばかりうわ言に言ってたんだよ！……うん、そうだ、そうだ……それではっきりした、今こそ何もかもはっきりした」

『へえ！　あいつらの頭にそんな考えがしみ込んでるんだな！　この男なんかおれのためには、十字架にだって掛けられるのもいとわないほどなんだが、それですらも、おれが指輪のことをうわ言に言ったわけが、はっきりしたといって喜んでやがる！　どうもすっかりこいつが根

を張ってたとみえる！……』
「だが、いま行って会えるだろうかな？」と彼は声に出して尋ねた。
「会えるとも、会えるとも」とラズーミヒンは急いで言った。「あれは、君、いい男だよ、今にわかるがね！　もっとも、少し無骨なところもあるがね。といって、世慣れた人間なんだけれど、僕は別の意味で無骨だというんだよ。なかなかりこうだ、全くりこうだ、目から鼻へ抜けるくらいなのだが、ただ考え方に何か特殊なところがある……なかなか人を信じなくて、懐疑派で、皮肉屋で……一杯くわすことが好きなんだ。いや一杯くわすというよりか、つまり、人を愚弄することが好きなんだね……まあ、古い物質主義的方法さ……けれど、本職の方はきけるよ、なかなかきけるよ……去年も、ほとんど手がかりのなくなった殺人事件を、みごとに捜し当てたぜ！　君とは非常に、非常に近づきになりたがってるよ！」
「なんだってまた非常にだい？」
「つまり、別に何も……実はね、近ごろ病気になってから、僕が話のついでによく君のことをしゃべったもんだから、先生も聞いてたわけさ……それにあの男はね、君が法科にいたけれど、事情があって卒業できないでいるのを知って、なんという気の毒なことだ、などと言ったこともあるよ。で、僕は結論したんだ……つまり、こんなことがみんな原因になってるんで、これ一つだけじゃない……昨日もザミョートフが……ねえ、ロージャ、僕は昨日君を家へ送りながら、酔ったまぎれに何かしゃべったろう……で、僕はね、君が大仰に考えやしないかと、心配しているんだよ。実は……」
「それはなんだい？　皆が僕を気ちがい扱いにしてるってことかい？　なに、本当かもしれないさ」
彼は緊張したような薄笑いを漏らした。
「そ、そうなんだ……なに、ばかな、そんなことじゃない！……まあつまり、僕の言ったことはみんな……（あの時言ったほかの事もひっくるめて）あれは皆でたらめだ、酒の上のことだ」
「何を君はそんなに言いわけしてるんだい！　僕そんなことにはもうあきあきした！」とラスコーリニコフは大げさにいらだたしげな顔をして叫んだ。
もっとも、多少は芝居でもあった。
「いいよ、いいよ、わかったよ、口にするも恥かしいくらいだ……」
「恥かしいなら言わないがいい！」
二人は口をつぐんだ。ラズーミヒンは夢中というより以上の喜び方だった。ラスコーリニコフは嫌悪の念をいだきながら、それを感じたのである。ラズーミヒンが今ポルフィーリイについて言ったことも、やはり彼に不安を与えた。
『あの判事もやはり泣き落としにかけなくちゃならないかな』彼は青くなり、胸をどきどきさせながら、こう考えた。『できるだけ自然にやるんだ。しかし、何も言わないのが一ばん自然だ。一生懸命に何一つ口説かないよ

うにすることだ！　しかし、一生懸命となると、また不自然になってしまう……まあ、向こうの出方しだいだ……みてみよう……今すぐだ……だが、今こうして行ってるのは、いいことか悪いことか？　飛んで火に入る夏の虫じゃないかな。胸がどきどきする、これがいけないんだ！……』

「この灰色のうちん中だ」とラズーミヒンは言った。

『何より一ばんかんじんなのは、昨日おれがあの鬼ばばあの家へ行って、血のことをきいたのを、ポルフィーリイが知っているかどうかってことだ。はいるとすぐまっさきに、この事を一目で見破らなくちゃならん。相手の顔つきで読まなけりゃならん。でないと……いや、たとい身の破滅になっても探ってみせる！』

「ときに、君」とふいに彼はラズーミヒンに向かい、ずるそうな微笑を浮かべながら言った。「僕はきょう君が朝から、どうも恐ろしく興奮しているのに気がついたが、当たったろう？」

「どう興奮してるんだい？　別に何も興奮なんかしてないよ」ラズーミヒンはぎくっとした。

「いや。君、まったく目についたよ。さっき椅子に掛けてる様子だって、いつもとまるで違ってたぜ。いやに端っこの方にちょこんと乗っかって、のべつけいれんでも起こしてるようだったぜ。わけもないのに飛び上がったり、へんに怒りっぽいかと思うと、ふいにどうしたのか、甘い甘い氷砂糖のようなご面相になったり、おまけに赤い顔までしたじゃないか。ことに食事に招かれた時なんか、恐ろしくまっかになったぜ」

「そんなことがあるもんか、嘘いえ！　いったいなんだってそんなことを言うんだ？」

「じゃ、君はなんだって小学生みたいにもぞもぞするんだよ！　ちょっ、こんちくしょう、また赤くなりやがった！」

「きさまはなんて恥しらずだろう、実に！」

「じゃ、なぜ君ははにかむんだい？　ロメオ！　まあ待ってろ、おれは今日どこかですっぱぬいてやろう、は、は、は！　一つおふくろを笑わせてやろう……それからまたほかの誰かも……」

「まあ聞いてくれ、聞いてくれ、聞いてくれったら、だってこりゃまじめなことなんだよ、これは実際……そんなことをしたら、いったいどうなると思う、くそっ！」とラズーミヒンは恐ろしさに胆（きも）を冷やしながら、すっかりまごついてしまった。「いったい何をあの人たちに言うつもりなんだい？　僕は、君……ちょっ、きさまはなんて恥しらずだ！」

「いよう、もういよいよ春のばらという風情だ！　またそれの君によく似合うこと、ちょっと君に見せてやりたいよ。六尺ゆたかのロメオときた！　だが君、今日はうんとみがき上げたもんだな、爪まで掃除してるじゃないか、え？　今までいつそんなことがあったい？　おや、こりゃポマードまでつけてるぞ！　頭をかがめて見せろよ！」

「こんちくしょう！」

ラスコーリニコフはもう抑えきれないほど笑いころげた。そして、笑いながら、ポルフィーリイ・ペトローヴィッチの住まいへはいった。つまりラスコーリニコフには、これが必要だったのである。彼らが笑いながらはいって来て、控室でもまだ高笑いしているのが、中から聞こえるようにしたかったのである。

「ここで一言でも言ったら承知せんぞ、でなけりゃきさまを……たたきつぶすぞ！」ラスコーリニコフの肩をつかみながら、ラズーミヒンは狂気のようにわめいた。

五

が、こちらはもう部屋の中へ足を踏みこんでいた。彼はどうかして吹き出すまいと、精いっぱいこらえているような顔つきではいって行った。そのあとから、すっかり動顛（どうてん）して、見るから凄（すさ）まじい面相のラズーミヒンが、しゃくやくのようにまっかになり、さも恥かしそうにのっそのっそと、へまなかっこうをしてはいって来た。その顔つきと全体の様子は、この時全く滑稽（こっけい）そのものだったので、ラスコーリニコフの笑いをいかにも自然に感じさせた。ラスコーリニコフはまだ紹介もされないのに、部屋のまんなかに突っ立ってけげんそうに二人を見ている主（あるじ）に会釈した後、手を差し伸べて握手したが、その間も絶えず自分の浮き浮きした気分を抑えて、せめて二口でも三口でも自己紹介のことばを述べようと、見るから一生懸命になっている様子だった。けれど、やっとのことでまじめな態度に返り、何か言い出そうとして――また何げなしといったようなぐあいに、ラズーミヒンの方を見やると、もう今度こそどうにもがまんし切れなくなった。抑えに抑えていた笑いは、今まで抑えていた度が強かっただけ、一そう激しく破裂した。また『この心底からの』笑いを聞いて、ラズーミヒンの見せたもの凄まじい形相は、この場の光景全体に、この上なく真実味に富んだ陽気な気分と、それに何より大切な自然らしさとを添えたのである。ラズーミヒンは、わざとあつらえ

たように、なおもこの仕事を手伝った。
「ちぇっ、こんちくしょう！」と彼は片手をひと振りして咆吼したが、そのはずみに、もう飲んでしまった茶のコップののっている小さな円テーブルをなぐりつけた。
何もかも一度にけし飛んで、がらがらと凄まじい音を立てた。
「諸君、いったいなんだって椅子を壊すんです、国庫の損害じゃありませんか！」（ゴーゴリ『検察官』の中の有名なせりふ）とポルフィーリイ・ペトローヴィッチは愉快そうに叫んだ。
その場の光景は、まずこういったぐあいであった――ラスコーリニコフは、自分の手を主人の手の中におき忘れて、腹に足りるほど笑い抜いたが、しかしほどというものを心得ているので、少しも早くなるべく自然に切り上げる機会を待っていた。テーブルを倒したり、コップを壊したりしたので、すっかりまごついてしまったラズーミヒンは、陰鬱な表情でコップのかけらを見やったが、いきなりぺっと唾を吐いて、くるりと窓の方へ体を向け、一座に背中を見せて立ったまま、恐ろしくむずかしい顔をして窓の外をながめていた。が、その実何ひとつ目にはいらなかったので。ポルフィーリイも笑った。そして、笑いたい気持もさることながら、しかし見うけたところ、わけを説明してもらいたいらしかった。隅の方の椅子にザミョートフがすわっていたが、客のはいって来るのを見ると、腰を持ち上げて立ったまま、微笑に口をゆるめて待っていた。とはいえ、何やら合点のいきかねる、というようすさんくさそうな様子で、この光景をながめていた。ことにラスコーリニコフを見る目には、一種狼狽の色さえ感じられた。思いがけないザミョートフの同席は、ラスコーリニコフに不愉快なショックを与えた。
『こいつはまた頭に入れとかなくちゃならんぞ！』と彼は思った。
「どうも失礼しました」大げさにもじもじしながら彼は口を切った。「ラスコーリニコフです……」
「どういたしまして、お近づきになれて実に愉快です。それに、あなた方もたいへん愉快そうにはいって来られましたね……だが、いったいどうしたんだ、あの男は挨拶するのもいやなのかね？」とポルフィーリイはラズーミヒンをあごでしゃくって見せた。
「いや、全くのところ、どうしてああ気ちがいみたいに怒るんだか、わけがわからないんですよ。僕はただ途中で、あの男がロメオに似てると言って、そして……それを証明しただけなんですよ。ただそれだけで、ほかには何もなかったように思うんですが」
「この恥しらず！」とラズーミヒンはふり向きもしないで叫んだ。
「ふん、たった一言でそんなに腹を立てるところを見ると、何か非常に真剣な原因が伏在してるわけですね」とポルフィーリイはからからと笑った。
「なんだ、きさまは！　どこまでも予審判事根性だな！……ええ、きさまたちはどいつもこいつも勝手にしやがれ！」とラズーミヒンは断ち切るように言った。

と、急に自分でからからと笑いながら、何事もなかったように愉快そうな顔をして、ポルフィーリイの傍へ寄った。
「もうこれで打ち止めだ！　君たちはみんな馬鹿さ。それよりも用件にかかろう。これは僕の友人のロジオン・ロマーヌイチ・ラスコーリニコフだ。第一には、いろいろ君の話を聞いて、近づきになりたいというし、第二には、君にちょっとした用があって来たんだ。おや！　ザミョートフ！　君はどうしてここにいるんだね？　いったい君らは知りあいなのかい？　もう前っから懇意なのかい？」
『こりゃまたなんということだ！』とラスコーリニコフは胸を騒がせながら考えた。
ザミョートフもちょっとまごついたらしかったが、さほどではなかった。
「きのう君んとこで近づきになったのさあ」と彼はくだけた調子で言った。
「じゃうまく紹介料をもうけたわけだな。実はね、ポルフィーリイ、先週この男が、どうかして君に紹介してもらいたいって、僕にやかましくせがんだんだよ。ところが、君らは僕を出しぬいて慣れ合っちまってさ……ときに、煙草はどこにあるかい？」
ポルフィーリイ・ペトローヴィッチは、ガウンの下にさっぱりしたシャツを着込み、はきくずした上靴という、くつろいだ服装（なり）をしていた。年かっこうは三十五、六、丈は中背よりやや低く、ふとって腹のいくらか出張った男で、顔は口ひげも頬ひげも立てずきれいに剃（そ）り上げて、特にうしろ頭の丸く突き出した大きな丸っこい頭は、短かく刈り込まれていた。少し鼻の低めな丸いぶくぶくした顔は、病的にどす黄色い色をしていたが、かなり生き生きとして、人を食ったような表情さえ帯びていた。とはいえ、この顔は善良な感じを与えたかもしれなかったのだが、ただ誰かに目くばせでもするように、始終ぱちぱちしている白いまつ毛のかぶさった目、妙に淡い水のような光をたたえた目の表情が、なんとなくその善良な印象を邪魔するのであった。この目つきは、女らしいところさえある体全体と妙に不調和で、一目見た時に期待しうるものよりははるかにまじめなあるものを、その姿に添えているのであった。
ポルフィーリイは、客が自分に『ちょっとした用』を持っていると聞くが早いか、すぐさま彼を長椅子に招じて、自身も一方の端に腰を掛け、即刻用件の説明を待ち受けながら、一生懸命にまじめな注意を払って客の顔を凝視した。こうした注意は初めのあいだ、特に初対面の時など、相手の心持を窮屈にして、ばつの悪い感じを与えるもので、とりわけ自分の用件がさほど大仰な注意を払われるほどのものでない、と思っているような場合にはなおさらなのである。けれどラスコーリニコフは、簡単な要領のよいことばで、自分でも満足するくらい明瞭（めいりょう）的確に、自分の用件を説明した。で、彼はその間にポルフィーリイの人物を、かなりよく観察するだけの余裕さえあった。ポルフィーリイもずっとその間、一度も彼か

ら目を放さなかった。二人に相対して同じテーブルに向かっていたラズーミヒンは、絶えず二人にかわるがわる目を移しながら、性急なほど熱心にラスコーリニコフの説明を注意していたが、それはいくらか度を過ごすくらいだった。

『ばか！』とラスコーリニコフは腹の中でののしった。

「それは警察へ届けをお出しにならなきゃいけませんな」ときわめて事務的な調子で、ポルフィーリイは答えた。

「自分はこれこれの事件、つまりあの殺人事件を承知したので、事件の審理を担当した予審判事に対して、これこれの品が自分のものであるから、それを受け出したいと申し出た……とかなんとか……もっとも警察で適当に書いてくれますよ」

「つまり、そこなんですよ。僕は今」ラスコーリニコフはできるだけ当惑らしい様子をした。「実は金の余裕があまりないので……それくらいのはした金もくめんできない始末なんです……実のところ、今はただあの品は自分のものであるが、金のできた時に……ということだけを届けたいんですが……」

「それはどちらでも同じことです」とポルフィーリイは、財政に関する彼の説明を冷やかに聞き流して、そう答えた。「もっとも、なんなら、直接わたしに書面をお出しくださってもよろしい、やはり同じ意味のね。つまり、かくかくの事件を聞いて、これこれの品が自分のものだということを届け出るとともに、かくかくのお願いがあ……」

「それは普通の用紙でいいんでしょうね？」またしてもふところの方を気にしながら、ラスコーリニコフは急いでさえぎった。

「ええ、ほんとうのありふれた紙でけっこうです！」

こう言ってふいにポルフィーリイは、いかにも人を小馬鹿にしたような様子で目を細め、ぽちりと瞬（またたき）でもするように彼を見やった。もっとも、それはほんの一瞬間のことであったから、ただラスコーリニコフの気のせいだったかもしれない。が、少なくともいくらかそんな風のところがあった。ラスコーリニコフは、なんのためかはしらないが、確かにポルフィーリイは自分に瞬きしたに相違ないと、神明に誓っても主張することができた。

『知ってやがる！』こういう考えが電光のように、彼の頭にひらめいた。

「どうかごめんください、こんなくだらないことでお手数をかけまして」と彼はいくらかへどもどしながら、ことばを続けた。「僕の品物というのは、金にすればわずか五ルーブリくらいのものですが、僕にとっては、それをくれた人の記念（かたみ）として、かくべつ貴重なんです。で、白状しますと、その話を聞いたとき、全くぎょっとしてしまいました……」

「道理で、僕が昨日ゾシーモフに、ポルフィーリイが入質人を調べてるって、うっかり口をすべらしたとき君があんなにぎくっとしたんだな！」いかにも思わくありげに、ラズーミヒンが口を入れた。

これはもう我慢しきれなかった。ラスコーリニコフは

こらえかねて、憤怒に燃える黒い目を毒々しげに、ぎらりと彼の方へ光らせた。と、すぐにはっとわれに返った。
「君はまた僕をなぶるつもりだな！」たくみにいらだたしさを装いながら、彼はラズーミヒンの方へふり向いて、「そりゃ僕だって異存ないさ――全く君の目から見れば、あんなくだらないもののために、気をもみ過ぎたかもしれないよ。しかし、このために僕をエゴイストだの、欲ばりだのというわけにゃいかないぜ。僕の身になってみれば、このつまらない二品だって、けっしてくだらなかないんだからね。もうさっき君に話した通り、あの三文の値うちもない銀時計は、父の記念に残ってる唯一の品なんだからね。まあ、僕のことはいくらでも笑うがいいさ。しかし、こんど母がやって来たもんですから」と彼はふいに、ポルフィーリイの方へふり向いた。「もし母の耳へはいったら」わざと声を震わせるようにと努めながら、彼はまたもや急いでラズーミヒンの方へ向き直った。「あの時計がなくなったってことがわかったら、どんなに落胆するかしれやしない！　何ぶん女だからね！」
「いや、けっしてそうじゃないよ！　僕はけっしてそんな意味で言ったんじゃないよ！　まるっきりあべこべだ！」とラズーミヒンはさも情なさそうに叫んだ。
『あれでよかったかな？　自然らしく聞こえたかな？　誇張し過ぎやしなかったかな？』とラスコーリニコフは内心ひそかにはらはらした。『なぜ「何ぶん女だから」なんて言ったんだろう？』
「お母さんが見えたんですって？」なんのためかポルフィーリイは聞き直した。
「そうです」
「それはいつのことでした？」
「昨日の夕方です」
ポルフィーリイは何やら思いめぐらすように、しばらく黙っていた。
「あなたの品物はどんなことがあっても、なくなるはずはなかったんですよ」と彼は落ち着き払って冷やかに続けた。「何しろわたしはだいぶ前から、あなたのおいでを待ってたんですからね」
彼はこう言いながら、一向なんでもないようなようすで、容赦なく煙草の灰で絨氈をよごしているラズーミヒンの方へ、小まめに灰皿を差し出した。ラスコーリニコフはぎくりとした。が、ポルフィーリイは相変わらず、ラズーミヒンの煙草に気を取られて、彼の方は見もしないらしい様子だった。
「なんだってえ？　待ってた！　いったい君は知ってたのかい、この男があすこへ質を置いてたのを？」とラズーミヒンは叫んだ。
ポルフィーリイはまともにラスコーリニコフの方へふり向いた。
「あなたの二品は、指輪も時計も、あの女のところで一つの紙包みになっていました。そして紙の上には、あなたの名前が鉛筆ではっきり書いてありました。それからあなたから、その品を預った日付も同じように……」

「あなたは実によくお気がつきますね！……」ラスコーリニコフは特に相手の目をまともに見ようと努めながら、いかにもまずい薄笑いを漏らしたが、やはりがまんし切れなくなり、ふいにこう言い足した。「僕がこんなことを言ったのは、つまり入質人はきっとたくさんだったでしょうに……それを全部記憶していらっしゃるのは、容易じゃなかろうと思ったからなんです……ところが、あなたはそれどころか、一人一人はっきり覚えてらっしゃるし、それに……それに……」

『ばかげてる！　力がない！　なんだってこんなことをくっつけたんだろう！』

「なに、入質人はもう今じゃたいていみんなわかってるんです。だから、あなた一人くらいなもんですよ、今までおいでにならなかったのは」やっと見えるか見えないかの嘲笑の影を浮かべて、ポルフィーリイは答えた。

「僕すこし不快だったものですから」

「それも承知していました。それどころか、何かでたいへん頭を悩ましておられたことも聞きました。今でもなんだか顔色がお悪いようですね？」

「顔色なんかちっとも悪かありません……それどころか、すっかり健康ですよ！」とラスコーリニコフは急に調子を変えて、ぞんざいな毒々しい口ぶりで、断ち切るように言った。

　憤怒の念は彼の身内で煮えたぎった。彼はそれを抑えることができなかった。

『腹を立てると、うっかり口をすべらすぞ！』こういう考えが再び頭にひらめいた。『だが、なんだってやつらは俺を苦しめるんだろう！……』

「少し不快だった？」とラズーミヒンはことば尻を取った。「何をごまかしてやがるんだ！　つい昨日までほとんど人事不省でうわ言を言ってたくせに……ねえ、君、ポルフィーリイ、これが本当になるかい――やっと足が立つか立たぬ体でいながら、昨日僕らが、僕とゾシーモフがちょっと脇見をしたかと思うと――その間に服を着て、そっと抜け出してさ、かれこれ夜中ごろまで、どこかしらほっつき歩いたんだぜ。しかも、君、まるっきり夢中なんだからね。こんなことが君想像できるかい！実に珍しい話じゃないか」

「へえ、まるっきり夢中で？　それはどうも！」なんとなく女じみた身ぶりで、ポルフィーリイはかぶりを振った。

「ええっ、ばかなことを！　あなた真に受けちゃいけませんよ！　もっとも、それでなくたって、本当にはしていらっしゃらないが！」ラスコーリニコフはそれこそ全く面当てに、うっかり口をすべらしてしまった。

　けれどポルフィーリイはこの奇怪なことばを、よく聞き分けなかったようである。

「だって夢中でなけりゃ、どうして出かけたんだい？」とラズーミヒンは急に熱くなった。「なぜ出て行ったんだ？　なんのために？……なぜわざわざ秘密にしてさ？　え、いったいあの時の君に健全な理性があったのか い？　もう今ではいっさい危険が去ってしまったから、

僕はあえて忌憚なく君に言うんだよ！」
「昨日はやつらがうるさくて、うるさくてたまらなかったんだよ」ラスコーリニコフはずうずうしいいどむような微笑を含んで、急にポルフィーリイの方へふり向いた。
「で、僕は貸間を捜そうと思って、人のそばから逃げ出したんです。もう二度と見つけ出されないように、金をしこたま引っつかんで出たわけです。ほら、あのザミョートフ氏がその金を見ていますよ。ねえ、ザミョートフ君、きのう僕は正気だったか、それとも夢中だったか、一つ争論を解決してくれませんか」
　彼はこの瞬間、ザミョートフを絞め殺しもしかねないような気持がした。彼の目つきと沈黙が、いかにも気に食わなかったのである。
「僕に言わせると、君の話しっぷりはきわめて理性的で、むしろずるいくらいでしたよ。ただあまりいらいらしすぎるところはありましたがね」とザミョートフはそっけなく言い切った。
「きょう署長のニコジーム・フォミッチから聞いたんですが」とポルフィーリイは口を入れた。「昨日もうだいぶ遅くなって、馬に踏み殺されたある官吏の家で、あの男があなたに出合ったとかって……」
「さあ、現にその官吏のことだってさ！」とラズーミヒンはことば尻を抑えた。「ねえ、君はその官吏の家でしたことだって、いったい気ちがいざたじゃなかったのかい？　なけなしの金をはたき上げて、葬式の費用に後家さんにくれてしまったじゃないか！　そりゃ、助けてやろうと思ったら――十五ルーブリか二十ルーブリもやればいいじゃないか。まあなんにしても、せめて三ルーブリくらいは自分に残しておくべきはずなのに、二十五ルーブリそっくりほうり出してしまうなんて！」
「だが、もしかしたら、僕はどこかで埋めた宝でも見つけたのを、君が知らないのかもわからんぜ！　現に昨日もあの通り、大尽ぶりを見せたんだからな……ほら、あのザミョートフ氏も、僕が宝を見つけたのをご存じだ！
　あなた、どうぞごめんください」彼は唇をふるわせながら、ポルフィーリイの方へふり向いた。「こんなくだらない詮索で、半時間もあなたのおじゃまをして。さぞあきあきなすったでしょうね、え？」
「とんでもない、それどころですか、それどころですか！
　あなたがどれくらいわたしに興味を感じさせなさるか、恐らく想像もおつきにならんでしょう。見ていても、聞いていても、実に面白いんですよ……で、正直なところ、とうとうあなたがおいでくだすったのが、私は非常にうれしいんです……」
「だが、せめて茶でもくれないか！　喉がからからになっちゃった！」とラズーミヒンはどなった。
「いいことに気がついた！　諸君もつき合ってくださるだろう。だが、どうだね……もっと実のあるものをやったら、茶の前に？」
「早くとっとと行くがいい！」
　ポルフィーリイは茶を言いつけに出て行った。
　さまざまな想念が旋風のように、ラスコーリニコフの

頭の中を渦巻いた。彼はむやみにいらいらしていた。『問題は何よりも、やつらが隠しもしなければ、遠慮しようともしないことだ！　もしまるっきりおれのことを知らなければ、どういうわけで署長とおれの話なんかするんだ？　これで見ると、やつらはもう犬の群れみたいに、おれのあとをつけ回しているのを、隠そうとも思ってないんだ！　もうあけすけに、面と向かって唾をひっかけてやがる！』彼は憤怒に身をふるわせた。『ぶつならさっさとぶつがいい、猫が鼠をおもちゃにするようなまねはよしてくれ。それはあまり無礼じゃないか、え、ポルフィーリイ・ペトローヴィッチ、おれだって黙ってそんなことをさしちゃおかないかもしれないぞ！……いきなり立ち上がって、やつらのしゃっつらに真相を残らず吐きかけてやるぞ。その時こそ、どれくらいおれがきさまたちを侮蔑してるかわかるだろう！……』彼はやっとのことで息をついた。『だが、もしこれが唯おれの気のせいだったら？　ほんの蜃気楼にすぎないで、おれがすべてを誤解しているのだったら？　無経験なためじりじりして、この卑劣な役を持ちこたえることができないのだったら？　もしかすると、あれは別に思わくあってのことじゃないかもしれないぞ！　やつらが言うのは、みんな平凡なことばばかりだが、しかしその中には何かある……あんなことはいつでも言えることばだが、しかしどうも何かある。なぜあいつは「あの女のところ」とぶっつけに言ったんだろう？　なぜまたザミョートフは、おれがずるい口のきき方をしたなんて言い足したんだろう？　なぜやつらはあんな調子で話をするんだろう？　そうだ……調子だ……ラズーミヒンも同じようにここにいながら、なぜ何も感じないんだろう？　いや、この罪のないでくの坊は、いつだって何も感じやしないんだ！　また熱が出てきた！……さっきポルフィーリイはおれに瞬きしたんだろうか、それとも違うかな？　きっとなんでもないんだろう。なんのために瞬きする必要がある？　やつらはおれの神経を刺激したいのか、それともおれをいらいらさせるつもりか？　ああ、何もかも蜃気楼なのか、それともやつらは知ってるのか？　ザミョートフまでが生意気な……いや、本当にザミョートフは生意気なのかな？　ザミョートフは一晩で考えを変えたんだ。おれもやつが考えを変えるだろうと予感していた！　やつはここを我家のように振舞ってるが、そのくせはじめて来たばかりじゃないか。ポルフィーリイも客とは思っていないとみえ、やつの方へ背を向けてすわっている。やつらは慣れ合いやがったんだ！　てっきり、おれのことで慣れ合いやがったんだ！　きっとおれたちの来るまで、おれの話をしてやがったんだ！……ところで、あの住まいを見に行ったことを、知ってやがるかな？　ああ、少しも早くそれを突き止めなくちゃ。おれがきのう貸間を捜すために逃げ出したと言った時、やつは聞き流して問題にしなかったが……とにかく貸間のことを一口はさんどいたのはうまかった。あとで役に立つ。夢中で、というわけだからな！……は、は、は！　やつは昨夜のことを残らず知ってる！　ところが、母の来たこ

とは知らないんだ！　あの鬼婆(おにばば)め、鉛筆で日付を書いてるって！……どっこい、そんな手に乗るもんか！……だって、それはまだ事実じゃなくて、蜃気楼にすぎないじゃないか！　だめだよ、一つ事実を指摘して見せてもらおう！　貸間を見に行った件だって事実じゃない、熱のせいだからな。やつらに言う口実は、ちゃんと心得てるぞ……だが、貸間の一件は知ってるだろうか？　それを突き止めるまでは帰らないぞ！　なんのためにここまで来たんだ？　ところで、今おれはこんなにじりじりしているが、この方がどうやら事実らしいて！　ちょっ、おれはなんてかんしゃくもちだ！　が、これもかえっていいかもしれない。病的の役割だからな……やつはおれに探りを入れてるから、おれをまごつかせにかかるだろう。ああ、おれはなんのためにこんなとこへ来たんだ？』

こうしたいっさいの想念が、稲妻のごとく彼の頭をひらめき過ぎた。

ポルフィーリイ・ペトローヴィッチはすぐ引っ返した。彼はなんだか急にうきうきしてきた。

「僕はね、昨日の君の宴会以来どうも頭が……それに体じゅうがなんだかぜんまいがゆるんだようなぐあいでね」と彼は全然べつな調子で、笑いながらラズーミヒンに口を切った。

「で、どうだった、面白かったかい？　何しろ僕はちょうど興の乗ったところで抜けちゃったもんだから！　で、誰が勝ったい？」

「もちろん、誰も勝ちゃしないさ。永遠無窮の問題とと っくんで、天空を駆けたばかりだ」

「おい、ロージャ、昨日われわれはどんな問題ととっくんだと思う？　犯罪の有無という問題なんだぜ。しまいには、とてつもない迷論になっちゃったのさ！」

「何も不思議はないじゃないか？　ありふれた社会問題だよ」とそわそわした調子でラスコーリニコフは答えた。

「問題はそんな形をとっていたんじゃないよ」ポルフィーリイは注意した。

「形は多少ちがう、それは正にそうだ」ラズーミヒンはいつものくせでせき込んで熱しながら、すぐにこう同意した。「いいかね、ロージャ、一つ聞いて、意見を聞かしてくれ。ぜひ所望なんだ。きのう僕は彼らを相手に苦心惨憺(さんたん)してね、君の来るのを待ってたんだよ。僕は皆に君の来ることを話したもんだから……まず最初は社会主義の見地から始まったのさ。その見地たるや周知の如く、犯罪は社会制度の不備に対する抗議だというのさ――ただそれっきりで、それ以外にはなんにもないんだ。それ以外にはいかなる原因も受けつけないんだ――まるで何一つ！……」

「またでたらめを言ってる！」とポルフィーリイは叫んだ。

彼は目に見えて活気づいてきた。そして、ひっきりなしに笑いながら、ラズーミヒンの顔を見ては、一そう彼をたきつけるのであった。

「いーっさい受けつけないんだ！」とラズーミヒンはやっきとなってさえぎった。「でたらめじゃないよ！……

なんならあの連中の本でも見せてやる。あの連中に言わせると、なんでも『環境にむしばまれた』がためなんだ――それ以外には何もありゃしない！　十八番の紋切型さね！　それをまっすぐに推して行くと、もし社会がノーマルに組織されたら、すべての犯罪も一度に消滅してしまう。なぜなら、抗議の理由がなくなって、すべての人がたちまち義人になってしまうから、とこういう結論になるのさ。自然性なんか勘定に入れられやしない。自然性は迫害されてるんだ。無視されてるんだ。彼らに言わせると、人類は歴史的の生きた過程を踏んで、最後まで発展しつくすと、ついにおのずからノーマルな社会となるのじゃなく、その反対に、何かしら数学的頭脳から割り出された社会的システムがただちに全人類を組織してさ、一瞬の間に、あらゆる生きた過程に先だって、生きた歴史的過程などいっさいなしに、それを正しい罪のない社会にするんだそうだ！　だからこそ、彼らは本能的に歴史というものが嫌いなのだ。『歴史なんてみんな醜悪で愚劣なものだ』そう言って、すべてを愚劣一点張りで説明している！　だからこそ、人生の生きた過程を好まないで、生きた魂などはいらないと言うのだ！　生きた魂は生命を要求する、生きた魂は機械学に従わない、生きた魂はうさんくさい、生きた魂は退嬰的だ！　ところが、社会主義的社会の人間は、少し死人臭いにおいはするけれど、ゴムで作ることができる――しかし、その代わり生きていない、その代わり意志がない、その代わり奴隷みたいなもので、反逆もしない！　で、その結果は、ただ共同宿舎の煉瓦を積んだり、廊下や部屋の間取を按排したり、それだけのものに簡略されてしまった！

しかし、共同宿舎はできたにしても、共同宿舎のための自然性がまだできていない。生活がほしい、生きた過程をまだ完成していない、墓場へ行くのはまだ早い！　とこう叫ぶのだ。ただ論理だけで、自然性を飛び越すことはできない！　論理はただ三つの場合を予想するのみだが、実際にはそれが無数にあるんだからな！　その無数の場合を切り離して、すべてを快適という一つの問題に片付けてしまうんだから、問題を解決するのにこれより楽な方法はありゃしないさ！　人を誘惑するに足りるほど明瞭だ、考える世話がないからね！　かんじんなのはここさ――考える世話がない！　人生のあらゆる秘密も、三十二ページの印刷物で尽きてしまうんだからなあ！」

「さあ、暴れ出したぞ、滔々として尽くることなしだ！　こいつ手でも抑えてやらなくちゃいかんわい」とポルフィーリイは笑った。「ねえ、どうでしょう」と彼はラスコーリニコフの方へふり向いた。

「昨夜もやはりこの通りだったんですよ、六人が声をそろえて……しかもその前にポンス酒を飲んでるんですからね――たいてい想像がつきましょう？――ところで、君、そりゃ違うよ、でたらめだ。『環境』というものは、犯罪に重大な意義を持ってるよ。これは僕が証明してみせる」

「重大な意義を持ってるくらいのことは、僕だって知っ

てるよ。じゃ一つ、僕の質問に答えてみたまえ。四十男が十になる女の子を凌辱したとしたら――それも環境がさせたわざかい？」
「なに、そりゃ厳密な意味でいえば、やはり環境だとも言えるさ」と驚くほどものしい口調で、ポルフィーリイはこう言った。「一少女に対するその種の犯罪は、もちろん、もちろん『環境』で説明ができるよ」
　ラズーミヒンはもう危うく夢中になりそうだった。
「よし、お望みなら、今すぐにでも論証してやるぞ」と彼はわめき立てた。「君のまつ毛の白いのはほかでもない、ただイヴァン大帝（クレムリン内にある大鐘の異名）の高さが三十五間あるがためにすぎないってわけを、明快に、的確に、進歩的に、いやそれどころか、リベラリズムの陰影さえつけて論証してみせよう？　いいか、やるぞ！　なんなら、賭けだ」
「よしきた！　ね、どんな風に論証するか、一つ聞こうじゃありませんか！」
「ええ、くそっ、どこまでも白っぱくれやがる、こんちくしょう！」とラズーミヒンは叫んで、おどり上がりざま片手を一振りした。「ちょっ、きさまなんかと議論する価値はないや！　あれはね、君、みんなわざとやってるんだよ、ロージャ、君はまだよくこの男を知らないんだ！　昨日もこいつはみんなを愚弄したいばかりに、やつらの肩を持ったんだぜ。ああ、昨日この男の言ったこととときたら！　しかも、やつらはそれを喜んでるんだからな！……この男はこんな調子で二週間ぐらいは持ちこたえられるさ。去年も、なんのためだか知らないが、坊主になるなんて言い出して、僕らを信じ込ましてさ、二月も強情を張り通したもんだ！　ついこの間も、おれは結婚する、式の用意もすっかりできたといって、僕らもほんとうにお祝いまで言い出したんだよ。ところが花嫁もいなけりゃ、なんの気もありゃしない、何もかも蜃気楼さ！」
「ほら、でたらめだ！　服はその前にこしらえたんだよ。新調の服ができたについて、君らをかついでやろうという考えが起こったのさ」
「実際あなたは、そんなに白っぱくれる名人なんですか？」とラスコーリニコフは無造作に尋ねた。
「あなたはそうじゃないと思ったんですか？　待ってらっしゃい、今にあなたも一杯くわしてあげますから――は、は、は！　いや、なんですよ、あなたにすっかり本当の事を言ってしまいましょう。犯罪とか、環境とか、女の子とか、すべてそういう問題に関連して、今ふと思い出したんですが――いや、今までもずっと興味を持っていたんですが、あなたの書かれたちょっとした論文なんです。犯罪に就いて……とかなんとかいいましたね、題はよく記憶しませんが、二月ばかり前に『定期新聞』で拝見の栄を得ました」
「僕の論文？　『定期新聞』で？」とラスコーリニコフは驚いて問い返した。「僕はじっさい半年ばかり前、大学をよす時に、ある本のことで論文を一つ書きましたが、そのとき僕はそれを『週刊新聞』に持って行った

んで、『定期新聞』じゃありません」
「ところが、『定期新聞』にのったんですよ」
「ああ、全く『週刊新聞』が廃刊したので、そのとき掲載されなかったんです……」
「それはそうに違いありませんが、『週刊新聞』は廃刊すると同時に、『定期新聞』と合併したので、あなたの論文も二月前に『定期新聞』にのったわけです。いったいご存じなかったんですか？」
　ラスコーリニコフは事実少しも知らなかった。
「冗談じゃない、あなたは原稿料を請求することもできるくらいなのに！　だが、あなたもなんというご気性でしょう！　直接自分に関係したことまでご存じないほど、世間ばなれのした生活をしておられるんですね。だって、それは事実ですよ」
「えらいぞ、ロージャ！　僕もやっぱり知らなかったよ！」とラズーミヒンは叫んだ。「さっそくきょう図書館へ行って、その号を借りて見よう！　二月前だね？　日はいつだろう？　いや、まあ、どうでもいい、捜し出してやるから！　こいつぁ面白い！　それでいて、なんにも言わないんだからなあ！」
「でも、あれが僕のだということが、どうしておわかりになりました？　ぼく頭字だけしか署名してなかったのに」
「ふとしたことでね、しかもつい二、三日まえですよ。編集者から聞いたんです。知合いなもんですから……非常な興味を感じましたよ」
「たしか僕は、犯罪遂行の全過程における、犯罪者の心理状態を検討したようにおぼえていますが」
「そうです。そして犯罪遂行の行為は、常に疾病を伴なうものだと、主張していらっしゃる。実に、実に独創的な意見ですな。しかし……わたしが興味を抱かされたのは、あなたの論文のこの部分じゃなくて、結末の方にちょっと漏らしてあった一つの感想なんです。けれど、残念なことに、そこはただ暗示的に書かれてるだけなので、明瞭でないんです……一口に言えば、お覚えですかどうですか、つまり世の中には、あらゆる不法や犯罪を行ない得る人……いや、行ない得るどころか、それに対する絶対の権利を持ったある種の人が存在していて、彼らのためには法律などないに等しい――とこういう事実に対する暗示なのです」
　ラスコーリニコフは、この故意に誇張した自分の思想の曲解に、にやりと薄笑いを漏らした。
「ね、なんだって？　犯罪に対する権利だって？　じゃ『環境にむしばまれた』からじゃないんだね」と何かしらおびえたような表情さえ浮かべながら、ラズーミヒンは尋ねた。
「いや、いや、そうばかりでもないよ」とポルフィーリイは答えた。「問題はだね、この人の論文によると、あらゆる人間が『凡人』と『非凡人』にわかれるという点なのさ。凡人は常に服従をこれ事として、法律を踏み越す権利なんか持っていない。だって、その、彼らは凡人なんだからね。ところが非凡人は、特にその非凡人なる

がために、あらゆる犯罪を行ない、いかなる法律をも踏み越す権利を持っている、たしかそうでしたね、わたしが誤解していないとすれば？」

「いったいどうしてそんなことになるんだ？　そんなことはあるわけがない！」とラズーミヒンは合点がいかぬという風で、こうつぶやいた。

ラスコーリニコフはまたにやりと笑った。彼はどこへ自分を釣り出そうとしているのか、相手の真意は那辺（なへん）にあるのか、立ちどころに見抜いてしまった。彼は自分の論文を思い出し、いよいよ挑戦に応じようと決心した。

「僕が書いたのは、全然そうでもないんですよ」と彼は率直なつつましい調子で言い出した。「もっとも、正直なところ、あなたはほとんど正確にあの内容を叙述してくだすった。いや、なんなら、ぜんぜん正確にといってもいいくらいです。（……彼はぜんぜん正確だと承認するのが、真実いい気持だったのである）。ただ唯一の相違というのは、ほかでもありません、僕はけっしてあなたがおっしゃったように、非凡な人は常に是が非でも、あらゆる不法を行なわなければならぬ、必ずそうすべきものだと主張したのじゃありません。そんな論文は発表を許されなかったろう、とさえ思われるくらいです。僕はただただ次のようなことを暗示しただけなんです。すなわち『非凡人』は、ある種の障害を踏み越えることを自己の良心に許す権利を持っている……といって、つまり公けの権利というわけじゃありませんがね。ただし、それは自分の思想――時には全人類のために救世的意義を有する思想の実行が、それを要求する場合にのみ限るのです。あなたは僕の論文が明瞭を欠くようにおっしゃいましたね。それなら、できるだけ闡明（せんめい）の労をいとわないです。あなたもどうやらそれがご希望なんでしょう？

こう想像しても間違いじゃないですね。なら、やりましょう。僕の考えによると、もしケプレルやニュートンの発見が、ある事情のコンビネーションによって、一人なり、十人なり、百人なり、あるいはそれ以上の妨害者の生命を犠牲にしなければ、どうしても世に認めさせることができないとすれば、その場合にはニュートンは、自分の発見を全人類に普及するため、その十人なり百人なりの人間を除く権利があるはずです。いや、そうしなければならぬ義務があるくらいです……しかし、それかといって、ニュートンが誰彼なしに手当りしだいの人を殺したり、毎日市場で泥棒したりする、そんな権利を持っていたという結論は、けっして出て来やしません。それから、僕の記憶しているところでは、こんな風に論旨を発展さしたように思います。つまりあらゆる……まあたとえば、全人類的な立法者なり建設者なりは、太古の英雄を初めとして、引き続きリカルガス、ソロン、マホメット、ナポレオンなどといったような人たちは、皆一人残らず、新しい法律を布（し）いては、その行為によって、従来世人から神聖視されてきた父祖伝来の古い法令を破棄した、その一事だけでも立派な犯罪人です。したがってむろん彼らは、おのれを救い得るものただ血あるのみという場合になると（たといその血が時として、ぜんぜ

ん無辜なものであろうと、古い法令のために勇ましく流されたものであろうと）、流血の惨にすらちゅうちょしなかったのです。これら人間の恩恵者、建設者の大部分が、とりわけ恐ろしい流血者であったということは、刮目に価いするくらいじゃありませんか。一口に言えば、人は誰でも、単に偉人のみならずわずかでも凡俗の軌道を脱した人は、ちょっと何か目新しいことを言うだけの才能にすぎなくとも、本来の天性によって必ず犯罪人たらざるを得ないのです――もちろん、程度に多少の相違はありますがね。これが僕の結論なんです。でなくては、とても凡俗の軌道を脱することはむずかしい。が、それかといって、そのまま凡俗の軌道に甘んじていることは、やはり本来の天性によってできない相談です。いや、僕に言わせれば、むしろ甘んずべからざる義務があるくらいです。要するに、これまでの僕の議論には、ごらんの通り、かくべつ新しい点など少しもないのです。こんなことはもう何百ぺんも書かれたり、読まれたりしたことです。ところで、凡人、非凡人の分類については、それが少し気まぐれだってことに、僕も異存ありません。しかし僕もあえて、正確な数字に基づいて主張するわけじゃありませんからね。僕はただ根本思想を信じるだけです。その根本思想というのはこうなんです。人は自然の法則によって、概略二つの範疇にわかれている。つまり、自分と同様なものを生殖する以外になんの能力もない、いわば単なる素材にすぎない低級種属（凡人）と、いま一つ真の人間、すなわち自分のサークルの中で新しいことばを発する天稟なり、才能なりを持っている人々なのです。その細別は、もちろん無限にあるわけですが、この二つの範疇を区別する特質はかなり截然としています。第一の範疇すなわち材料は、概括的にいって保守的で、行儀がよく、服従をこれ事として、服従的であることを好む人々です。僕に言わせれば、彼らは服従的であるべき義務すら持っているのです。なぜなら、それが彼らの使命なのですからね。そこには彼らにとって断じて何ら屈辱的なものはありません。第二の範疇はすべてみな、法律を踏み越す破壊者か、あるいはそれに傾いている人たちです。それは才能に応じて多少の相違があります。この種の人間の犯罪はもちろん相対的であり、多種多様であるけれど、多くは極めてさまざまな声明によって、よりよきものの名において、現存せるものの破壊を要求しています。で、もしおのれの思想のために、死骸や血潮を踏み越えねばならぬような場合には、彼らは自己の内部において、良心の判断によって、血潮を踏み越える許可を自ら与えることができると思います――もっとも、それは思想の性質により、思想のスケールによって程度の差があります――ここを注意してください。ただこの意味においてのみ、僕はあの論文の中で、犯罪に対する彼らの権利を論じているわけなのですから（この議論が法律問題から始まっているのを、ご想起ねがいます）。しかし、大して心配することはありませんよ。群衆はほとんどいつの時代にも、彼らにこうした権利を認めないで、彼らを罰し、彼らを絞殺してしまいますから

（程度に多少の相違はありますがね）。そして、その行為によって極めて公明正大に、自分の保守的使命を果たしているのです。が、ただし次の時代になると、この同じ群衆が前に罰せられた犯罪人を台座に載せて、彼らに跪拝（きはい）するのです（多少程度の差こそありますが）。第一の範疇は現在の支配者であり、第二の範疇は未来の支配者であります。第一の範疇は世界を保持して、それを量的に拡大して行く。第二の範疇は世界を動かして、目的に導いて行く。だから両方とも同じように、完全な存在権を持っているのです。要するに、僕の考えとしては、誰でもみな同等の権利を持っているんです。そしてー——〔Vive la guerre e'ternelle〕（永久の戦い万歳です）——もちろん、新しきエルサレムの来現までですがね」

「じゃあなたはなんといっても、新しきエルサレムを信じていらっしゃるんですか？」

「信じています」ときっぱりした声でラスコーリニコフは答えた。こう言いながらも彼は今までずっと、あの長広舌の初めからしまいまで、絨氈（じゅうたん）の上のある一点を選んで、じっとそこばかりみつめていた。

「そ、そ、それで、神も信じていらっしゃる？　ものずきな質問で失礼ですが」

「信じています」目をポルフィーリイの顔へ上げながら、ラスコーリニコフはくり返した。

「ラザロの復活も信じますか？」

「しーんじます。なぜそんなことをお聞きになるんです？」

「文字通りに信じますか？」

「文字通りに」

「ははあ……いや、ちょっと物ずきにおたずねしたまでで。失礼しました。ところで、一つ伺いますが——またさっきの話に戻りますよ——非凡人はいつも必ず罰せられるとは限りますまい。中にはかえって……」

「生きながら凱歌（がいか）を奏する、とおっしゃるのですか？　そりゃそうですとも。中には、生存中に目的を達するものがあります。その時は……」

「自分で人を罰し始める、ですか？」

「必要があれば。いや、なに、大部分そうなるでしょう。全体に、あなたの観察はなかなか警抜ですよ」

「ありがとう。ところで、もう一つどうか。いったいどういうところで、その非凡人と凡人を区別するんです？　生まれる時に何か印（しるし）でもついているんですか？　わたしの言う意味は、そこにもう少し正確さがほしいと思うんです。いわば、いま少し外面的な特徴がなくてはね。これは実際的な常識家たるわたしとして、自然な不安だと思っておゆるしを願います。しかし、どうでしょう、そこにたとえば、何か特殊な制服でも決めるとか、何か身につけるとか、それとも烙印（らくいん）のようなものでも捺（お）すとか、そんなわけにはいかんものでしょうかね……さもないと、もしそこに混乱が起こって、一方の範疇の人間が、自分はほかの範疇に属してるなどと妄想を起こして、あなたのうまい表現を借りると『あらゆる障害を除き』始めたら、その時はそれこそ……」

「ああ、それは実によくあるやつです！　このあなたのご観察は、前のより更に警抜なくらいですよ……」
「どうもありがとう……」
「どういたしまして。しかし、こういう事を考慮に入れていただきたいのです。そうした誤解は、ただ第一の範疇つまり『凡人』（これははなはだまずい呼び方だったかもしれませんが）の側にのみ起こりうるものですからね。服従に対する生来の傾向にもかかわらず、牝牛にすら見受けられる自然のたわむれによって、彼らのうちかなり多くの者が好んで自分を先覚者、『破壊者』であると妄想して、『新しいことば』を発しようとしたがる。しかも、それが大まじめなんですからね。と同時に、彼らは実際の新人を認めない場合が非常に多い。それどころか、かえってそれを時代おくれの卑劣な考え方をする人間として、軽蔑しているくらいです。けれど、僕の意見では、そこには大した危険はないと思うんです。だから、あなたも全くご心配には及びませんよ。なぜなら、彼らはけっして、深入りするようなことはないですからね。もっとも、時には前後を忘れた罰として、身のほどを知らせるために、笞で打ってやるのはもちろんよろしい。が、それでたくさんです。刑罰の執行人もいりゃしませんよ。彼らは自分で自分を打ちます。何しろ非常に心がけのいい連中ですからね。お互い同士にその面倒を見合う者もあろうし、中には自分の手で自分を罰する者もあるでしょう……その上、いろいろと公けに悔悟の意を表明するようなこともやるから――美しくって教訓的な効果がありますよ。要するに少しもご心配はいりませんん……そういう法則があるんですよ」
「いや、少なくともその方面では、多少わたしを安心させてくだすったが、しかしまだここにもう一つ困ったことがあるんですよ。一つ伺いますが、いったいその他人を殺す権利を持ってる連中、つまり『非凡人』は大勢いるんでしょうか、もちろん、わたしはその前に跪拝するのをいといませんが、しかしねえ、考えてもごらんなさい、そういう連中がやたらにたくさんあった日にゃ、気味が悪いじゃありませんか、え？」
「ああ、その心配もご無用です」とやはり同じ調子でラスコーリニコフは続けた。「概して新しい思想を持った人は、いや、それどころか、ほんのやっと何か新しいことを言いうるだけの人でも、ごくごく少数しか生まれてきません。不思議なくらいなんです。ただ一つ明瞭なのは、これらの範疇および細別に属する人の生まれる順序が、何かある自然の法則によって、極めて精密的確に定められているに相違ないということです。この法則は、もちろんいまのところわかっていません。けれど僕は信じます。それは必ず存在しています。やがてそのうちに明瞭になるかもしれません。で、人類の大部分すなわち材料は、ただある努力を経て、今日まで神秘になっている何かの過程とか、種族の混合とかいう方法によって、一しきり陣痛に悩んだ後、たとい千人に一人でも、独立不羈の精神をもった人間を生み出す、ただそれだけのためにこの世に存在しているのです。それよりもっと博大

な精神を持った人間は、一万人に一人くらいしか生まれてこないかもわからない（僕はわかりいいように概略のことを言ってるんですよ）。それより更に更に博大な精神の所有者は、十万人に一人です。天才的な人間は百万人の中に一人しか出て来ないし、偉大な天才、人類の完成者は、幾百万人と流れ過ぎた後に、やっと生まれ出るか出ないかです。ひと口に言えば、こうしたものがいっさい醸（かも）されている蒸溜器（レトルト）は、僕ものぞいて見たわけではないが、一定の法則は必ず存在している。また存在しなければならないはずです。そこには偶然などはあり得ません」

「いったい君らは二人とも冗談を言い合ってるのかい？」

とうとうラズーミヒンがこう叫んだ。「君らはお互いにごまかしっこでもしているのかい、いったい？　二人ともすわり込んで、お互いになぶりっこしてるじゃないか！　ロージャは、まじめなのかい？」

　ラスコーリニコフは無言のまま彼の方へ、青ざめたほとんどもの悲しげな顔を上げたが、なんとも答えなかった。この静かなもの悲しげな顔と並んで、ポルフィーリイの隠しても隠し切れない、ずうずうしい、いらいらした、無作法な冷嘲（れいちょう）が、ラズーミヒンには異様に感ぜられるのであった。

「ねえ、君、もし実際それがまじめなら……そりゃむろん君の言う通りだ、これは別に新しいものじゃない、われわれが幾度となく読んだり聞いたりしたものに、似たり寄ったりだ。しかし、その中で実際の創見、まぎれもなく君一人にのみ属している点は、恐ろしいことだが、とにかく君が良心に照らして血を許していることだ……失敬だが、そこには狂信的なところさえある……したがって、つまりこの点に君の論文の根本思想が含まれているわけだよ。ところが、この良心に照らして血を許すということは、それは……それは、僕に言わせると、血を流してもいいという公けの、法律上の許可よりも恐ろしい……」

「全くそうだ、その方がもっと恐ろしい」とポルフィーリイが応じた。

「いや、君はどうかして釣り込まれたんだ！　そこには考え違いがある。ぼく読んでみよう……君は自分で釣り込まれながら書いたんだ！　君がそんなことを考えるはずがない……ぼく読んでみよう」

「論文の中にはこんなことはまるでありゃしない。あれには暗示があるだけだ」とラスコーリニコフは言った。

「そうです、そうです」ポルフィーリイはじっと座に落ち着いていられない様子だった。「あなたが犯罪に対してどんな見解を抱いておられるか、今こそほぼ明瞭になりましたよ。しかし……どうもはなはだうるさいようで相済みませんが（全くご迷惑な話で、自分ながら気がさすくらいです！）実はですね、先刻の範疇（はんちゅう）の混同という誤解の場合については、十分安心のできるように説明してくださいました、しかし……それでもわたしはまだいろいろ、実際上の場合が気になるんですよ！　まあ、仮りに誰か一人の男もしくは青年が、自分をリカルガス

かマホメットのように妄想して……（未来のですよ、もちろん）さあやっつけろと、それに対する一切の障害を除去し始めたらどうでしょう……たとえば大遠征でも企てたとする、遠征には金がいる……そこで、遠征の軍資金の獲得にかかる……ねえ？」

ふいに隅の方で、ザミョートフがぷっと吹き出した。が、ラスコーリニコフはその方をふり向いて見ようともしなかった。

「それは僕も同意せざるを得ません」と彼は落ち着き払って答えた。「実際、そういう場合があるに違いありません。馬鹿なやつや見栄坊などは、えてこの誘惑にかかるんです。ことに青年がね」

「ね、そうでしょう。そこで、いったいどうなんです」

「なに、どうもしませんさ」とラスコーリニコフはにやりと笑った。「それは何も僕の責任じゃありませんからね。それは現在もそうだし、将来も常にそうです。現にあの男も（と彼はラズーミヒンをあごでしゃくった）、今しがた僕が血を許すって言いましたが、そんなことがいったいなんです？　人間社会は流刑や、監獄や、予審判事や、懲役などで、十分すぎるくらい保証されてるじゃありませんか――何を心配することがあります？　遠慮なく泥棒を捜したらいいでしょう！……」

「じゃ、もし捜し出したら？」

「当人の自業自得です」

「とにかく論理的ですね。ところで、その男の良心はどうなります？」

「そんなことはあなたの知った話じゃないでしょう？」

「なに、ただちょっと人道的感情でね」

「良心のある人間なら、自分の過失を自覚した以上、自分で勝手に苦しむがいい。これがその男に対する罰ですよ――懲役以外のね」

「じゃ、ほんとうに天才的な人間は」眉をしかめながらラズーミヒンが言った。「つまりその、殺人の権利を与えられてる人間は、自分の流した血に対しても、全然苦しんじゃならないのかい？」

「なぜこの場合ならないなんてことばを使うんだ？　そこには許可も禁止もありゃしない。もし犠牲を不憫だと思ったら、勝手に苦しむのがいいのさ……全体に苦悶と悩みは、遠大な自覚と深い心情の持主にとって、常に必然的なものなんだ。ぼく思うに、真の偉大なる人間はこの世において、大いなる哀愁を感じなければならないのだ」と彼は急にもの思わしげな、この場の話に不似合な調子で言い足した。

彼は目を上げて、思い沈んだように一同を見回し、微笑をもらして帽子をとった。彼は先ほどはいって来た時に比べると、あまり落ち着きすぎるくらいであった。彼自身もそれを感じていた。一同は立ち上がった。

「どうも、お叱りを受けるかどうか、お腹立ちになるかどうかしりませんが、わたしはどうしてもがまんしきれないんです」と再びポルフィーリイは口を切った。「どうかもう一つちょっとした質問を許していただきたいのです（いやはや、たいへんご迷惑をかけますね）、実は

一つちょいとした着想を発表したかったのです、ただほんの忘れないために……」
「よろしい、あなたの着想を言ってごらんなさい」ラスコーリニコフはまじめな青ざめた顔をして待ちもうけるように彼の前に立っていた。
「それはこうなんです……いや、なんと言ったら少しでもうまく現わせるかな……どうもその着想があまりふざけた……心理的なものなんで……実はこうです。あなたがあの論文をお書きになった時に、まさかそんな事はないはずに決まっていますが、あなたが自分自身をですな、へ、へ！　たといほんのこれっから先でも『非凡人』であり、新しいことばを発する人間だと、お考えにはならなかったでしょうか――つまり、あなたのおっしゃる意味でですよ……え、そうじゃありませんか？」
「大きにそうかもしれません」とラスコーリニコフはさげすむような調子で答えた。
　ラズーミヒンは身じろぎした。
「もしそうだとすれば、あなたもそんな事を決行されはしないでしょうかね。まあ、言ってみれば、何か生活上の失敗、窮迫のためとか、あるいは全人類に対する貢献のためとか、そういったような理由で――障害を踏み越えはなさらないでしょうかね……さよう、たとえば、人を殺して盗みをするといったようなことを……」
　こう言って、彼はふいにまた左の目で、彼に合図でもするように、ぽちりと一つまばたきした。そして、先とそっくりそのままに、声のない笑いを立てた。
「よし僕が踏み越したとしても、もちろんあなたになんか言わないでしょうよ」いどみかかるような傲慢な軽蔑の色を浮かべながら、ラスコーリニコフはそう答えた。
「いや、これはただちょっと伺っただけなんです。つまり、あなたの論文をよく呑み込むために、ただ文学的な意味でね……」
『ふう、なんという見え透いたずうずうしいやり口だ！』と嫌悪の情を感じながら、ラスコーリニコフは考えた。
「失礼ですがお断わりしておきます」と彼はそっけない調子で答えた。「僕は自分をマホメットだとも、ナポレオンだとも……すべて誰にもせよ、そうした種類に属する人間だと思っていませんから、したがって、そういう人間でない僕が、今言われたような場合、いかなる行動をとるかについて、ご満足のいくような説明を与えることはできかねます」
「いやご冗談でしょう、今日わがロシアにおいて、自分をナポレオンと思わないものがありますか？」急に恐ろしくなれなれしい態度で、ポルフィーリイは言った。
　その声の調子にすら、今度はもう特に明瞭なあるものがひびいていた。
「先週わがアリョーナ・イヴァーノヴナを斧でやっつけたのは、本当に何か未来のナポレオンとでもいったような者じゃないかな？」とだしぬけに隅の方から、ザミョートフがずばりと言ってのけた。
　ラスコーリニコフは無言のまま、しっかり目を据えてポルフィーリイをみつめた。ラズーミヒンは眉をしかめ

て、暗い顔をしていた。彼はもう先ほどから、何かある想念に打たれていたのである。彼は腹立たしげにあたりを見回した。暗い沈黙の一分間が過ぎた。ラスコーリニコフは身を転じて、出て行こうとした。

「もうお帰りですか！」と思いきり愛想よく彼の方へ手を差しのべながら、優しい調子でポルフィーリイは言った。「お近づきになって実に、実に愉快です。ご依頼の件については、けっしてご心配なく。わたしが言った通り、そのまま書いてお出しください。いや、それより直接わたしの役所へ寄ってくださるのが一番いい……二、三日のうちに……なんなら明日にでも。わたしは、さよう、十一時にはあちらへ行っております、間違いなく。何もかもすっかり片をつけましょう……そして、お話しましょう……あなたはあすこへ行った最後の一人だから、何か話してくださることもおできになるでしょうからね……」と彼はこの上もない好々爺（こうこうや）らしい顔つきでつけ足した。

「あなたは正式に僕を調べるつもりなんですか、すっかり道具立てをそろえて？」とラスコーリニコフは鋭く尋ねた。

「なんのために？　今のところそんな必要はありませんよ。あなたははきちがえなすったんです。もっとも、わたしは機会を逃したくないんでしてね……それでたいていの入質人とはもう会って話したんです……中には口供を取ったのもあります……で、あなたも最後の一人として……ああ、ちょうどいいついでだ！」と彼はふいに何やらうれしそうに叫んだ。「いいところで思い出した、おれもいったいどうしたんだろう！……」と彼はラズーミヒンの方をふり向いた。「ねえ、例のニコライのことで、君はあの時耳にたこのできるほどやいやい言ったっけね……なに、あれはわかってるよ、ちゃんとわかってるよ」彼はまたラスコーリニコフの方へ向き直った。「あの男はきれいなもんだ。だが、どうも仕様がないから、ミーチカも調べなくちゃならん仕儀になったんです……で、つまり用というのはこれなんですよ。要点はですね、あなたはあのとき階段を通りすがりに……失礼ですが、あなたが行かれたのは七時過ぎだったようですね！」

「七時過ぎです」とラスコーリニコフは答えたが、同時に、こんなことは言わなくてもよかったのにと、すぐ不快に感じた。

「で、七時過ぎに階段をお通りになったとき、せめてあなたくらいごらんにならなかったですかね――二階のあけ放しになったアパートの中に――ね、覚えておいでですしょう？　二人の職人がいたのを――あるいはその中の一人だけでも？　そこでペンキを塗っていたんですが、気がつきませんでしたか？　これは彼らにとって、ごくごく重大なことなんですがね！……」

「ペンキ屋！　いや、見ませんでした……」とラスコーリニコフは記憶をかき回すように、ゆるゆる答えた。と同時に、自分の全力を緊張させながら、少しも早くわなのあるところを看破しなければならぬ、何か見のがしはしないかと、苦痛に心臓のしびれる思いがした。「いや、

見ませんでした。それに、そんなあけっ放したアパートなんて、なんだか気がつきませんでしたよ……ああ、そうだ、四階のところで（彼はもう完全にわなを見破って、凱歌（がいか）を奏した）――一人の官吏が引っ越していたのを覚えています……アリョーナ・イヴァーノヴナの向かい合せの住まい……覚えていますよ……それなら僕はっきり覚えています……兵隊あがりの人夫が、長椅子みたいなものをかつぎ出して、僕を壁へ押しつけたんです……が、ペンキ屋は、いや、そんなものがいたような覚えはありません……それに、あけ放したアパートなんてものは、どこにもなかったようです。そうです、ありませんでした……」

「おい、君は何を言ってるんだ」ラズーミヒンはわれに返って、事情を考え合せたという風に、いきなりこう叫んだ。「だって、ペンキ屋が塗っていたのは、殺人の当日じゃないか？　ところが、この男の行ったのは三日前だぜ。君は何をきいてるんだ？」

「ふう！　すっかりごっちゃにしてしまった！」ポルフィーリイは額をたたいた。「いまいましい、僕はこの事件で頭の調子が狂ってしまったよ！」と彼は謝罪でもするように、ラスコーリニコフの方へふり向いた。「わたしはただもう誰かあのアパートで、七時過ぎに二人を見た者はないかと、そればかり一生懸命に考えてるもんだから、あなたにきいたらわかりゃしないかと、ついそんな気がしたようなわけで……すっかりごっちゃにしてしまった！」

「そんなら、もっと気をつけなくちゃだめだよ」ラズーミヒンは気むずかしげに注意した。

最後の会話は、もう控室で交わされたのであった。ポルフィーリイはいたって愛想よく、彼らを戸口まで見送った。二人は陰鬱な気むずかしい顔をして通りへ出、幾足かの間一言も口をきかなかった。ラスコーリニコフはほっと深く息をついた……

六

「……僕は信じない！　信じられない！」すっかりどぎもを抜かれてしまったラズーミヒンは、一生懸命にラスコーリニコフの推理をくつがえそうと努めながら、こうくり返すのであった。

彼らは早くもバカレーエフの下宿近くまで来ていた。そこではプリヘーリヤとドゥーニャが、先ほどから待ちかねているのであった。ラズーミヒンは、彼らがこのことを初めて口に出したということで、もうすっかりまごつき興奮してしまっていたので、話に夢中になっては、のべつ道のまんなかに立ち止まった。

「信じないがいいさ！」とラスコーリニコフは冷たい、無造作な薄笑いを浮かべて答えた。「君は例によって、なんにも気がつかなかったらしいが、僕は一言一言秤にかけて量っていたんだよ」

「君は疑り深いから、それで秤にかけたりなんかするんだよ……ふむ……しかし、実際ポルフィーリイの調子はかなり変だった。それは僕も承認する。ことにあのザミョートフの畜生がさ！……君の言う通りだ、やつには何か臭いところがあった。しかし、なぜだろう？　なぜだろう？」

「一晩のうちに考えを変えたのさ」

「いや、そりゃ反対だ、そりゃ反対だよ！　もしやつらにそんなばかげた考えがあるのなら、それこそ全力をあげてそれを隠してさ、自分のカルタを伏せておこうと骨折るはずだ。あとで急所を抑えるためにさ……ところが今は――あんなやり方はずうずうしくて、不注意すぎるよ！」

「もし彼らが事実を、つまり正真正銘の事実をつかんでいるか、あるいはいくらかでも根拠のある嫌疑を持っていたら、更に大きな勝利を得ようという期待から、本当に勝負を秘密にしたかもしれないさ（もっとも、本当ならずっと前に家宅捜索をしてるはずだ！）ところが、彼らには事実がない、一つもない――すべてが蜃気楼だ、すべてどっちにでも解釈のできることばかりだ、ふわふわした観念ばかりだ――だから、やつらはいけずうずうしいやり口でまごつかそうと、懸命になってるんだ。が、もしかすると、事実がないのに業を煮やして、いまいましさ半分にやけをやったのかもしれない。それとも、何か思わくがあるのかもわからん……あの男はなかなか聡明らしいからね……もしかすると、知ってるふりをして、僕をおどかそうとしたのかもしれない……そこには、君、またそれ相当の心理があるよ……だが、こんなことを説明するのは汚らわしい。よしてくれ！」

「全く侮辱だ、侮辱だ！　君の気持はよくわかる！　しかし……僕らはもう今はっきり言い出したんだから（とうとうはっきり言い出したのは、実にいいことだ、僕は喜んでるよ！）、だから今こそ僕も率直にぶちまけていうが、僕はずっと前から、やつらがそんな考えをいだいているのに、気がついてたんだ、ずっとこの間じゅうか

らね。もちろん、ほんのあるかなしの疑念で、かすかにうごめいている程度なんだがね。しかし、うごめいている程度にもせよ、いったいなぜだろう？　どうしてそんな失敬な考えを起こしたんだろう！　どこに、どこにそんな根拠がひそんでるんだろう？　それで僕がどんなに憤慨したか、君にはとても想像ができないくらいだよ！

いったいなんてえことだ？　貧乏とヒポコンデリイに悩み抜いてる不遇な大学生が、熱に浮かされ通しの恐ろしい大病になる前日、ことによると、もう病気が始まっていたかもしれない時にさ、（いいかい！）この疑り深くって自尊心の強い、おのれの真価をわきまえている男が、もう半年も前から自分の部屋に閉じ籠(こも)って、誰にも会わずにいたあげく、ぼろを身につけ底の破れた靴をはいてさ、どこの馬の骨ともしれない警官連の前に立ち、彼らの侮辱をじっと辛抱している。そこへ思いがけぬ借金――七等官チェバーロフに渡った期限の切れた手形を、鼻先へ突きつけられる。それに、腐ったペンキのにおい、列氏三十度の暑さ、しめ切ったむんむんする空気、人混み、前の日にたずねたばかりの人間が殺された話――こうしたものがいっときに、空腹の体へきたんだからね！　これがどうして卒倒しないでいられるもんか！

ところがこれを、これをいっさいの根拠にしようてんだからなあ！　ちくしょう！　むろんいまいましい、そりゃ僕もよくわかる。しかしね、ロージャ、僕がもし君だったら、やつらを面と向かって笑い飛ばしてやる。いや、それよりいっそ、やつらの顔へたんをひっかけてやる。せいぜい粘っこいのをね。そして四方八方へ二十くらい頬げたを見舞ってやらあ。これがもっともりこうだ、いつでもこの手をやるといいんだよ。僕ならそれで片をつけてしまうなあ。君、なんのくそ！　という気になって、元気を出してくれ！　恥かしいじゃないか！」

『だが、こいつなかなかうまく説明したぞ』とラスコーリニコフは考えた。

「なんのくそだって？　だが、明日はまた尋問だぜ！」と彼は悲痛な調子で言った。「あんなやつらに弁解じみたことを言わなくちゃならんのかなあ？　僕は昨日あの酒場で、ザミョートフ輩を相手に自ら卑しゅうしたのさえも、心外なくらいだよ……」

「ちくしょう！　僕自分でポルフィーリイのところへ行ってやろう！　そして、親戚としてやつの胸ぐらを抑えつけて、何もかもすっかりぶちまけさしてやろう！　ザミョートフなんかもう……」

『やっと気がつきやがった！』とラスコーリニコフは考えた。

「待てよ！」突然彼の肩を抑えながら、ラズーミヒンは叫んだ。「待てよ！　君は間違ったことを言ったんだ！　僕よく考えてみたが、君は間違ったことを言ってる！　だって、あれがなんのトリックなもんか？　君は職人云々(うんぬん)の質問をトリックだと言ってるが、よくかみ分けてみろ。もし君があれをやったのなら、職人が……壁を塗っていたのを見たなんて、かりにも口をすべらすだろうか？　どうしてどうして、よしんば見たにしろ、なんに

も見なかったというのがあたりまえだよ！　自分に不利なことを自白するやつが、どこにあるもんかね？」
「もし僕があれをやったとすれば、きっと職人もアパートも見たと言うね」目に見えて嫌悪の色を浮かべながら、いやいやそうにラスコーリニコフは答弁を続けた。
「でも、なんだって自分に不利なことを言うんだい？」
「なぜって見たまえ、尋問のときに何もかもいっさい合切、知らぬ存ぜぬの一点ばりで押し通すのは、ただ百姓かずぶ無経験な新米のすることだよ！　多少でも教養があり経験のある人間なら、必ずできるだけやむを得ない外面的な事実を、すっかり自白しようと努めるに相違ない。ただ別な原因を捜し出して、事実にすっかり違った意味を与え、全然べつな光りに照らし出して見せるような、何かこう思いもよらぬ特性をちょっとはさみ込むのだ。ポルフィーリイも、僕が必ずそういう答弁の仕方をして、本当らしく思わせるために見たと答えた上、説明の意味で何かちょっとはさむだろうと、それを当てにしてたに違いないんだ……」
「だってあの男はすぐその場で、二日前あそこに職人がいるわけはないから、したがって、君はどうしても凶行のあった日の七時すぎに、あそこにいたに相違ないと、こう言いそうなはずじゃないか。つまり、つまらんことでつり出して尻尾を抑えたろうよ！」
「そうなのさ、やつはつまりそれを当て込んでたのさ。僕がよく考える暇がなく、少しでもまことしやかに答えようとあせって、二日前に職人のいるはずのないことを、忘れるだろうというわけさ」
「どうしてそんなことが忘れられるんだ！」
「大きにありがちなこったよ！　そういうごくつまらないことで、狡猾（こうかつ）な連中が一番よくまごつくものさ。人間が狡猾なら狡猾なだけ、そいった小さなことで尻尾をつかまれようとは、思いもそめないからね。ごく狡猾な人間は、つまり思い切ってくだらないことで、尻尾を抑えなくちゃならないんだ。ポルフィーリイは、君の思ってるほど、まんざらの馬鹿じゃないよ……」
「もしそうだとすりゃ、あいつは卑劣漢だ！」
　ラスコーリニコフは笑い出さずにいられなかった。がそれと同時に、彼は最後の説明を試みた時、ああまで活気づいて乗り気になったのが、不思議に思われた。それまでの会話は気むずかしい嫌悪の気持で、仕方なしに続けていたのではないか。
『おれもある点では、調子に乗るんだな！』と彼は腹の中で考えた。
　しかしそれとほとんど同じ瞬間に、思いもよらぬ不安な想念に打たれたかのように、彼は急に落ち着きがなくなった。不安はしだいに増してきた。二人はもうバカレーエフの下宿の入り口まで来ていた。
「君一人で行ってくれないか」とだしぬけにラスコーリニコフは言った。「僕すぐ引っ返して来るから」
「どこへ行くんだ？　もう来てしまったんじゃないか！」
「僕ちょっと、ちょっと、用があるんだ……三十分たったらやってくる……二人にそう言っといてくれないか」

「じゃ、勝手にしたまえ、僕も一緒について行くから！」
「なんだい、君まで僕を苦しめたいのか！」と彼はなんともいえぬ悲痛な焦燥と、この上もない絶望を声に響かせながら叫んだので、ラズーミヒンはもうあきらめてしまった。ラズーミヒンはしばらく入り口の階段に立って、ラスコーリニコフが自分の横町の方角へ足早に歩いて行くのを、むずかしい顔をしてながめていたが、ついに歯を食いしばり拳を固めて、今日にもさっそくポルフィーリイのやつをレモンのようにしぼり上げてやろうと心に誓いながら、二人があまり長く姿を見せないので、もうそろそろ気をもみかけているプリヘーリヤを安心させようと、階段をのぼって行った。

ラスコーリニコフが自分の家までたどり着いた時――こめかみは汗でびっしょりぬれ、息づかいはさも苦しそうであった。彼は急いで階段をのぼり、あけ放しになっている自分の部屋へはいると、そのまま鉤をかけてしまった。それから、にわかにぎょっとした風で、気でも違ったように、あのとき贓品をかくしておいた片隅の壁紙の穴へ駆け寄って、その中へ手を突っ込み、隅々隈々のこりなく、折れ目までひっくり返して調べながら、二、三分間、念入りに穴の中を探りまわした。なんにもないことを確かめてから、彼は立ち上り、ほっと息をついた。さきほどバカレーエフの家の玄関口まで行き着いた時、ふと心の迷いが起こったのである。ほかでもない何かの品、たとえば鎖かカフスボタンか、あるいはそれを包んだ紙きれで老婆が手ずから上書きしたものが、あの時どうかしたはずみですべりぬけ、どこかの隙間へ落ち込んだかもしれない。そうしたら後日になって、思いがけないいやおう言わさぬ証拠となって、ふいに彼の目の前へ突き出される、そういうことがないとも限らない。

彼はもの思わしげな様で、じっと立っていた。恥かしめられたような、半ば無意識な怪しい微笑が、その唇にただよっていた。とうとう彼は帽子をとり上げ、そっと部屋を出て行った。彼の頭はこんがらかっていた。彼は物思わしげに門の下へおりて行った。

「ほら、ちょうどその人が見えましたよ！」と高い声でこう叫ぶものがあった。

彼は頭を上げた。

庭番が自分の小部屋の戸口に立って、誰やらあまり背の大きくない男に、彼をさして見せていた。それは部屋着のような服にチョッキを着込み、遠目には女のように見える、一見して町人ていの男だった。脂じみた帽子をかぶった頭は下の方へがっくりとたれ、全体の姿もなんだか背中が曲がっているような感じだった。ひねて皺の寄った顔は、年が五十も越していることを示している。小さなどんよりした目は気むずかしそうにきびしく、なんだか不満らしい表情をしていた。

「なんだね？」と庭番の方へ近寄りながら、ラスコーリニコフは尋ねた。

町人は額ごしに横目を使って、彼をじっと注意深く落ち着き払って見つめた。それから、ゆっくりとくびすを返して、ひと口も物を言わずに門の中から通りへ出て行

った。
「いったいどうしたんだ！」とラスコーリニコフは叫んだ。
「誰だか知りませんが、あの男があんたの名を言って、ここにこういう大学生がいるか、誰のところに下宿してるか、なんて尋ねるんですよ。そこへあんたがおりて見えたから、わたしが指で教えてやったら、さっさと行っちまうじゃありませんか。ほんになんてこった」
庭番もやはりいくらかけげんそうな様子だったが、大したことでもなく、またちょっと小首をひねった後、くるりと向きを変え、自分の小部屋へ引っ込んでしまった。
ラスコーリニコフは、町人のあとを追って駆け出すと、すぐにその男を見つけた。相変わらず規則ただしい悠々とした足どりで、じっと足もとをみつめながら、何やらしきりに考えるらしく、通りの向こう側を歩いて行く。彼は間もなく男に追いついたが、しばらく後ろからついて行った。とうとうその中に男と並んで横からその顔をのぞき込んだ。向こうもすぐ彼に気がついて、すばやくちらりと彼を見やったが、また目を落としてしまった。こうして、彼らはものの一分間ばかり、たがいに体を並べながら、無言のまま歩いて行った。
「あなたは僕をお尋ねになったんですね……庭番のところで？」とうとうラスコーリニコフは口を切ったが、なぜかばかに小さい声だった。
町人はなんの返事もしなければ、ふり返ろうともしない。二人はまた黙りこんでしまった。
「あなたはいったいどうしたというんです……人を尋ねて来ながら……黙ってるなんて……いったいなんてことです？」
ラスコーリニコフの声はとぎれ勝ちで、ことばはどうしたものか、はっきり発音されたがらないような感じだった。
町人も今度は目を上げて、気味のわるい陰鬱なまなざしで、じろりとラスコーリニコフを見やった。
「人殺し」とふいに男は、低いけれど明瞭な、しっかりした声で言った。
ラスコーリニコフは男のかたわらを歩いていた。彼の足は急に恐ろしく力抜けがし、背中がぞうっと寒くなった。心臓は一瞬間、まるでかけてあった鉤がはずれたように、いきなりどきんとした。こうして二人はまた百歩ばかり、全く無言のまま並んで行った。
町人は彼を見もしない。
「何を言うんです……何を……誰が人殺しなんです？」やっと聞きとれるほどの声で、ラスコーリニコフはつぶやいた。
「お前が人殺しだ」男は一そうはっきり句を切りながら、腹の底までしみ込むような声で言った。それは憎々しげな勝利の微笑を帯びているような風だった。そして、またしてもラスコーリニコフの真っ青な顔と、その死人のような目をひたとみつめた。
二人はその時四つ角へ近づいた。町人は左手の通りへ曲がって行くと、後ろも見ずにすたすた歩き出した。ラ

スコーリニコフはその場にたたずんだまま、長い間その後ろを見送っていた。男は五十歩ばかり行ったころ、くるりと振り返って、みじろぎもせずに立っているラスコーリニコフをながめた。それは彼の目にも見えた。ラスコーリニコフは、はっきり見分けることはできなかったけれど、今度も男があの冷たい憎しみにみちた、勝ち誇ったような微笑で、にやりと笑ったような気がした。

ぐったりとしたような静かな足どりで、膝頭（ひざがしら）をがたがた震わせながら、まるで凍えきったようになったラスコーリニコフは、もと来た方へ引っ返し、自分の小部屋へのぼって行った。帽子を脱いでテーブルの上に置き、十分ばかりというもの、そのかたわらに身じろぎもせずに立っていた。それから力なげに長椅子の上に倒れて、かすかなうめきを立てながら、病人のようにその上へ長くなった。目は閉じられた。こうして、彼は三十分ばかりじっとしていた。

彼は何も考えなかった。ただほんの何かの想念、というより想念の断片か、それとも幻想めいたものが、秩序も連絡もなく頭をかすめるだけであった――以前子供の時分に見たか、あるいは、どこかでたった一度会ったばかりで、とても思い出しそうになかった人たちの顔や、V教会の鐘楼や、料理屋の玉突台や、玉突台のそばにいた士官や、どこかの地階にある煙草店（たばこや）の葉巻のにおいや、居酒屋や、汚水でびしょびしょになった上に、卵の殻の散らかっている、いつもほとんど真暗な裏梯子（うらばしご）……と、どこからか日曜日らしい鐘の音が響いてくる……こうしたものが入り変わり立ち変わり、旋風のように渦巻くのであった。中には気持のいいものもあって彼はそれにすがりつこうとしたが、それはすぐに消えてしまった。全体の感じからいうと、何かしら中の方で彼を押しつけるようだったが、それも大したことではない。どうかすると、かえっていい気持だった……軽い悪寒はまだ去らなかったけれど、これも同じようにほぼこころよい感触だった。

ふとラズーミヒンの忙しそうな足音と、その声を聞きつけたので、彼は目を閉じて、寝たふりをした。ラズーミヒンはドアを開けて、しばらく思案でもするように、しばらく敷居の上に立っていた、やがて、そっと部屋の中へ一足踏み込んで、用心深く長椅子に近づいた。ナスターシャのささやきが聞こえた。

「さわらないどきなさい。ぐっすり寝かしといた方がいいよ。あとで食がすすむから」

「そりゃそうだ」とラズーミヒンは答えた。

二人は用心深く外へ出て、ドアを閉めた。また三十分ばかりたった。ラスコーリニコフは目を開いた。そして、両手を頭のうしろにかって、再び仰向けに寝返り打った。……

『あの男は何者だろう？　あの地の底からわき出たような男は、いったい何者だ？　どこにいて何を見たんだろう？　あいつは何もかも見ていたんだ、それはもう間違いない。それにしても、いったいあの時どこに立って、どこから見ていたんだろう？　それならなぜ今になっ

て、床の下からわいたように出て来たんだ？　それに、どうして見ることができたんだろう――そんなことができるだろうか？……ふむ……』

ぞっとする悪寒に身を震わせながら、ラスコーリニコフは考え続けた。『またミコライがドアのかげで見つけたサック、これだってもあり得べきことだろうか？　証拠になる？　十万分の一ほどの小さなものでも、見落としたら最後――エジプトのピラミッドくらいの証拠になるんだ！　はえが一匹飛んでいたが、あれでも見たのか！　そんなことがあってたまるものか？』

と、彼はにわかに自分が力抜けのしたことを――肉体的に力抜けのしたことを感じて、嫌悪の念を覚えた。『おれはこれを知ってなければならなかったのだ』と彼は苦い薄笑いをもらしながら考えた。『どうしておれは自分自身を知っていながら、自分自身を予感していながら、斧などをとって、血まみれになるようなことをあえてしたのか？　おれは前もって知っておかなけりゃならなかったのだ……いや、なに、おれは前もって知っていたんじゃないか！……』と彼は絶望のあまりうめくように言った。

時々彼はある想念の前に、身じろぎもせずに立ち止まった。

『いや、ああいう人間は作りが違うんだ。すべてを許されている真の主権者は、トゥーロンを廃墟にしたり、パリで大虐殺を行なったり、エジプトに大軍を置き忘れたり、モスクワ遠征に五十万の大兵を消費したりしたあげく、ヴィリナではいっさいをしゃれのめして平気でいる。しかも死んだ後では、みんなで彼を偶像に祭り上げるんだからなあ――してみると、すべてが許されてるんだ。いやこうした人間の体は肉じゃなくて、青銅でできてるらしい！』

ある思いがけない見当違いの想念が、ふいに彼を笑い出させないばかりだった。

『ナポレオン、ピラミッド、ワーテルロー――それから一方には、寝台の下に赤皮の長持を入れている、やせひょろけたきたならしい小役人の後家の金貸し婆あ――ふん、なんぼポルフィーリイでも、これをこなすのはたまったものじゃない！……やつらにどうして消化しきれるもんか！　美的感覚がじゃまをするからな――「ナポレオンが婆さんの寝台の下にはい込むだろうか！」てなわけで！　ええっ、なんてやくざな！』

時々瞬間的に、彼は熱に浮かされているような気がした。彼は熱病的な歓喜の気分に落ちた。

『婆あなどはくだらない些細事だ！』と彼は熱くなって、意気ごみ激しく考えた。『婆あはあるいは過失かもしれないが、あんなものは問題じゃない！　婆あは単なる病気だったのだ！　おれは少しも早く踏み越したかったんだ……おれは人間を殺したんじゃない、主義を殺したんだ！　主義だけは殺したが、踏み越すことは踏み越せなくて、こっち側に残ってしまった……ただ殺すことだけやりおおせたんだ。いや、それさえ今になってみると、やりおおせなかったんだ……ところで主義の方は、ラズ

ーミヒンの馬鹿はまたなんだって、さっき社会主義者を罵倒(ばとう)したんだろう。彼らは仕事好きな、商売に抜け目のない連中で、「人類一般の福祉」のために働いてるじゃないか……だがおれには生は一度与えられるだけで、二度とはやって来やしない。おれは「人類一般の福祉」を待っているのはいやだ、おれは自分で生きたいんだ。さもなければ、むしろ生きない方がましだ。なに、おれはぼんやり「人類一般の福祉」を待ちながら、自分の目腐れ金をふところに握りしめて、飢えに迫っている母の傍を素通りするのがいやなだけだったんだ。「おれは人類一般の福祉を建設するために、煉瓦(れんが)を一つ運んで行ってるんだ。だから心の慰めを感じてるんだ」だとさ。はっは！　どうして君らはおれをすっぽかしたんだ？　おれだって、一度きりっか生きられないんだ。おれだって、やはり生きたかろうじゃないか……ええっ、おれは美的しらみだ、それっきりさ』ふいに気ちがいのように笑い出して、彼はこうつけ加えた、『そうだ、おれは実際しらみだ』彼はひねくれた喜びをもってこの想念にしがみつき、それを掘り返したり、玩具(おもちゃ)にしたり、慰んだりしながら考え続けた。『それはもう、一つ二つの理由だけで明瞭だ。第一に、今おれは自分がしらみだってことを考察していることだ。第二に、おれはまる一月の間、おれのこの計画は自分の欲望や気まぐれのためでなく、立派な気持のいい目的のためだなどといって、万知万能の神を証人に引っ張り出そうとして、とんだご迷惑をかけたことだ――はっは！　それから第三には、実行に当たって、できるだけの正義と、中庸と、尺度と、数学を遵奉(じゅんぽう)しようと決心して、多くのしらみの中からもっとも無益のやつを選び出し、しかもそいつを殺してから、自分の第一歩にいるだけのものを、かっきり過不足なしに取ろうとしたことだ。（残った金は、つまり遺言状によって修道院行きというわけなんだ――はっは！）……こういうわけだから、だからおれはまぎれもないしらみだ』と彼は歯がみをしながらつけ足した。『もしかすると、おれ自身の方が殺されたしらみより、もっといやなけがらわしい人間かもしれない。そして、殺してしまったあとで、きっとこんな事をいうだろうと、前から予感していたんだ！　ああ実際、この恐ろしさに比べうるものが、何かほかにあるだろうか！　おお、この俗悪さ！　この卑劣さ！……ああ、今のおれはよくわかった――馬上に剣をふるいながら、アラーの神これを命じたまう。服従せよ、ふるいおののける卑しき者ども！　と呼号した、かの「予言者」がよくわかる！　どこかの街の真中にすばらしい放列をしいて、罪があろうとなかろうと、手当たりしだいにどんどん打ち殺し、弁解めいたことさえ言わなかった「予言者」は本当だ。服従せよ、震いおののける卑しき者ども、希望など持つな、きさまらの知ったことじゃない！……これでいいんだ！　おお、どんなことがあっても、どんなことがあってもおれは婆あを許しはせんぞ！』

髪の毛は汗でぐっしょりになり、わななく唇はからからに乾き、じっとすわった目は天井にそそがれていた。

『母、妹、おれはどんなに二人を愛していたか！　それなのに、どうして今は二人が憎いのだろう？　そうだ、おれは二人が憎いのだ。肉体的に憎いのだ。そばにいられるのがたまらないのだ……さっきもおれはそばへ寄って、母に接吻したが、今でも覚えている……母を抱きながら、もしあのことがしれたら、などと考えるのは……それなら何もかも話してしまおうか？　それはもうおれしだいなんだ……ふむ！　母もおれと同じような人間でなければならないはずだ』彼はまるで襲いかかってくる悪夢と戦うように、必死になって考えながら、そうつけ足した。『ああ、今おれはあの婆あが憎くってたまらない！　もしあいつが息を吹き返したら、おれはきっともう一度殺すに違いない！　可哀想なリザヴェータ！　なんだってあんな所へひょっくり出て来たんだろう！　だが、不思議だな、なぜおれはあの女のことをほとんど考えないんだろう、まるで殺しなんかしなかったように！……リザヴェータ！　ソーニャ！　二人ともつつましい目をした、つつましい可哀想な女だ……やさしい女たち……なぜあの女たちは泣かないのか？　なぜうめかないのか？……あの女たちはすべてを与えながら……つつましい静かな目つきをしている……ソーニャ、ソーニャ！　静かなソーニャ……』

彼は前後不覚になってしまった。で、いつの間にどうして往来のまんなかに立っているのか、覚えのないのが不思議に感じられた。もう夕方もだいぶ遅いころだった。たそがれの色も濃くなり、満月が刻々に冴えていった。けれど、空気はどうしたのか恐ろしくむし暑かった。人々は群れをなして往来を歩いている。職人や用のある連中は家々に別れて行き、その他の者はぶらぶら歩いている。石灰と、埃と、たまり水のにおいがする。ラスコーリニコフは心配そうな沈んだ様子で歩いた。彼は何かつもりがあって家を出たので、何かしなければならない、急がなければならない、ということだけはよく覚えていたけれど、それがなんだったか――とんと忘れてしまったのである。ふと彼は立ち止まった。通りの向こう側の歩道に一人の男が立って、彼を手招きしているのを見つけたのである。彼は通りを横ぎり、その男の方へ行った。と、男はふいにくるりと身をひるがえして、まるで何事もなかったように、頭をたれたままふり向きもしなければ、自分で呼んだような素振りも見せず、ずんずん歩き出した。『おい、しっかりしろよ、ほんとうにあの男が呼んだのかい？』とラスコーリニコフは考えたが、それでもあとを追い始めた。と、十歩も行かないうちに、彼はたちまちその男に気づいて、ぎょっとした。それは例の部屋着を着て、同じように背を丸くしたさっきの町人だった。ラスコーリニコフは少し離れてついて行った。心臓はどきどき動悸を打った。やがてとある横町へ曲がった――男は相変わらずふり向こうとしない。『おれがつけて行くのを知ってるだろうか？』とラスコーリニコフは考えた。町人はある大きな門内へはいった。ラスコーリニコフは急いで門へ近づいた。そして、男が振り返りはしないか、自分を呼びはしないかと、しばらくじっ

と見ていた。するとはたして、男は門の下を通り抜けて、裏庭へ足を踏み入れた時、急にくるりと振り返り、どうやら再び彼を手招きしたようである。ラスコーリニコフはすぐさま門の下を通り抜けたが、裏庭にはもう町人の姿が見えなかった。してみると、男はすぐとっつきの階段をのぼって行ったに相違ない。ラスコーリニコフはそのあとを追って行った。はたして二階ばかり上の方で、誰かの規則ただしい、悠々とした足音がまだ聞こえている。不思議なことには、階段はなんとなく見覚えのあるものだった！　現にもう一階の窓が見える。月の光りがわびしげに神秘めかしく、ガラスを通してさし込んでいる。やがてもう二階目だ。やっ！　これは例の職人のペンキを塗っていたアパートだ……どうしてすぐに気がつかなかったのか！　先へ行く人の足音は聞こえなくなった。『してみると、やつは立ち止まったか、どこかへ隠れたかしたんだな』ああ、もう三階だ、先へ行ったのだろうか？　上の方はなんという静かさ、恐ろしいくらいだ……けれども、彼は進んで行った。彼自身の足音が彼を脅かし、不安にした。ああ、なんという暗さ！　町人はてっきりどこかこの辺の隅に隠れたに違いない。あっ！　例の住まいは階段へ向かったドアをすっかりあけ放してある。彼はちょっと思案して、はいって行った。控室はまっくらで、がらんとして人気なく、何もかも運び出してしまったようだ。そっと爪先立ちで、彼は客間へ通って行った。部屋は一面月の光りにさえざえと照らされている。ここは何もかも元のままだった。椅子、鏡、黄色い長椅子、額入りの画。大きな丸い銅紅色をした月が、まともに窓からのぞいている。『これは月のせいでこんなに静かなんだ』とラスコーリニコフは考えた。『月は今きっと謎をかけてるんだ』彼は立って待っていた。長いこと待っていた。月光がしんとすればするほど、心臓の鼓動はいよいよ激しくなり、痛いくらいであった。どこまでもしんと静まり返っている！　ふと、木片でも折ったように、一瞬間、ものの裂ける乾いた音がした。そして、あたりは再び死んだようになった。目をさました一匹のはえが、急に勢いよく飛んだ拍子に、ガラスへぶっつかって、哀れげにぶんぶん鳴き始めた。ちょうどこの瞬間、片隅の小さい戸棚と窓の間の壁にかかっている女外套らしいものが見分けられた。『どうしてあんなところに女外套があるんだろう？』と彼は考えた。『先あんなものはなかったのに……』そっと忍び寄ってみると、外套のかげに誰か隠れているらしいのに気がついた。彼は用心深く手で外套をのけてみた。と、そこには椅子が置いてあり、その椅子の上に老婆が腰かけていた。すっかり体を前へ折り曲げて、頭を下へたれているので、どうしても顔を見分ける事ができなかったけれど、それはまさしく彼女である。彼はしばらくその前に立っていた。『こわいんだな！』と彼は考えて、そっと輪さから斧を抜き出し、老婆の脳天目がけて打ちおろした。一度、もう一度。が不思議にも、彼女は斧の打撃にも身じろぎさえしない、まるで木で作ったもののようである。彼はぎょっとして、なおも近く身をかがめ、老婆をと見こう

見し始めた。すると老婆もいよいよ低く頭をたれた。その時彼は床につくほどすっかり身をかがめて、下から彼女の顔をのぞき込んだ。のぞいて一目みると、死人のようになってしまった。老婆は腰かけたまま笑っている――彼に聞かれまいと一生懸命に辛抱しながら、聞きとれないくらい静かに笑っているのだ。ふと寝室のドアがごく細目に開かれて、そこでやはり笑ったり、ひそひそささやいたりしているような気がした。彼は狂憤のとりこになって、力まかせに老婆の頭を打ち始めた。けれども斧の一撃ごとに、寝室の笑声とささやきはますます高く、はっきり聞こえてきた。そして、老婆は全身をゆすぶりながら笑うのである。彼はやにわに逃げ出そうとしたが、控室はもう人でいっぱいだった。階段へ向った戸口は、どこもかしこもあけ放され、階段の踊り場にも、それから下にも――人の頭がうようよつながって、みんなこちらを見ている――しかし、誰も彼もが息をひそめて、無言のまま待っているのだ！……彼は心臓が苦しくなり、足は生えついたように動かなくなった。……彼は声を立てようとして――目をさました。

彼は苦しげに息をついた――けれど不思議なことには、夢が依然として続いているように思われた。部屋のドアはあけ放されて、敷居の上にはかつて見たことのない男が立ったまま、じっと彼を見まもっているではないか。

ラスコーリニコフは、まだ十分目を開く間もなく、すぐにまた閉じてしまった。彼は仰向きになったまま、身じろぎもしなかった。

『これは夢の続きかな、違うかな？』と彼は考えた。そして、一目だけ見ようと思って、ごくわずかだけ気づかれぬように、もう一度まつ毛を上げて見た。見知らぬ男はまだ元の所にたたずみ、彼の方をうかがい続けている。

ふいに男は用心深く敷居をまたいで、うしろ手にそろっとドアを閉め、テーブルへ近寄って、一分ばかり待っていた――その間ずっとラスコーリニコフから目を放さなかったので――それから静かに、音のしないように、長椅子の傍の椅子に腰をかけた。帽子をわきの床において、両手をステッキの上に重ね、その上へあごをのせた。見うけたところ、長く待つ用意らしい。ラスコーリニコフがしばたたくまつ毛を通して見分け得た限りでは、この男はすでに若い方でなく、ほとんど真っ白なくらい薄色の濃いひげをはやした、肉づきのいい男であった……

十分ばかりたった。まだ明るくはあったが、もうそろそろ暮れに近い。部屋の中は森閑と静まり返っている。階段の方からも、物音一つ聞えてこなかった。ただ一匹の大きなはえが、勢いよく飛んだはずみに、窓ガラスにぶっつかっては、ぶんぶん鳴いているだけであった。とうとう、そうしているのがたまらなくなってきた。ラスコーリニコフはいきなり身を起こし、長椅子の上へすわった。

「さあ、言ってください、いったいあなたは何用なんです？」

「いや、わたしもあなたが眠っていらっしゃるのじゃな

く、ただ寝たふりしていられるのを、ちゃんと知っていましたよ」と見知らぬ男は落ち着き払って笑いながら、奇妙な調子で答えた。「自己紹介をお許しください。わたしはアルカージイ・イヴァーヌイチ・スヴィドリガイロフですよ……」